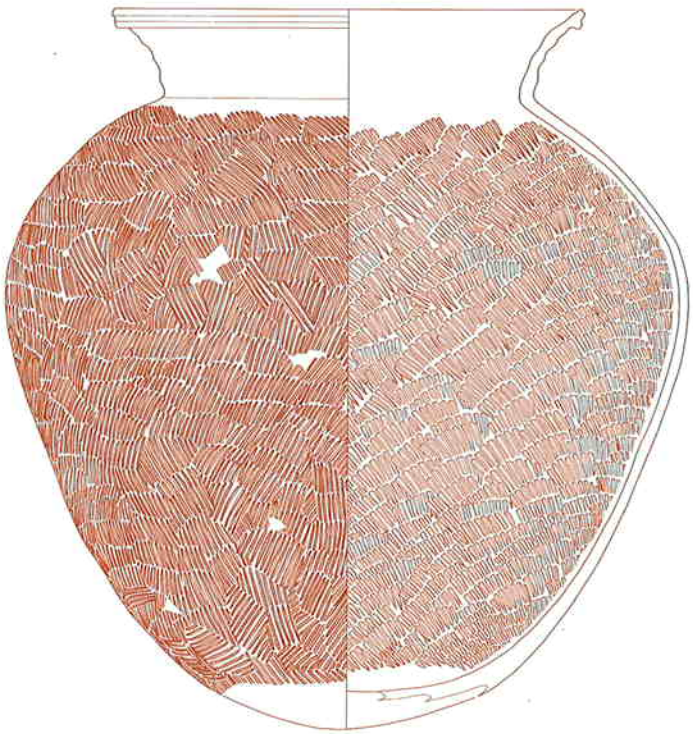
乙 部 遺 跡 群

乙 部 方 八 丁 遺 跡

―― 平成６・７・９年度発掘調査概報 ――



１９９８．３

盛岡市教育委員会

乙部遺跡群

乙部方八丁遺跡

―― 平成６・７・９年度発掘調査概報 ――

１９９８．３

盛岡市教育委員会

例　　言

1．本書は乙部遺跡群のうち乙部方八丁遺跡第１～４次（平成６・７・９年度）発掘調査の概報である。

2．遺構実測図における方位は、国家座標第Ｘ系による座標北を示す。平面位置は下記の平面直角座標Ｘ系を座標変換した調査座標を図に表示した。

- 調査座標軸方向　　第Ｘ系に準ずる
- 調査座標原点　　Ｘ－43,500.000　Ｙ　31,500.000

3．平成９年度に、乙部地区発掘調査測量基準点設置を行った。全７点の成果は以下のとおり。

（単位：m）

No.	平面直角座標値	調査座標値	真北方向角	標高
1	Ｘ－43,672.159 Ｙ　31.984.508	ＲＸ－172.159 ＲＹ　484.508	－0° 14′ 14″ .9	116.525
2	Ｘ－43,680.155 Ｙ　31,832.413	ＲＸ－180.155 ＲＹ　332.413	－0° 14′ 10″ .8	114.323
3	Ｘ－43,436.096 Ｙ　31,710.042	ＲＸ－　63.902 ＲＹ　210.042	－0° 14′　7″ .6	118.472
4	Ｘ－43,747.475 Ｙ　31,555.873	ＲＸ－247.475 ＲＹ　55.873	－0° 14′　3″ .4	111.260
5	Ｘ－43,895.084 Ｙ　31,658.769	ＲＸ－395.084 ＲＹ　158.769	－0° 14′　6″ .1	114.644
6	Ｘ－44,081.972 Ｙ　31,627.769	ＲＸ－581.972 ＲＹ　127.769	－0° 14′　5″ .3	115.643
7	Ｘ－44,313.098 Ｙ　31,630.677	ＲＸ－813.098 ＲＹ　130.677	－0° 14′　5″ .3	119.099

4．高さは標高値をそのまま使用した。

5．土層断面図は堆積過程を重視し、線号の太さによって堆積の違いを表した。土層注記は各層理ごとに本文でふれ、細分される層位については特記事項のない限り割愛した。なお層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（1994 小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業㈱発行）を参考にした。

6．遺構挿図及び遺物写真図版に付した番号は遺物挿図番号を表す。

7．重複関係を表す遺構挿図においては、線の種類を使い分けた。実線は説明しようとする遺構、一点鎖線はこれ以外の遺構を表す。

8．乙部方八丁遺跡における遺構記号・番号は次のとおり。

遺構	記号	遺構	記号	時代	番号
竪穴住居跡	ＲＡ	炉跡	ＲＦ		
建物跡	ＲＢ	溝跡	ＲＧ	縄文～弥生	001 ～ 499
柱列跡	ＲＣ	配石・集石	ＲＨ		
土坑	ＲＤ	井戸跡	ＲＩ	古代以降	501 ～
竪穴	ＲＥ	その他	ＲＺ		

9．出土土器の区分は須恵器・あかやき土器・土師器にわけた。

10．使用した地図は建設省国土地理院発行の５万分の１「盛岡」の地形図である。

11．本書の編集執筆は、教育委員会文化課文化財係　藤岡光男・黒須靖之・似内啓邦、八木光則・室野秀文・菊池与志和・津嶋知弘・三浦陽一・神原雄一郎・藤村茂克・太田代由美子・佐々木真史が担当した。

12．発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、盛岡市教育委員会に保管している。

目　　次

例　　言
目　　次
挿 図 目 次
表　目　次
写真図版目次
遺物の表現について

Ⅰ　遺跡の環境
　1．位置と地形 …… 1
　2．歴史的環境 …… 2
　3．これまでの調査 …… 4
　4．平成６・７・９年度の発掘調査体制 …… 8

Ⅱ　調査の内容
　1．第１・３次調査
　　(1)　縄文時代の遺構と遺物 …… 10
　　(2)　平安時代の遺構と遺物 …… 14
　　(3)　中世以降の遺構と遺物 …… 45
　　(4)　遺構外・表土出土遺物 …… 50
　2．第２次調査
　　(1)　縄文時代の遺構と遺物 …… 53
　　(2)　平安時代の遺構と遺物 …… 56
　　(3)　中世以降の遺構と遺物 …… 57
　3．第４次調査
　　(1)　縄文時代の遺構と遺物 …… 60
　　(2)　平安時代の遺構と遺物 …… 66
　　(3)　中世以降の遺構と遺物 …… 75

Ⅲ　調査のまとめ …… 79

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図（１：50,000）…… 1
第２図　地形分類と遺跡分布（１：50,000）…… 3
第３図　乙部遺跡群調査区全体図（１：5,000）…… 5
第４図　乙部方八丁遺跡全体図（１：1,000）…… 9
第５図　第１・３次調査区全体図（１：200）…… 11
第６図　RD101～107土坑 …… 13
第７図　RB501掘立柱建物跡、RD518土坑 …… 15
第８図　RD518土坑出土遺物 …… 16
第９図　RA502竪穴住居跡、RD507・509・510土坑 …… 17
第10図　RA502竪穴住居跡出土遺物(1) …… 19
第11図　RA502竪穴住居跡出土遺物(2) …… 20
第12図　RA502竪穴住居跡出土遺物(3) …… 21
第13図　RA502竪穴住居跡出土遺物(4) …… 22
第14図　RA503竪穴住居跡 …… 24
第15図　RA503竪穴住居跡出土遺物 …… 25
第16図　RA505竪穴住居跡、RD517土坑 …… 27
第17図　RA505竪穴住居跡、RD517土坑土層断面 …… 29
第18図　RA505竪穴住居跡出土遺物(1) …… 30
第19図　RA505竪穴住居跡出土遺物(2) …… 31
第20図　RA505竪穴住居跡出土遺物(3) …… 32
第21図　RA505竪穴住居跡出土遺物(4) …… 33
第22図　RA505竪穴住居跡出土遺物(5) …… 34
第23図　RA505竪穴住居跡出土遺物(6) …… 35
第24図　RA505竪穴住居跡出土遺物(7) …… 36
第25図　RA505竪穴住居跡出土遺物(8) …… 37
第26図　RD501～506・508・511・512・514・515土坑 …… 40
第27図　RD513・516土坑 …… 42
第28図　RD513・516土坑出土遺物(1) …… 43
第29図　RD516土坑出土遺物(2) …… 44
第30図　RG801・802・803・804溝跡 …… 47
第31図　RG801・802・803・804土坑 …… 49
第32図　第１・３次調査区ピット土層断面 …… 51
第33図　遺構外・表土出土遺物 …… 52
第34図　第２次調査区全体図（１：100）…… 54
第35図　RD108・109・110土坑 …… 55

第36図　RD504竪穴住居跡 …… 56
第37図　RD801・802溝跡 …… 58
第38図　第４次調査区全体図（１：100） …… 61
第39図　RD111・112・113・114・115・116土坑 …… 63
第40図　RD117・118・119・120・121土坑 …… 65
第41図　RA501竪穴住居跡 …… 67
第42図　RA502竪穴住居跡出土遺物(1) …… 69
第43図　RA502竪穴住居跡出土遺物(2) …… 70
第44図　RA502竪穴住居跡出土遺物(3) …… 71
第45図　RA502竪穴住居跡出土遺物(4) …… 72
第46図　RA502竪穴住居跡出土遺物(5) …… 73
第47図　RA506竪穴住居跡・RG805溝跡 …… 74
第48図　RG801・802溝跡 …… 77
第49図　RG801溝跡出土遺物 …… 78
第50図　第４次調査区ピット土層断面 …… 78
第51図　土器器形分類と再調整部位 …… 81
第52図　出土須恵器・あかやき土器坏 …… 82
第53図　出土土師器坏(1) …… 83
第54図　出土土師器坏(2) …… 84
第55図　出土墨書土器 …… 85

表　目　次

表１　乙部遺跡群の調査状況一覧 …… ６・７
表２　出土土器一覧(1) …… 86
表３　出土土器一覧(2) …… 87
表４　出土土器一覧(3) …… 88
表５　出土土器一覧(4) …… 89
表６　出土土器一覧(5) …… 90

写真図版目次

第1図版　乙部遺跡群全景 …… 97
第2図版　遺跡地形(1) …… 98
第3図版　遺跡地形(2) …… 99
第4図版　第1次調査区全景、第3次調査区全景、RB501掘立柱建物跡 …… 100
第5図版　RA501・502・503竪穴住居跡 …… 101
第6図版　RA505竪穴住居跡、RG801・802溝跡、RG801溝跡断面 …… 102
第7図版　第2次調査区東側全景、RD109土坑断面 …… 103
第8図版　RA504竪穴住居跡、RG801・802検出状況 …… 104
第9図版　第4次調査区全景、RD117～119土坑 …… 105
第10図版　RD114土坑、RG801・802溝跡、RG801溝跡 …… 106
第11図版　RA501竪穴住居跡出土遺物(1) …… 107
第12図版　RA501竪穴住居跡出土遺物(2) …… 108
第13図版　RA501竪穴住居跡出土遺物(3) …… 109
第14図版　RA501竪穴住居跡出土遺物(4) …… 110
第15図版　RA501竪穴住居跡出土遺物(6) …… 111
第16図版　RA502竪穴住居跡出土遺物(1) …… 112
第17図版　RA502・503竪穴住居跡出土遺物(2) …… 113
第18図版　RA505竪穴住居跡出土遺物(1) …… 114
第19図版　RA505竪穴住居跡出土遺物(2) …… 115
第20図版　RA505竪穴住居跡出土遺物(3) …… 116
第21図版　RA505竪穴住居跡出土遺物(4) …… 117
第22図版　RA505竪穴住居跡出土遺物(5)、RD516・518土坑出土遺物 …… 118
第23図版　RG801、遺物包含層、その他出土遺物 …… 119
第24図版　墨書土器赤外線写真(1) …… 120
第25図版　墨書土器赤外線写真(2) …… 121

《遺物の表現について》

1．土　　器

a．平安時代の須恵器大甕の実測図は1／4スケールとし、ほかは1／3スケールとした。

b．挿図の配列については、出土した層位順とし、さらに器種ごとにまとめた。

2．石　　器

a．剥片石器は2／3スケールとし、礫石器は1／3スケールとした。

b．石器の実測図版は、基本的に、左に表面（本文中背面）、中央に右側縁、右に裏面（本文中腹面＝主要剥離面）の順に展開し、必要に応じて表面左に左側縁、表面下もしくは腹面左側等に縦断面もしくは横断面を付け加えた。

c．磨石等の磨面の範囲はスクリーントーンで示した。

☆遺構外出土遺物の挿図中の記号・番号は、出土地点及び出土層位を表す。

（例）　G16－K17，Ⅱa
　　↓　　↓　　↓
　　※1　※2　※3

※1　調査座標原点ＲＸ±0　ＲＹ±0を起点として、X・Y両軸を50m毎に区切る大グリッドを設定し、X軸線上を西から東へA・B・C…W・X・Y、Y軸線上を北から南へ1・2・3…23・24・25と付し、北西隅のこれらアルファベットとアラビア数字の組合わせを、大グリッドの呼称とした。

※2　大グリッドを2m毎に細分割し、小グリッドを設定し大グリッドの呼称を再び用いた。よって、大グリッド－小グリッドという組合わせで、遺物の平面出土地点を2m毎に表示した。
（例）G16－K17はＲＸ－782　ＲＹ＋320を北西隅とする2mグリッドからの出土を示す。

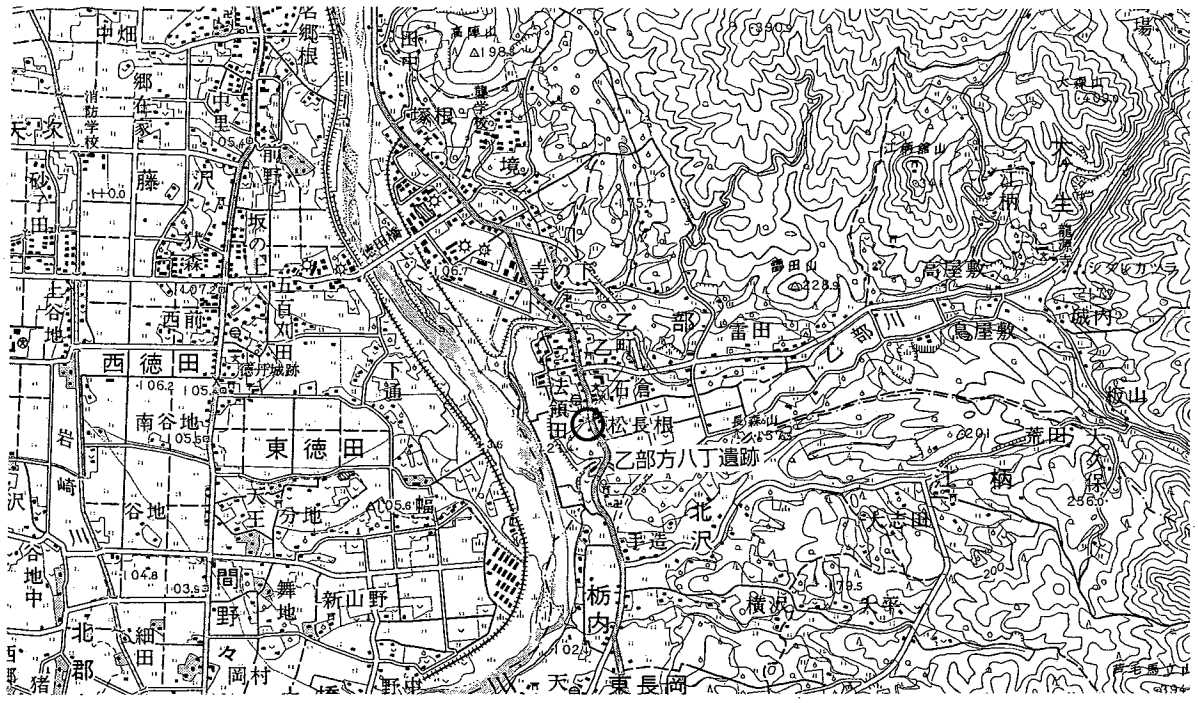
※3　遺物の出土層位を表す。

Ⅰ　遺跡の環境

1．位置と地形

位　　置　乙部方八丁遺跡は、盛岡市の南端にある。盛岡市街地から南南東に約20㎞の段丘上に位置しており、盛岡市乙部地内に所在する。また、北上川対岸は矢巾町で、東へおよそ2.3㎞の位置に、平安時代の城柵「徳丹城跡」が所在する。南側は北上川支流の乙部川にほぼ並走する沢状地形を挟んで、紫波町に隣接する。東の北上山地と西の奥羽脊梁山脈の間を南へ流れる北上川は、盛岡市街で、雫石川・中津川・簗川等と合流することによって、水量を増し北上盆地を形成する。盛岡はこの北上盆地の北端にあり、北上川西岸と雫石川南岸の地域に、最も沖積面が発達する。この地域に数多くの奈良・平安時代の遺跡が立地する。

地　　形　これとは対称に、本遺跡の所在する北上川東岸の地形は生成・段丘の発達等においてこれと異なっている。本遺跡周辺の北上川以東の地形をみると、北上山地の西縁が北上川の近くまで迫っており、朝島山（607ｍ）を中心とする朝島山山地の中起伏山地や周辺の小起伏山地（丘陵地）がみられる。北上川に注ぐ大沢川や乙部川は、北上山地に狭い谷を刻みながら西流し、北上川沿いに形成された段丘を分断する。



第１図　遺跡の地図　（１：50,000）

本遺跡は乙部川の南の砂礫段丘Ⅱ（中位段丘）上に立地し、西側は北上川の氾濫原に接する。同段丘面上に乙部野・町田・松長根遺跡が、隣接して所在するが、いくつかの小さな沢により画されている。また、乙部川北側の乙部館遺跡は東西に長い段丘上に立地し、これらの南・東側は小起伏山地や沢状地形に接している。

乙部方八丁遺跡の規模は、東西約370ｍ・南北約450ｍと推定され、水田の耕地整理等により、遺跡東端線は明確でない。標高は約120ｍ前後であるが、北上川沿いにやや低くなり、遺跡北西端と南端で最も低くなる。

2．歴史的環境

縄文時代　北上川東岸に面する中位段丘縁辺や丘陵地には、数多くの縄文時代の遺跡が立地する。乙部遺跡群を含む山麓縁辺部においては、現在47遺跡があり、うち縄文時代が多くみられる。特に手代森遺跡は㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターと都南村教育委員会により、発掘調査が実施されており、縄文時代晩期の集落と多量の遺物が出土している。本遺跡でも縄文時代の遺構が検出されている。

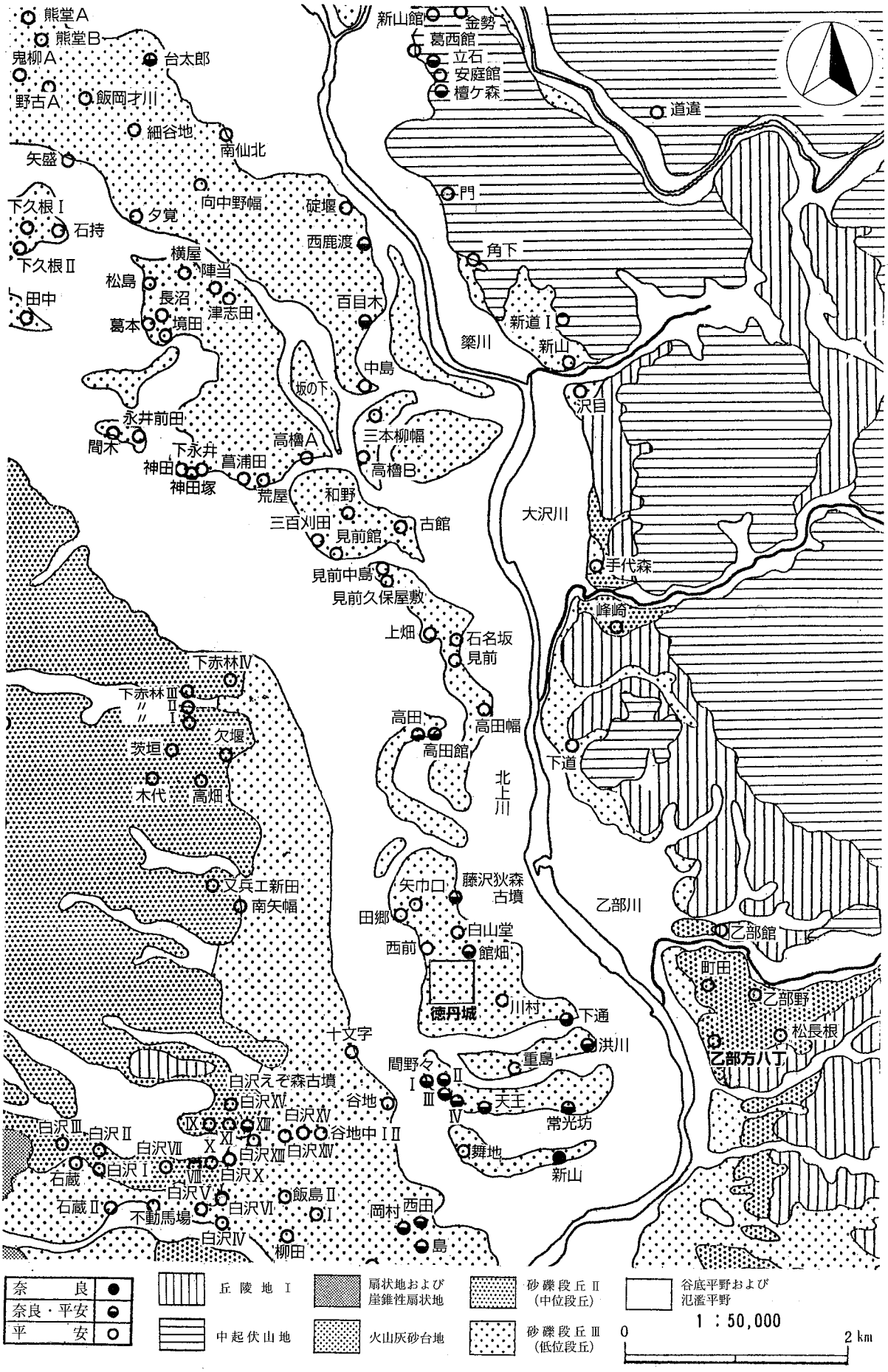
弥生時代　弥生時代の遺跡は、乙部遺跡群では山麓縁辺部や沢沿いの低平地などで発見されており、縄文時代の遺跡に比べるとかなり少なく、弥生土器片が単独出土し散見されるのみである。

古　　代　奈良時代の遺跡は乙部遺跡群では確認されていないが、北上川を隔てた低位段丘面には終末期古墳群（太田蝦夷森古墳群・高館古墳群）が所在し、西鹿渡遺跡や百目木遺跡、矢巾町の館畑遺跡など奈良時代から平安時代にかけての遺跡が拡がっている。

平安時代に入ると、奈良時代からの集落の上に志波城跡（803年）や徳丹城跡（813年頃）が造営される。これ以降、沖積面では急激に集落数が増加し、さらに上位の中位段丘や扇状地に集落が拡散するようになる。平安時代の集落のほとんどが９～10世紀代のものであり、この地域の大きな特徴のひとつで、乙部遺跡群に所在する遺跡もほとんど９世紀代のものである。

中　　世　中世の城館跡として北上川東岸沿いには、簗川の合流点付近から、新山館、蝶ケ森館、手代森館、黒川館があり、北上川支流の乙部川流域に乙部館、江柄館、大萱生館が所在する。このほか北上川支流の河川の流域にも多くの中世城館が築かれる。このうち乙部館遺跡が昭和62年に都南村教育委員会により本調査が行われており、主郭西側と二の郭を仕切る空堀部分が確認されている。

乙部館遺跡からはおよそ１㎞ほど離れてはいるが、本遺跡でも中世以降のものと想定される溝を検出している。



第２図　地形分類と古代遺跡分布

3．これまでの調査

乙部遺跡群　乙部遺跡群は盛岡市の南東部に位置し、北上川東岸の北上山地西縁部に立地する。乙部川両岸の中位段丘面の遺跡群は北から乙部館・乙部野・松長根・町田・乙部方八丁の５遺跡が隣接する。乙部館遺跡が最も高所に位置しており、次いで、乙部方八丁遺跡、乙部野・松長根・町田遺跡で、標高は約113～120ｍをはかる。

当該地区における本調査は、昭和62年度に当時の都南村教育委員会によって、乙部館遺跡が調査され、平成４年度に盛岡市との合併以後盛岡市教育委員会が主体となり、個人住宅新築や各種開発に先立ち、各遺跡で調査を実施している。

乙部館遺跡　乙部館遺跡での先述の調査は、河川の改修工事に伴う緊急発掘調査であり、主郭西側と空堀の一部を発掘するにとどまり、全容の解明には至らなかった。その後、平成４年度にりんごの改植に対応し、試掘調査を実施している。ここで縄文時代の集落及び中世の柵列を検出しており、掘削制限をして遺構保存措置とした。平成５年度以降は、現在までに２件試掘調査を実施している。

乙部野遺跡　乙部野遺跡は国道396号線バイパスに隣接した箇所で、乙部川を挟んで対岸には乙部館遺跡が立地している。

平成７年度に本調査を実施しており、縄文時代・平安時代～中近世の遺構を多数検出している。特に、中近世の建物跡や柱穴群の密度が高くなっている。

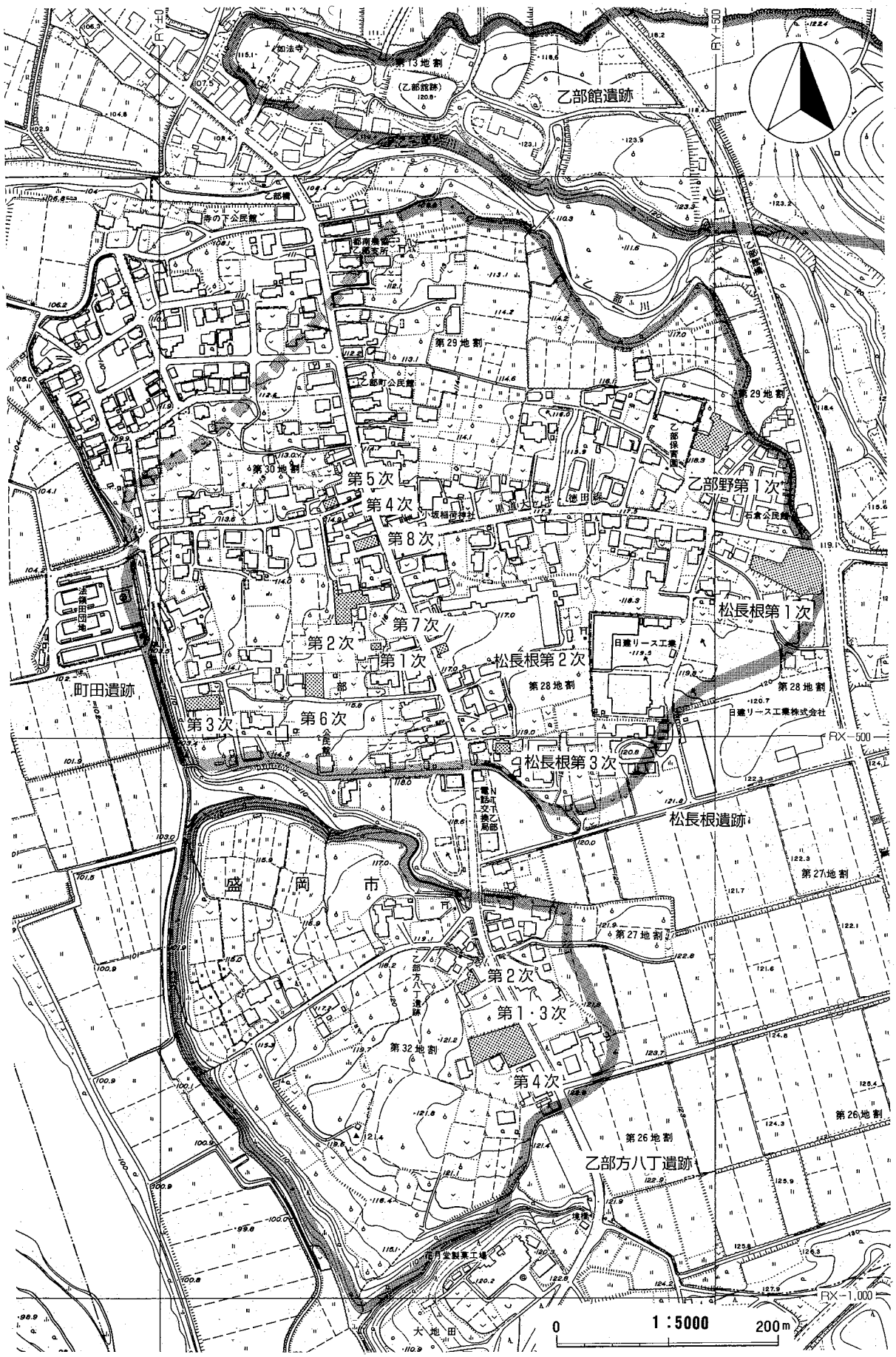
乙部野・松長根・町田遺跡の遺跡境界は、各種開発などにより現況の地形が分かりにくいこと、また、当地域における調査事例が少ないことなどもあいまって、明確ではない。

松長根遺跡　松長根遺跡では、平成６年度に宅地造成・防火水槽敷設工事に先立ち試掘調査を実施しているが、遺構・遺物は検出されていない。また、その後の試掘調査でも遺構等は確認されていない。

町田遺跡　乙部方八丁遺跡の北に小さな段丘崖を挟んで、町田遺跡は立地する。町田遺跡では平成６年度以降、９件調査を実施しており、個人住宅新築工事に伴う調査が近年多くなってきている。

検出遺構は、おもに平安時代の竪穴住居跡が10棟以上検出されており、９世紀後半頃の集落と想定される。

乙部方八丁遺跡　乙部方八丁遺跡は平成６年度から、調査が行われており、町田遺跡と同様に個人住宅の新築工事および宅地造成が近年多くなってきている。検出遺構は縄文時代の土坑21基、平安時代の掘建柱建物跡１棟、竪穴住居跡６棟、土坑18基、中世以降は溝跡５条（同一遺構は除く）、土坑５基、柱穴群である。縄文時代の遺構出土の遺物はないが、周辺より後期の土器などが出土していることから、後期の土坑と想定される。平安時代の遺構からは多数の出土遺物があり、須恵器あかやき土器・土師器・刀子・砥石などがある。前述の町田遺跡よりも年代はさかのぼり、おもに９世紀前半頃の集落と思われる。中世以降に関しては、遺構周辺より15～17世紀の陶磁器類が出土している。



第3図　乙部遺跡群調査区全体図

乙部遺跡群の各遺跡調査次数一覧

乙部方八丁遺跡

次数	調査地点	調査原因	面積(㎡)	調査期間	検出遺構
1	乙部32地割22-3、24-3	宅地造成	604	94.11.1～11.28	縄文時代　土坑6基 平安時代　竪穴住居跡3棟、土坑14基 中世以降　溝跡4条、土坑4基、柱穴群
2	乙部32地割25-1	専用住宅新築	186	95.5.1～5.13	縄文時代　土坑3基 平安時代　竪穴住居跡1棟 中世以降　溝跡2条
3	乙部32地割22-3、24-3	宅地造成	371	95.5.15～6.13	縄文時代　土坑1基 平安時代　掘建柱建物跡1棟、竪穴住居跡1棟、土坑4基 中世以降　柱穴群
4	乙部32地割22-6	専用住宅新築	308	97.8.6～9.11	縄文時代　土坑11基 平安時代　竪穴住居跡2棟 中世以降　溝跡3条、柱穴群

町田遺跡

次数	調査地点	調査原因	面積(㎡)	調査期間	検出遺構
1	乙部30地割36-2・3	車庫新築	20	94.11.8～11.11	平安時代　竪穴住居跡1棟、土坑1基
2	乙部30地割51-8	専用住宅新築	132	94.11.11～11.12 95.4.7～4.14	平安時代　竪穴住居跡6棟、土坑5基、溝跡2条 近世以降　墓壙4基
3	乙部30地割28-4	専用住宅新築	100	96.6.17	なし
4	乙部30地割59-4	専用住宅増築	36	96.7.9～7.12	平安時代　竪穴住居跡2棟
5	乙部30地割85-1	専用住宅増築	250	96.9.24 96.11.5～11.13	平安時代　竪穴住居跡3棟
6	乙部30地割町田33-3	専用住宅増築	180	97.4.15～4.16	平安時代　竪穴住居跡
7	乙部30地割-56	農業用建物新築	20	97.5.19	なし
8	乙部30地割51-9	車庫新築	20	97.9.4～9.12	平安時代　土坑1基、柱穴8口

表1　乙部遺跡群の遺跡調査状況一覧

乙部館遺跡

次数	調　査　地　点	調査原因	面積(㎡)	調 査 期 間	検　出　遺　構
1	乙部13地割122	河川改修	375	87.10. 6 ～10.12	中　世　堀１条
2	乙部13地割	りんご改植	—	93. 3 .25	縄文時代　竪穴住居跡 中　世　柵列
3	乙部13地割129	専用住宅増築	40	95.12.11	なし
4	乙部12地割5-2他	墓地造成	160	96. 4 .23	なし

乙部野遺跡

次数	調　査　地　点	調査原因	面積(㎡)	調 査 期 間	検　出　遺　構
1	乙部29地割67-1	建築作業場及び資材置場造成	736	94.11.29～11.30 95. 4.10～ 5.24	平安時代　竪穴住居跡４棟、土坑１基、溝跡１条、焼土12基、遺物包含層 中世以降　竪穴２棟、掘立柱建物跡13棟、柱列３列、柱穴650口 近　世　墓壙１基 時期不明　土坑15基、溝跡１条

松長根遺跡

次数	調　査　地　点	調査原因	面積(㎡)	調 査 期 間	検　出　遺　構
1	乙部28地割11-1、11-8	宅地造成	45	94. 7.26	なし
2	乙部28地割4	防火水槽	30	94. 9.26	なし
3	乙部28地割39-7	個人住宅	112	97.12.24	なし

4．平成６・７・９年度の発掘調査体制

総　　括	川　村　　滋	盛岡市教育委員会	文化課長（平成６年度まで）
	佐　藤　勝　征	〃	文化課長（平成７年度から）
	大　崎　琢　夫	〃	課長補佐
	佐　藤　和　男	〃	文化財係長（平成７年度まで）
	阿　部　光　雄	〃	副主幹兼文化財係長（平成８年度）
	菊　地　　誠	〃	副主幹兼文化財係長（平成９年度から）
事　　務	八　木　光　則	〃	文化財主査
	吉　田　則　子	〃	事務嘱託
事務・調査	千　田　和　文	〃	文化財主査（平成７年度まで）
	似　内　啓　邦	〃	文化財主任
	室　野　秀　文	〃	文化財主事
	藤　岡　光　男	〃	文化財主事
	菊　池　与志和	〃	文化財主事（平成８年度から）
	津　嶋　知　弘	〃	文化財主事
	三　浦　陽　一	〃	文化財主事
	神　原　雄一郎	〃	文化財主事
	黒　須　靖　之	〃	文化財主事
	藤　村　茂　克	〃	文化財主事補（平成９年度から）
	武　田　良　夫	〃	文化財調査員（平成７年度から）
	太田代　由美子	〃	文化財調査員（平成７年度から）
	佐々木　真　史	〃	文化財調査員（平成８年度から）

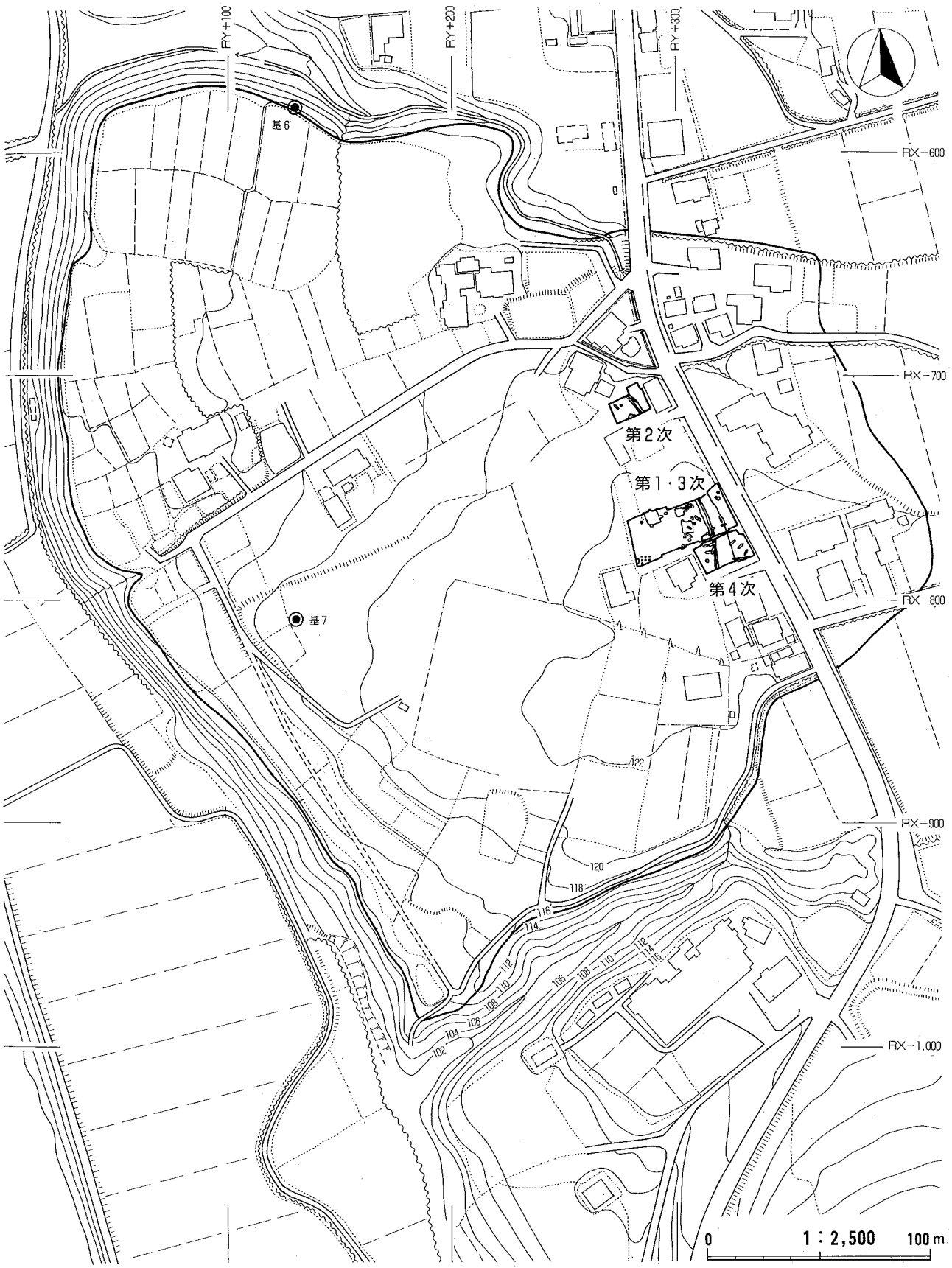
調査の実施及び報告書の作成にあたり、下記各位からご協力を賜った（敬称略　順不同）。

〈調査区地権者〉藤原　睦、菊池憲雄、阿部土地㈱

〈基準点地権者〉佐々木ツヤ、佐々木誠、佐々木上重、法領田キヨ、北田万三郎、吉田充則

〈発 掘 調 査〉在原キヌ子、在原久美子、五十嵐静江、伊藤奈美子、菊池アサ、北田タミ、坂本サキ、藤村祐一、藤村ヤス子、藤村与作、吉田紀子、藤原政人、岡　　聡、門嶋知二、川村政夫、小林成光、吉田健次郎、浅沼ハタ、川村幸子、工藤エキ、平賀眞利子

〈整 理 作 業〉小松愛子、藤田友子、中島京子、鹿野奈保美、高橋ツヤ、泉山紀代子、村山伊津子、藤原政人、藤沢幸子、水野彰子、芦垣直樹



第4図　乙部方八丁遺跡全体図

Ⅱ 調査の内容

1．第1・3次調査

位　　置　第1・3次調査区は遺跡を南北に縦走する県道沿いで、遺跡の中央から東寄りに位置している。調査区内の標高値は121.60～122.40mをはかり、遺跡内の最も高い位置にあたる。調査は宅地造成に伴う事前調査で、1次調査は開発申請面積の約62%にあたる604㎡を調査し、翌年度に隣接する西側を371㎡を調査した。

検出遺構　縄文時代の検出遺構は陥穴と思われる溝状土坑（Tピット）5基、フラスコ形土坑2基の計7基を検出した。これら全ての土坑は、平安時代～中世以降の遺構と重複している。これらの遺構からの出土遺物はなく、遺構外からの出土で、土器は後期深鉢の破片が、石器は石鏃・削器・磨製石斧等の定形石器のほかフレークがあるが、出土量は僅少である。

平安時代の検出遺構は掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡4棟、土坑18基を数える。遺物はこれらの遺構からの出土がほとんどである。

中世以降の検出遺構は、調査区東側を南北に走る溝跡RG801・802の2条と、RG801に直交するRG803E・W、不整円形・楕円形を呈する土坑がRD801～804の4基、また、RG801の壁面に検出されたピットP1～18の18口、平坦面で検出されたピットP1～175の175口である。当該期の遺物は、遺構からの出土はなく、遺構外から近現代の国産陶磁器（染付）、A層から寛永通宝等が出土している。

(1) 縄文時代の遺構と遺物

RD101土坑（第6図）

位　　置　調査区北端中央。　**平 面 形**　溝状。　**軸 方 向**　N69°E。

規　　模　長軸上端3.46m、短軸上端0.54～0.91m、長軸下端3.31m、短軸下端0.24～0.32mをはかる。

重複関係　RD504・505に切られる。

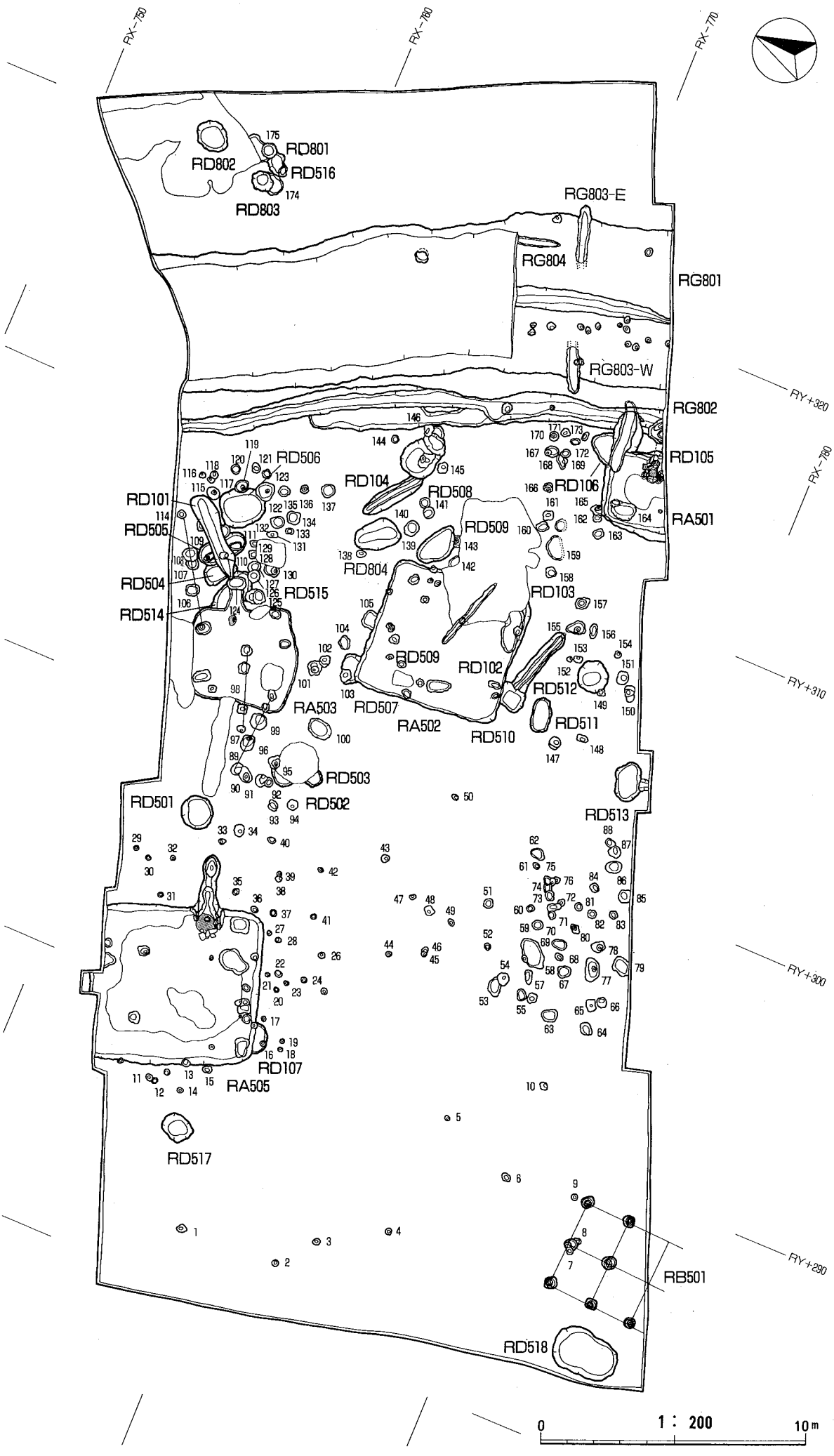
検出状況　**掘 込 面**－削平。　**検 出 面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でA～D層までの4層。A層－黒褐色土、B層－暗褐色土、C層－塊状褐色土を多量に含む暗褐色土、D層－黒褐色土。

壁の状態　壁高は0.93mで、検出面から0.22mまでは緩やかに外傾するが、この下半は直壁である。

底の状態　ほぼ平坦。

出土遺物　なし。



第５図　第１・３次調査区全体図

RD102土坑（第6図）

位　　置　調査区中央南側。　**平　面　形**　溝状。　**長軸方向**　N71°W。

規　　模　長軸上端2.72m以上、短軸上端0.42～0.63m、長軸下端2.91m、短軸下端0.11～0.16mをはかる。

重複関係　西端をRD510に切られる。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でA～F層までの6層があり、A・C層は2層に細分。A層－暗褐色土に褐色土を微量に含む。B層－A層に類似するが褐色土を多量に含む。C層－黒褐色土が主体で褐色土をやや多く含む。D層－褐色土に黒褐色土をやや多く含む。E層－暗褐色土に褐色土を微量に含む。F層－褐色土に黒褐色土をやや多く含む。

壁の状態　壁高は0.94mで、検出面から0.22mまでは外傾するが、この下半はほぼ直壁である。

底の状態　ほぼ平坦。　**出土遺物**　なし。

RD103土坑（第6図）

位　　置　調査区中央。　**平　面　形**　溝状。　**長軸方向**　N81°W。

規　　模　長軸上端3.42m、短軸上端0.18～0.45m、長軸下端3.29m、短軸下端0.08～0.12mをはかる。

重複関係　RA502に切られる。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－RA502床構築面。

埋　　土　自然堆積でA～C層。A層－2層に細分され褐色土を多く含む暗褐色土。B層－暗褐色土を僅かに含む褐色土。C層－褐色土を少し含む黒褐色土。

壁の状態　壁高は0.46mで、直壁である。　**底の状態**　ほぼ平坦。　**出土遺物**　なし。

RD104土坑（第6図）

位　　置　調査区中央。　**平　面　形**　溝状。　**長軸方向**　N48°W。

規　　模　長軸上端2.53m、短軸上端0.59～0.67m、長軸下端2.36m、短軸下端0.23～0.28mをはかる。

重複関係　南東端をRD508に切られる。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でA～C層。A層は4層、B層は2層に細分。A1・2層－褐色土をやや多く含む黒褐色土。A3・4層－褐色土と炭化物を少し含む黒褐色土。B層－暗褐色土を僅かに含む褐色土。C層－褐色土を僅かに含む黒褐色土。

壁の状態　壁高は1.07mで、検出面から0.35m～0.49mまでは外傾するが、この下半はほぼ直壁である。

底の状態　ほぼ平坦。　**出土遺物**　なし。

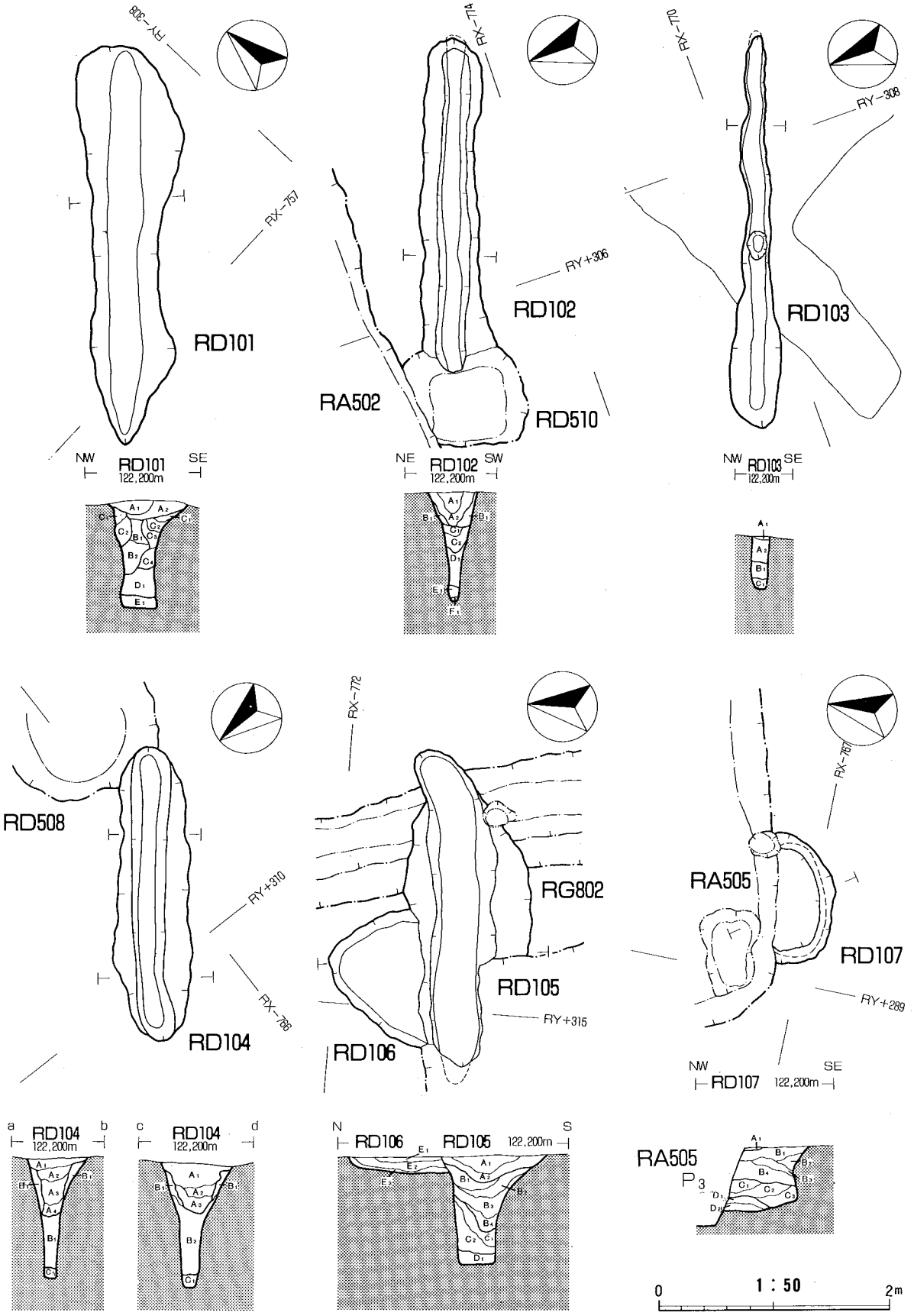
RD105土坑（第6図）

位　　置　調査区南西側。　**平　面　形**　溝状。　**長軸方向**　N82°E。

規　　模　長軸上端2.74m、短軸上端0.93～1.12m、長軸下端2.84m、短軸下端0.31～0.37mをはかる。

重複関係　西端をRA501に、東側はRG802に切られ、RD106を切る。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。



第6図　RD101～107土坑

埋　　土　自然堆積でA～D層。A層は2層、B層は4層、C層は2層に細分。A層－褐色土を僅かに含む暗褐色土。B層－褐色土を少し含む黒褐色土。C層－暗褐色土を少し含む褐色土。D層－褐色土を少し含む黒褐色土。

壁の状態　壁高は0.94ｍで、検出面から0.15ｍ～0.34ｍまでは外傾するが、この下半は直壁である。

底の状態　平坦。　　**出土遺物**　なし。

RD106土坑（第6図）

位　　置　調査区南東側。　　**平面形**　不整楕円形と推定される。

規　　模　長軸上端1.09ｍ以上、短軸上端0.96ｍ以上、長軸下端0.93ｍ以上、短軸下端0.75ｍ以上をはかる。

重複関係　南半部をＲＡ501及びＲＤ105に切られる。

検出状況　**掘込面**－削平。　　**検出面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積で3層に細分。A層－褐～明褐色土を多く含む黒褐色土。

壁の状態　壁高は0.14ｍで、底面から緩く立ち上がる。　　**底の状態**　ほぼ平坦。

出土遺物　なし。

RD107土坑（第6図）

位　　置　調査区北西側。　　**平面形**　不整楕円形と推定される。　　**長軸方向**　不明。

規　　模　長軸上端1.16ｍ。長軸中端0.88ｍ。長軸下端0.99ｍをはかる。

重複関係　北半部をＲＡ505に切られる。

検出状況　**掘込面**－削平。　　**検出面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でA～D層。B層は4層、C層は3層、D層は2層に細分。A層－黒褐色土を主体。B層－褐色土塊を多く含む暗褐色土。C層－暗褐色土塊を多く含む褐色土。D層－褐色土塊をやや多く含む暗褐色土。ややかたい。

壁の状態　壁高は0.48ｍで、北側は重複により不明、南側は検出面から0.28ｍまでは外傾するが、この下半は内傾する。

底の状態　ほぼ平坦。　　**出土遺物**　なし。

(2)　平安時代の遺構と遺物

RB501掘立柱建物跡（第7図）

位　　置　調査区南西隅。　　**主軸方向**　Ｎ6°Ｅ。

規　　模　東西2間（総長3.40ｍ）、南北2間（総長3.40ｍ）を検出しており、さらに南側調査区外に拡がるものと考えられる。　　**柱間寸法**　1.70ｍをはかる。

重複関係　Ｐ4がピット7・8を切るが、建替えはない。

掘方形状　規模は上端径0.38～0.62ｍ、下端径0.27～0.39ｍ、検出面からの深さ0.20～0.32ｍの不整円形あるいは楕円形で、全てに柱痕跡を確認。

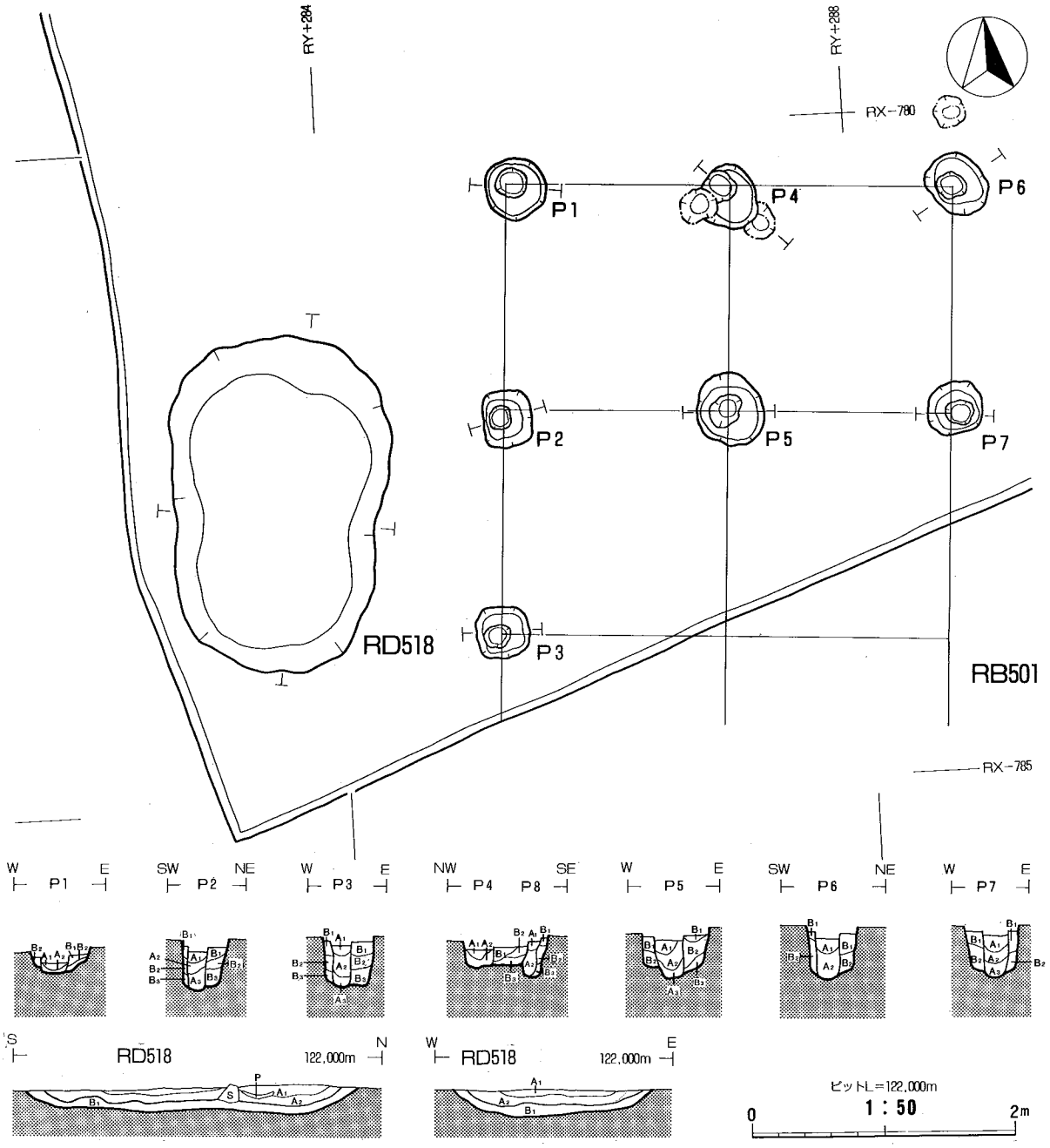
柱痕跡　検出面からの深さ0.19～0.44ｍで一定しておらず、直径0.16～0.18ｍの柱痕跡の底面は凹む

圧痕となっている。掘方底面からの差は深さ0.04～0.10ｍをはかる。いずれも柱痕跡は掘方の中心からずれるものの柱通・柱間尺は統一されており、規格性は不明である。

検出状況　削平された黄褐色シルト層上面。検出面は傾斜地のため掘方の深さは異なっている。

埋　　土　柱痕跡埋土$A_{1～3}$層－しまりのない黒～暗褐色土　掘方埋土$B_{1～3}$層－暗褐色土で、黄褐色土が粒～塊状に含む。特にB_3層は強くしまる。

出土遺物　Ｐ１の掘方からは須恵器坏の口縁～体部破片、あかやき土器坏体部破片及び長胴甕の体部破片がそれぞれ１点出土している。Ｐ４の掘方からはあかやき土器小形甕の体部破片が３点、Ｐ５の掘方からは土師器の甕体部破片が３点出土している。Ｐ６の埋土中に、あかやき土器甕の体部破片が１点出土しており、内外ヘラナデが施される。



第７図　RB501掘立柱建物跡、RD518土坑

RD518土坑（第７図）

位　　置　調査区南西隅、ＲＢ501の西側。

平 面 形　不整長楕円形。

長軸方向　Ｎ８°Ｅ。

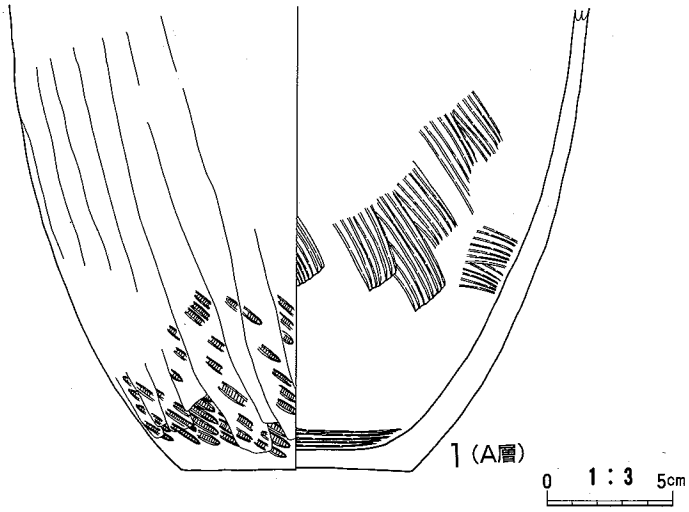
規　　模　長軸上端2.56ｍ、短軸上端1.42～1.71ｍ、長軸下端2.02ｍ、短軸下端1.34～1.11ｍをはかる。

重複関係　なし。

掘 込 面　削平。

検 出 面　耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　Ａ・Ｂ層。Ａ層－黒褐色土塊を少し含む褐色土。Ｂ層－褐色土塊をやや多く含む暗褐色土。



第８図　RD518土坑出土遺物

壁の状態　壁高は0.14～0.23ｍで、全体に緩やかに立上がる。

底の状態　緩やかな起伏があるがほぼ平坦。

出土遺物　（第８図）Ａ層からあかやき土器甕の体～底部破片を１点出土している。１のあかやき土器甕は内面ハケメ、外面ヘラナデ・ヘラケズリ、底面付近には平行文のタタキを施す。

RA501竪穴住居跡（66ページ参照）

RA502竪穴住居跡（第９～13図）

位　　置　調査区中央。　**平 面 形**　不整方形。かまどが位置する東壁側が大きく撹乱を受けている。

主軸方向　Ｎ87°Ｅ。　**規　　模**　南北－5.32～5.56ｍ、東西－5.12ｍをはかる。

重複関係　ＲＤ103・507・510を切る。　**掘 込 面**－削平。

検 出 面　耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

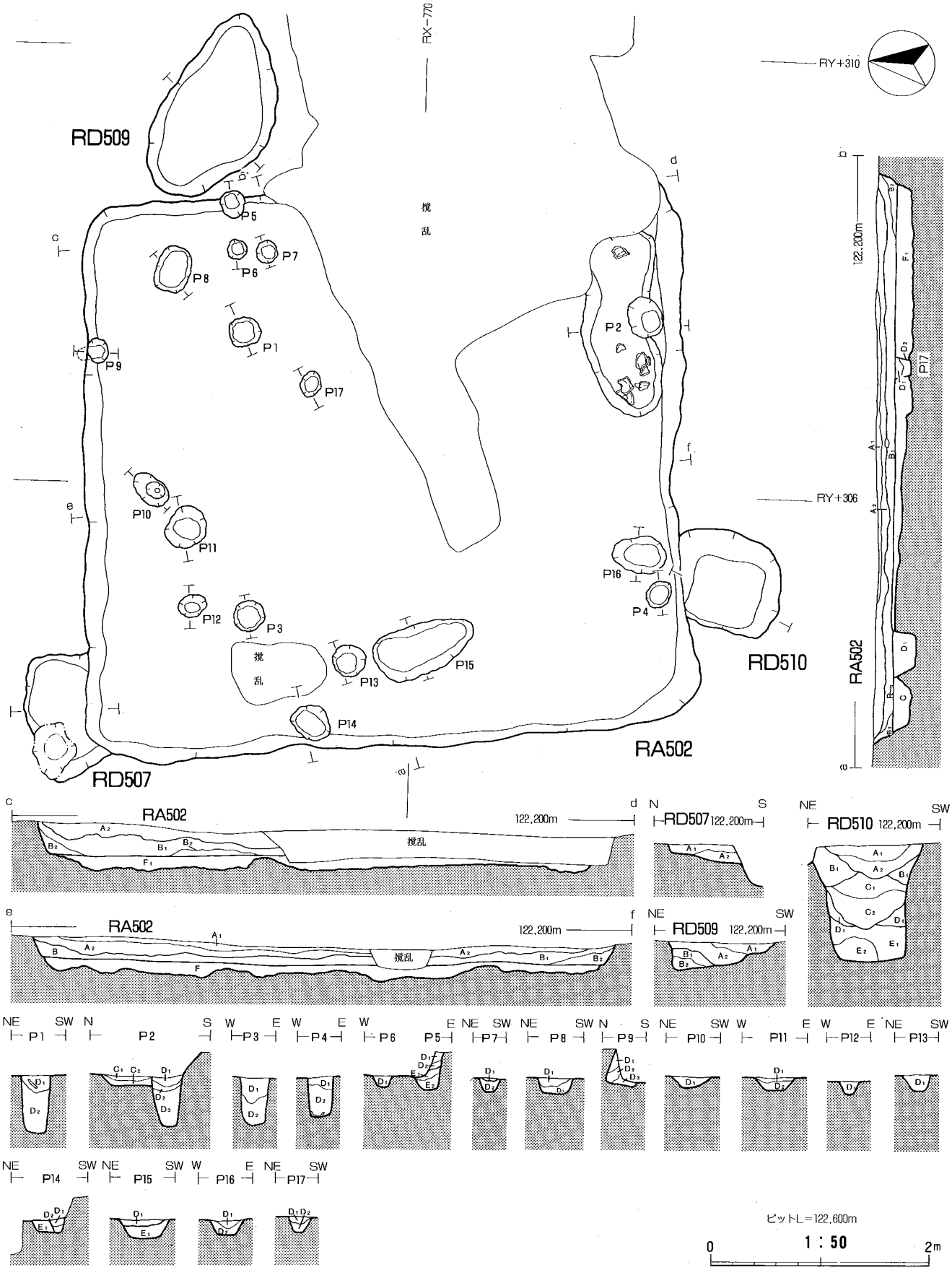
埋　　土　埋土は自然堆積で、層相の違いによりＡ・Ｂの２層にわかれる。Ａ層－褐色シルト粒とカーボンをわずかに含む黒褐色土。Ａ１層には粉状パミスを塊状に少し含む。Ｂ層－褐色シルト粒～塊とカーボンを多く含む暗褐色土。床構築土（Ｆ層）は暗褐色土に褐色シルト粒との混合土である。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.16～0.30ｍで、わずかに外傾する。

底の状態　南東側が撹乱を受けるが、ほぼ平坦。床面下ほぼ全面に構築土（Ｆ層）を確認。構築面は凹凸があり床面からの深さ0.04～0.14ｍで一部砂礫層を掘込む。

か ま ど　不明であるが、撹乱層には、多量の崩壊土を含んでいる。

柱　　穴　中央南壁寄りに配置された４本の主柱穴P_{1}～$_{4}$と床面に11口の小柱穴P_{6}～$_{8}$・$_{10}$～$_{17}$、壁面に２口P_{5}・$_{9}$の計17口。主柱穴の柱間寸法は東西2.51～2.60ｍ、南北3.70～3.76ｍ。平面形は不整円形を呈し床構築土上より掘りこまれ、埋土（Ｄ層）はやわらかい黒褐色土である。P_{1}径0.27～0.30ｍ、床面からの深さ0.53ｍ、P_{2}が径0.32～0.39ｍ、深さ0.45ｍ、P_{3}が径0.26



第 9 図　RA502竪穴住居跡、RD507・509・510土坑

～0.29m、深さ0.43m、P_4が径0.21～0.28m、深さ0.36mをはかる。P_5～P_{14}・P_{16}・P_{17}は径が0.16～0.49m、深さ0.11～0.36mをはかる。P_{15}は不整長楕円形で径0.45m～0.95m、深さ0.16mをはかる。埋土（D・E層）はやわらかい黒褐色土または褐色シルトである。

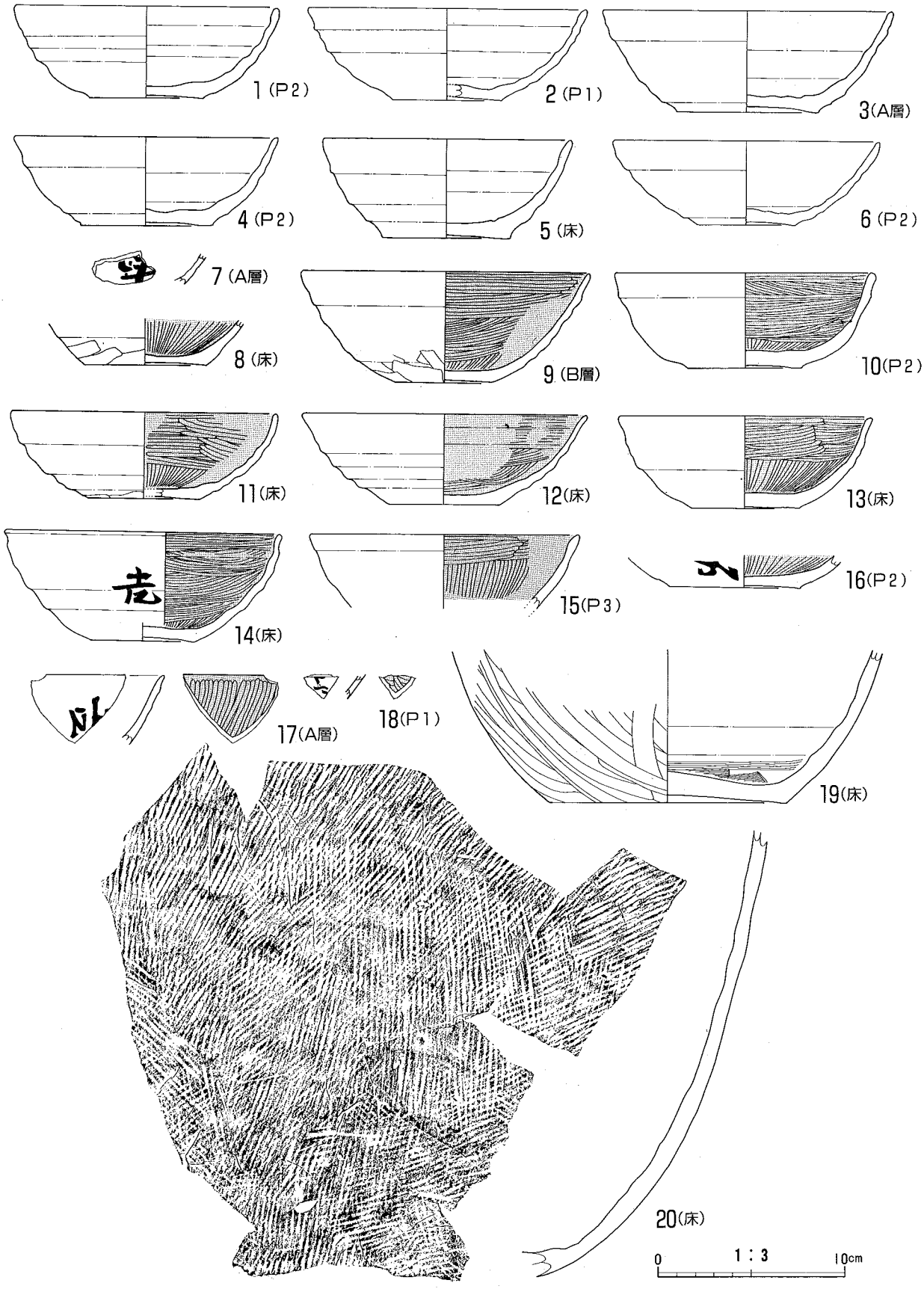
施設等　P_2の北側で不整楕円形の貯蔵穴と思われる。長軸方向はN82°E。規模は短軸上端0.58～0.66m、床面からの深さ0.09m。埋土（C層）は暗褐色シルトに褐色シルト粒～塊状とカーボン・焼土粒を僅かに含んでおり、C層に類似する。なお、多量の遺物が出土している。

出土遺物　（第10～13図）1・2は回転糸切無調整の須恵器坏で、P_6から出土している。2は口縁部に重ね焼きの痕跡が見られる。3～7はあかやき土器坏で、いずれも回転糸切無調整で、3は外面全体に多量の煤が付着する。4～6はほぼ完形で床面および柱穴から出土している。7は体部の破片で、外面には逆さに墨書文字が認められるが判読不明である。8～18は土師器坏である。8・11～14は床面、10・15・16・18は柱穴から出土している。8・9の底部は回転糸切後に体部下端のみに手持ちのヘラケズリ調整を施すものである。10・12～14・16は回転糸切無調整である。11は静止糸切後に体部下端のみに手持ちのヘラケズリ調整を施す。11～15は体部外面に重ね焼きの黒斑が見られる。14の体部外面には「吉」の墨書文字が認められる。16～18は体部の破片でいずれも外面に墨書文字が認められるものである。17は「吉」。16・18は判読不明である。

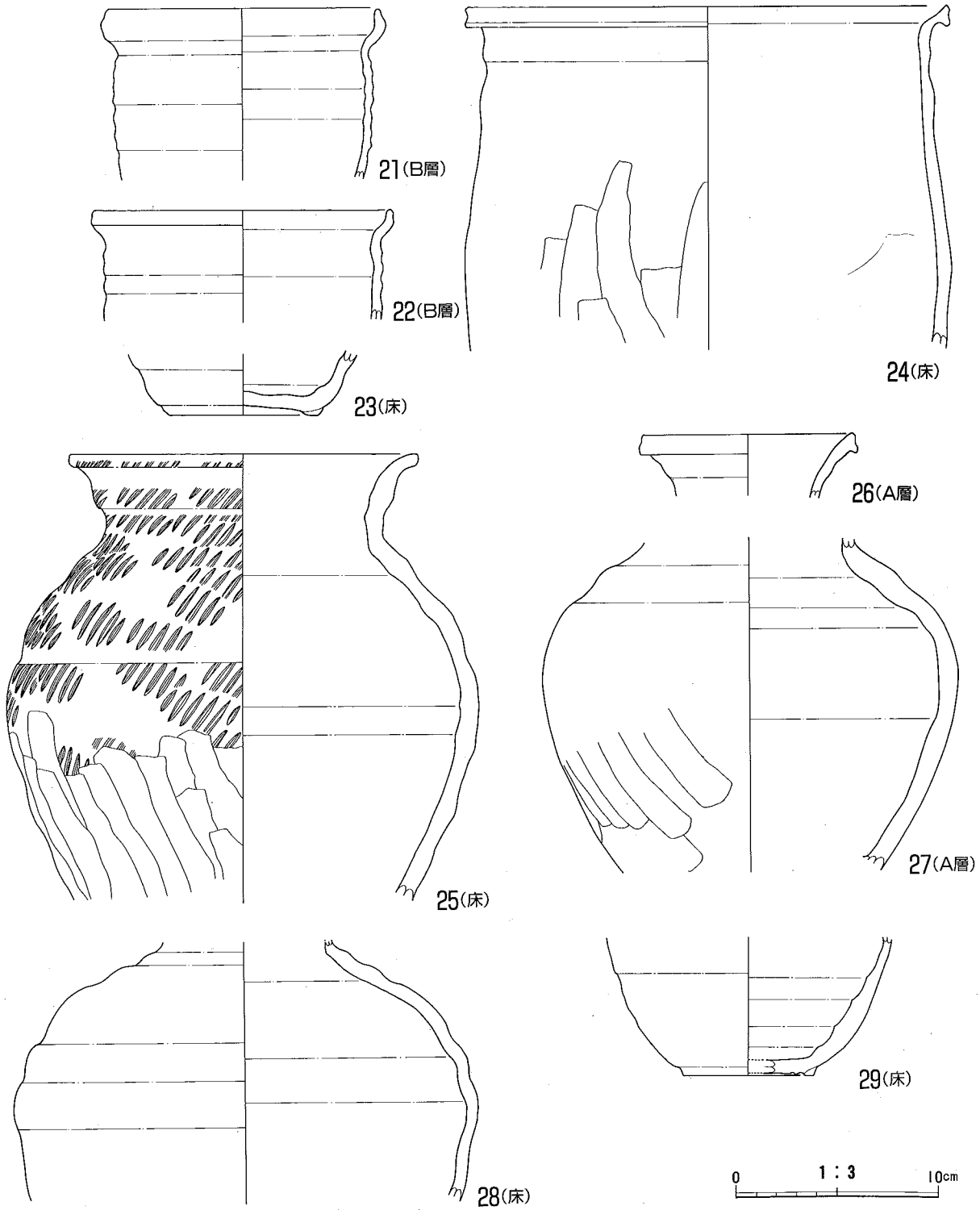
19は床面より出土している須恵器鉢であるが、体部上半の約3／4を欠損している。残存高8.2cm、底径12.6cmをはかる。器面調整は外面がヘラケズリ調整、内面は底面付近にヘラナデを施す。20は須恵器甕であるが体部下半の破片のみである。外面には平行タタキ痕を施しているが、内面のアテ工具は不明である。

21～23はあかやき土器小形甕である。21・22は体部下半から底部にかけて欠損しており、22は内外面の一部に煤が付着する。23は床面より出土している。体部の大半を欠損しており、残存高3.5cm、底径7.4cmをはかる。底部の切離しは糸切で、底部周縁に高台を貼付けており、体部外面には煤が付着している。24は体部下半から底部を欠損するあかやき土器長胴甕で、床面より出土している。残存高16.9cm、口径23.6cmをはかり、器面調整は外面にヘラケズリ調整を施す。25は須恵器壷であるが、体部下半から底部を欠損している。残存高22.2cm、口径17.2cm、体部最大径23.3cmをはかり、最大径を体部中央に持つ。口縁部形態は頸部から直立気味に立ち上がり、強く外反する。器面調整は、外面は口縁部から体部全面にかけて平行文のタタキ痕が認められ、さらに体部下半にヘラケズリ調整を施す。内面は体部下半から不定方向のナデを施す。

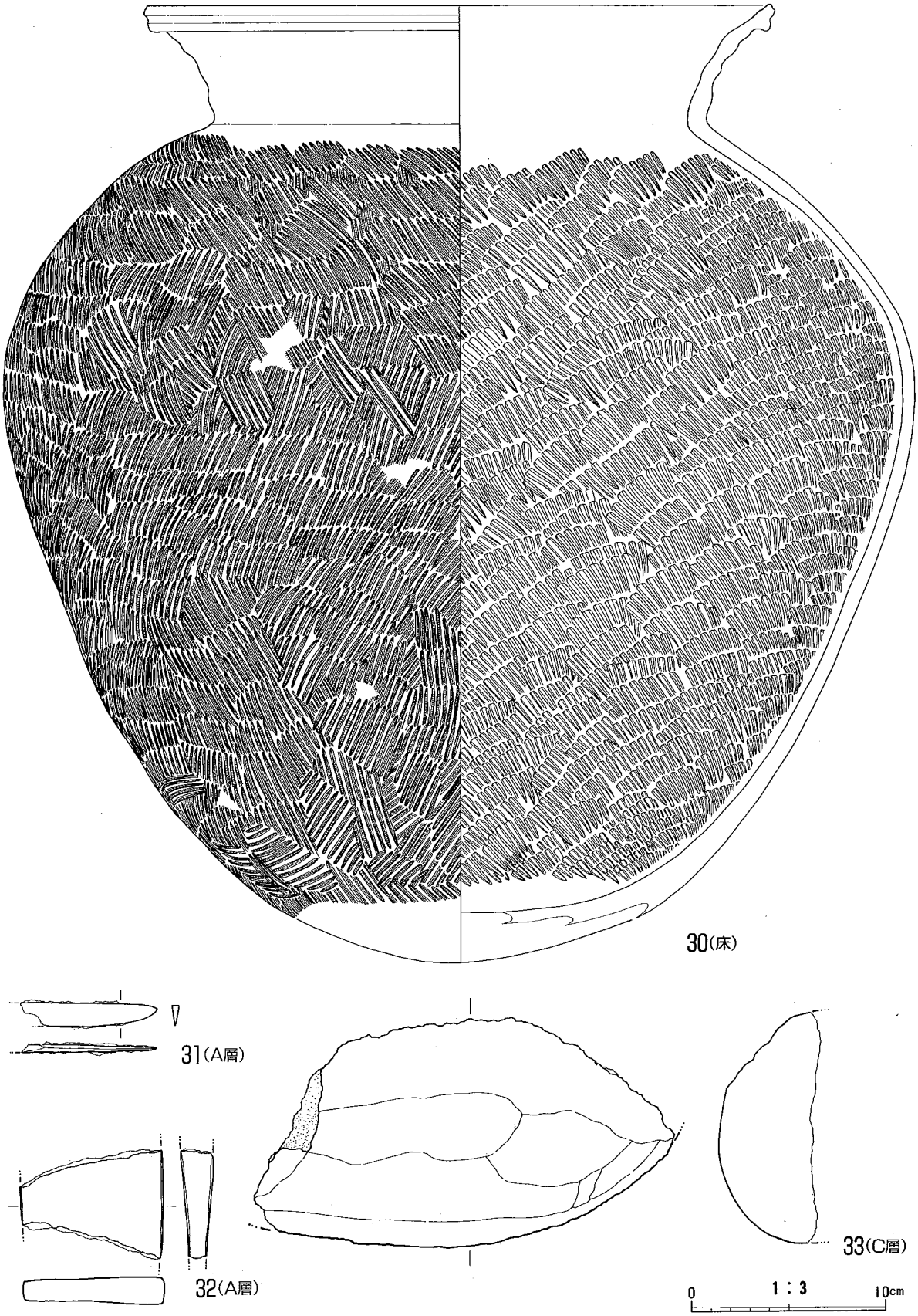
26～29は須恵器瓶である。26は長頸瓶で、27は口縁部および底部が欠損しており、外面の体部下半にはヘラケズリ調整を施す。また、内外面には自然釉が付着する。28は口縁部および底部が欠損しており、外面には自然釉が付着する。29は体部下半から底部にかけて残存しており、残存高6.9cm、底径6.5cmをはかる。底部は底部周縁には低い高台を貼付けている。30は底部を一部欠損するが、ほぼ完形の須恵器大甕である。残存高66.1cm、口径43.0cm、最大径62.5cmをはかり、最大径を体部上半に持つ。器面調整は内外面とも体部上半～底部周辺にかけて平行文のタタキを施すが、段階的に底部周辺から体部上半へと横方向におおよそ3段のタタキ調整が認められる。31は刀子でふくら切先、残存する長さは4.7cm、厚さ0.1～0.3cmをはかる。32～35は砥石である。32は砂岩製で板状を呈しており、全面に使用痕が認められる。33は安山岩製で33は半円形を呈している。34の石材は不明であるが、四角柱状の形を呈しており、4面に使用痕が認められる。35は安山岩製でほぼ全面に使用痕が見られ、部分的に深いの切創を残す。



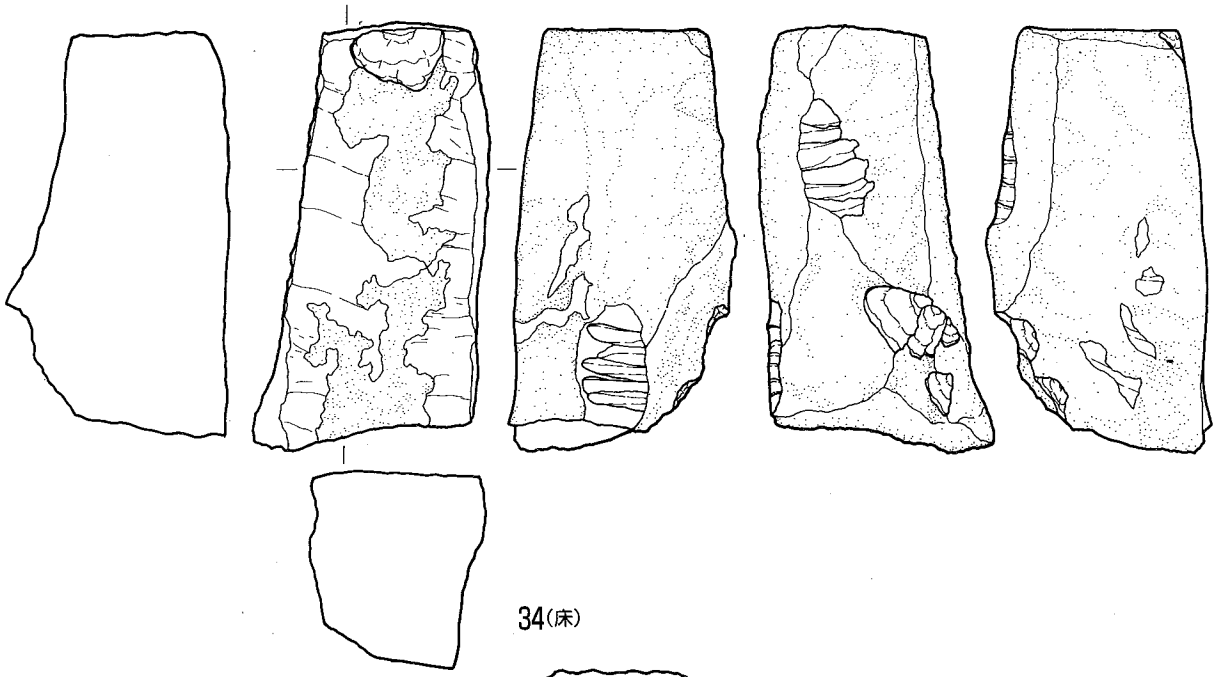
第10図　RA502竪穴住居跡出土遺物(1)



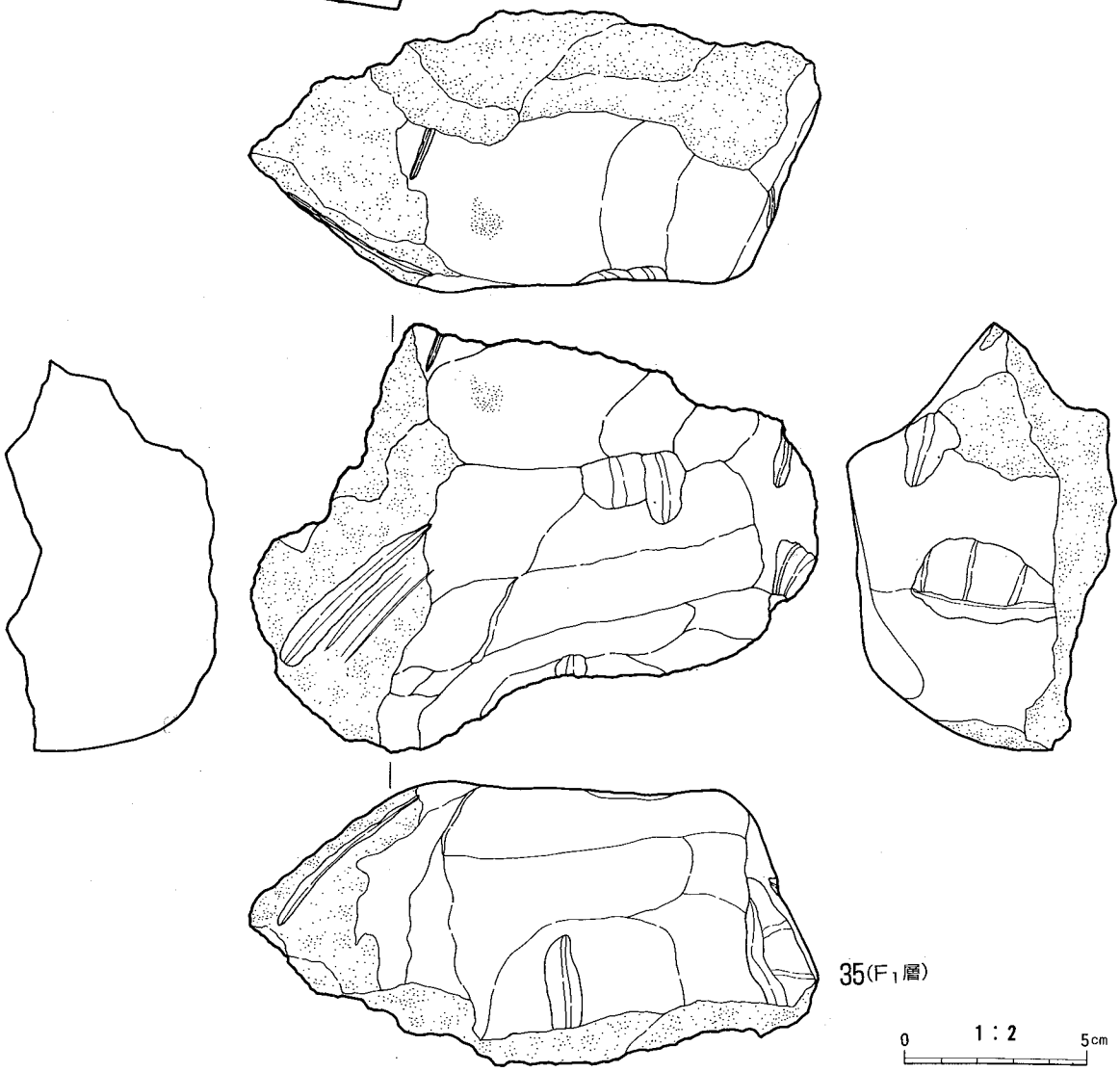
第11図　RA502竪穴住居跡出土遺物(2)



第12図　RA502竪穴住居跡出土遺物(3)



34(床)



35(F1層)

0 1：2 5cm

第13図　RA502竪穴住居跡出土遺物(4)

RD507土坑（第９図）

位　　置　調査区中央北側。　　**平　面　形**　不明。

規　　模　上端1.16～0.58ｍ、下端0.94～0.51ｍをはかる。

重複関係　南側をＲＡ502に、北西側をＰ103に切られる。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ層は２層に細分され、黄褐色シルト粒を少し含む暗褐色シルト。

壁の状態　壁高は0.07～0.17ｍで、緩やかに外傾する。

底の状態　ほぼ平坦だが南側が深い。　　**出土遺物**　なし。

RD509土坑（第９図）

位　　置　調査区中央東寄り、ＲＡ502東側。　　**平　面　形**　不整楕円形。　　**長軸方向**　N71°W。

規　　模　長軸上端1.81ｍ、短軸上端0.97ｍ、長軸下端1.56ｍ、短軸下端0.86ｍをはかる。

重複関係　なし。　　**掘　込　面**－削平。　　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ・Ｂ層とも２層に細分。Ａ層－黄褐色シルト粒を僅かに含む黒褐色土。Ｂ層－黄褐色シルト小塊を少し含む黒褐色土で、ややしまりがある。このＢ層の堆積は北西側に偏在する。

壁の状態　壁高は0.08～0.26ｍで、南西側はゆるやかに外傾し、北東側はほぼ直壁。

底の状態　南西部に緩やかな段差がある。　　**出土遺物**　なし。

RD510土坑（第９図）

位　　置　調査区中央南寄り、ＲＡ502南西隅。　　**平　面　形**　上端は不整楕円形？、下端は不整方形。

規　　模　上端0.91～1.18ｍ、長軸下端0.64ｍ、短軸下端0.58ｍをはかる。

重複関係　北側がＲＡ502に切られ、南東側でＲＤ102を切る。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ～Ｅ層。Ａ・Ｃ・Ｅは２層に細分される。Ａ層－暗褐色土を少し含む黒褐色土。しまりがある。Ｂ層－褐色シルト塊～大塊を多く含む暗褐色土。しまりがある。Ｃ層－褐色シルト粒～塊を多く含む黒褐色土。ややしまりがある。Ｄ層－Ｂ層に類似。Ｅ層－Ｃ層に類似。

壁の状態　確認した壁高は1.06ｍで、検出面から0.39ｍまでゆるやかに外傾するが、直下は直壁である。

底の状態　ほぼ平坦。

出土遺物　Ａ１層から、あかやき土器甕の体部片が出土している。

RA503竪穴住居跡（第14・15図）

位　　置　調査区中央北側。　　**平　面　形**　不整方形。　　**主軸方向**　N72°E。

規　　模　東西－3.40ｍ～3.96ｍ、南北3.65ｍ内外。

重複関係　煙道及び煙出しがＲＤ514・515を切る。　　**掘　込　面**－削平。

検　出　面　耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

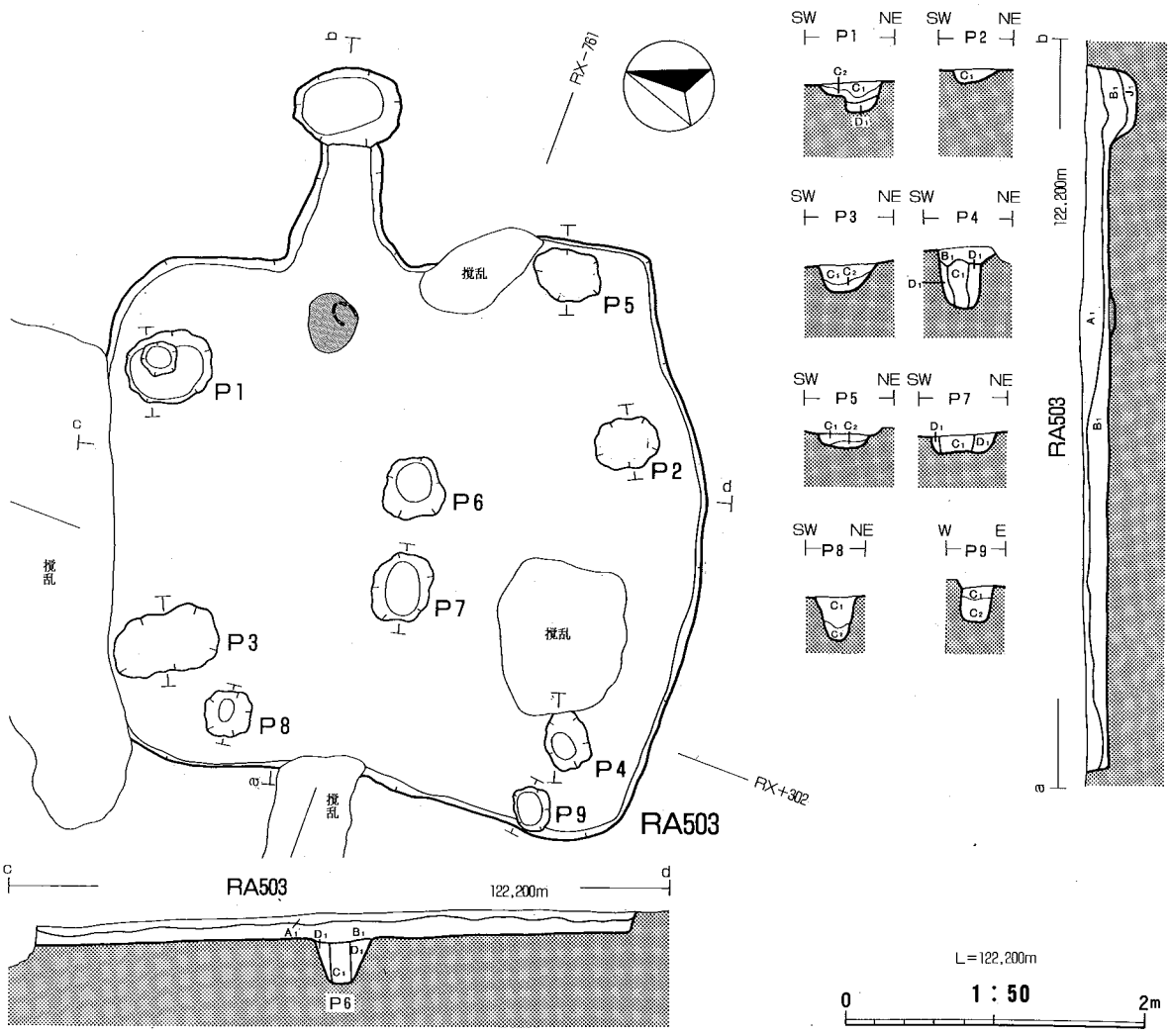
埋　　土　埋土は自然堆積で層相の違いによりＡ・Ｂ層にわかれる。Ａ層－暗褐色シルトを僅かに含む黒褐色土。Ｂ層－黒褐色土をやや多く含む暗褐色シルト。しまりがある。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.12～0.20ｍで、ほぼ直壁である。

床の状態　床面はほぼ平坦で、シルト上面を直接床面とし床構築土は認められない。

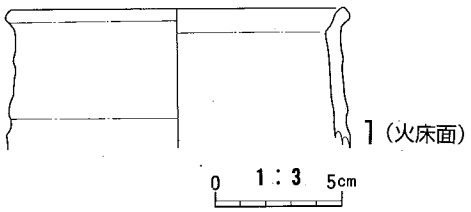
かまど　東壁中央やや北寄りに構築。煙道平面形は溝状で、底面は東壁際から徐々に深くなり、煙出し底面が最も深くなっている。規模は東壁から煙出し先端までの長さ1.32ｍ、幅0.41～0.92ｍで検出面から火床面までの深さは0.19ｍ、煙道と煙出しの比高差0.15ｍをはかる。かまど袖は残存してしない。火床面は煙道軸線延長上に位置している。平面形は0.30～0.42ｍの楕円形を呈し、よく焼けており、浸透層の厚さは0.05ｍをはかる。かまど崩壊土（Ｊ層）は、黒褐色土に多量の焼土を含む。煙出しは南北に楕円形。長軸0.72ｍ 短軸0.52ｍで､検出面からの深さは0.34ｍをはかる。

柱穴　床面上に９口のピットを検出したが、主柱穴は、西壁下のＰ4と8である。柱痕跡の認められたのはＰ4・6・7である。Ｐ6・7は床中央にあり、梁を支える柱穴か。なお、一部本住居より新しいピットが含まれる可能性がある。平面形は不整円形～楕円形を呈している。これらの埋土は２層（Ｃ・Ｄ層）にわかれる。Ｃ層－褐色シルト粉～粒を少し含む黒褐色土。Ｄ層－褐色シルト粒～塊をやや多く含む暗褐色シルトで、しまりがある。Ｐ1が径0.48～0.59ｍ、床面



第14図　RA503竪穴住居跡

からの深さ0.21m、P2が径0.32～0.43m、深さ0.08～0.10m、P3が径0.37～0.72m、深さ0.18m、P4が径0.29～0.40m、深さ0.41m、P5が径0.32～0.48m、深さ0.10m、P6が径0.34～0.45m、深さ0.27m、P7が径0.37～0.50m、深さ0.12m、P8が径0.30m、深さ0.29m、P9が径0.23～0.30m、深さ0.24mをはかる。



第15図　RA503竪穴住居跡出土遺物

出土遺物　（第15図）1はあかやき土器小形甕で火床面より出土している。体部下半から底部にかけて欠損しており、残存高5.6cm、口径13.8cmをはかる。

RA505竪穴住居跡（第16～25図）

位置　調査区北西。　**平面形**　方形。

主軸方向　N72°E。　**規模**　北壁は、トレンチで確認している。東西－5.76～6.01m、南北6.43mをはかる。　**重複関係**　なし。

検出状況　**掘込面**－削平。　**検出面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

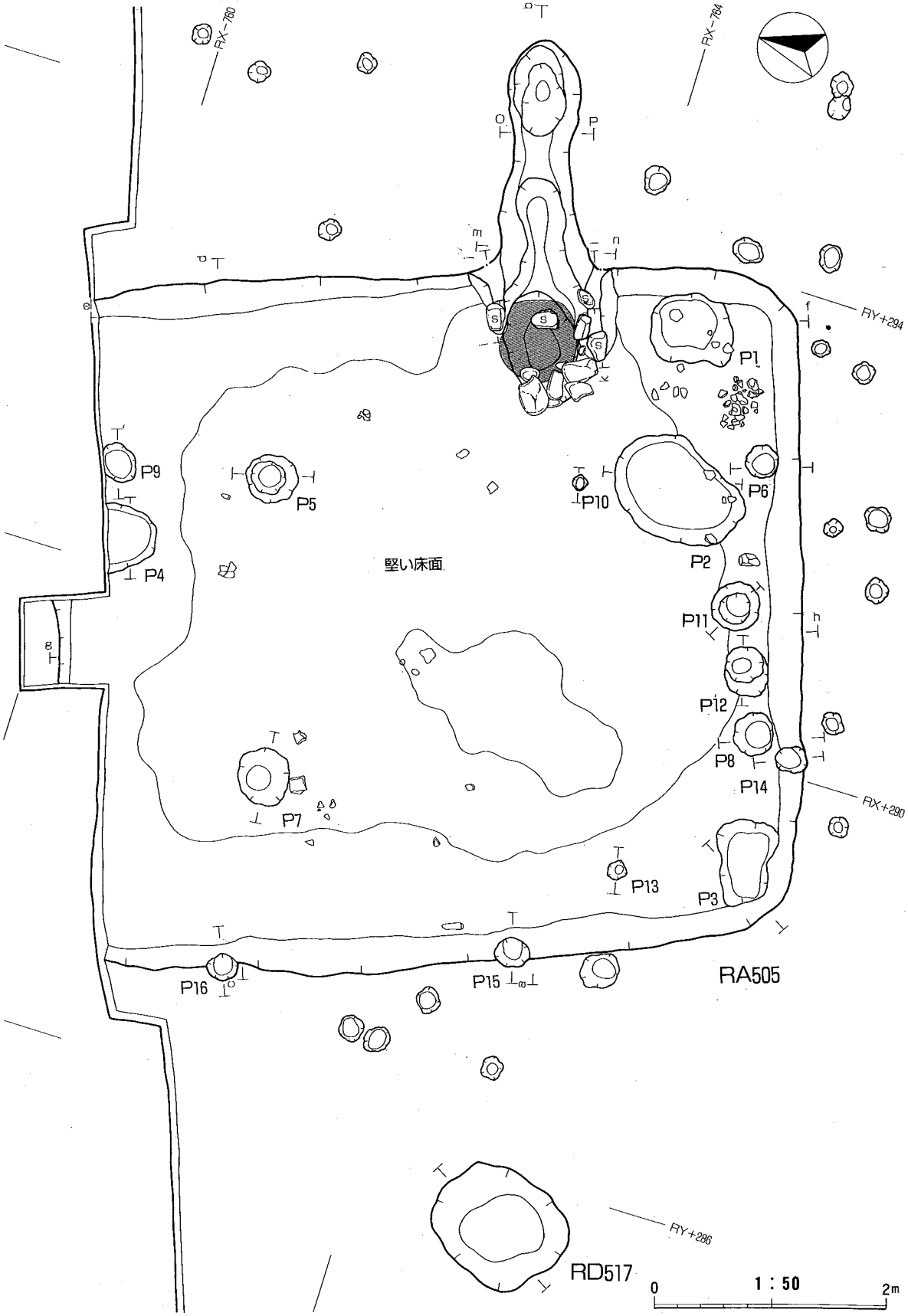
埋土　埋土は自然堆積で、層相の違いによりA～D層の4層にわかれる。B層は3層、C層は6層、D層は2層に細分される。

A層－暗褐色シルト粒を少し含む黒褐色土。B1・2層－暗褐色シルトをやや多く含む黒褐色土。粉状パミスが小塊状に混入する。B3層－褐色シルト粒をやや多く含む暗褐色シルト。C1～C3層－黒褐色土に褐色シルト粒を多く含み、僅かに明褐色シルト粒を含む混合土。C4・C5層－褐色シルト粒～塊状を多く含む暗褐色シルトの混合土。C6層－褐色シルト粒を多く含む黒褐色土。D1層－壁崩落土で、黒褐色土の塊を僅かに含む褐色シルト。D2層－褐色シルト塊を多量含む黒褐色土。なお、D1・2層ともにしまりがなくもろい。床構築土E層－は褐色シルト粒とカーボンをやや多く含む暗褐色土。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.31～0.56mで、東西両壁はやや傾斜が緩く、南北両壁はほぼ直壁に近い。

床の状態　床面はほぼ平坦であるが僅かに起伏があり、全体的には南西側に0.02～0.04mほど傾斜している。床面下に部分的に構築土（E層）が確認され、中央部分の約4.5mの不整形な範囲にやや堅い面が拡がる。また、その中の中央西側にこれよりさらに堅い部分が認められた。

かまど　東壁南寄りに位置する。煙道平面形は不整な溝状で、底面は火床面から徐々に浅くなり煙道中程で平坦面をもつ。さらに煙出しに向かって深くなっている。規模は、東壁から煙出し先端までの長さ1.98m、幅0.48～0.74m、検出面から火床面までの深さは0.54m、平坦面までの深さは0.13～0.15mをはかる。かまど袖は、いったん下部を0.04～0.05m掘込み、地業土（L層）で充填した後、上部ににぶい黄褐色シルトに褐色～暗褐色シルトと自然礫の混合土（K層）で構築。規模は北袖が長さ0.59m、幅0.19～0.42m、南袖が長さ0.79m、幅0.31～0.41m、床面からの高さは両側とも0.15～0.17mをはかる。火床面はこの袖に囲まれた内側に0.67～0.73mの楕円形を呈し、焼けている。浸透層は0.14mをはかる。かまど地業（L層）は火床面直下には見られず、両袖の下面のみに構築されるが、ともに浅く0.05～0.09mをはかり、断面

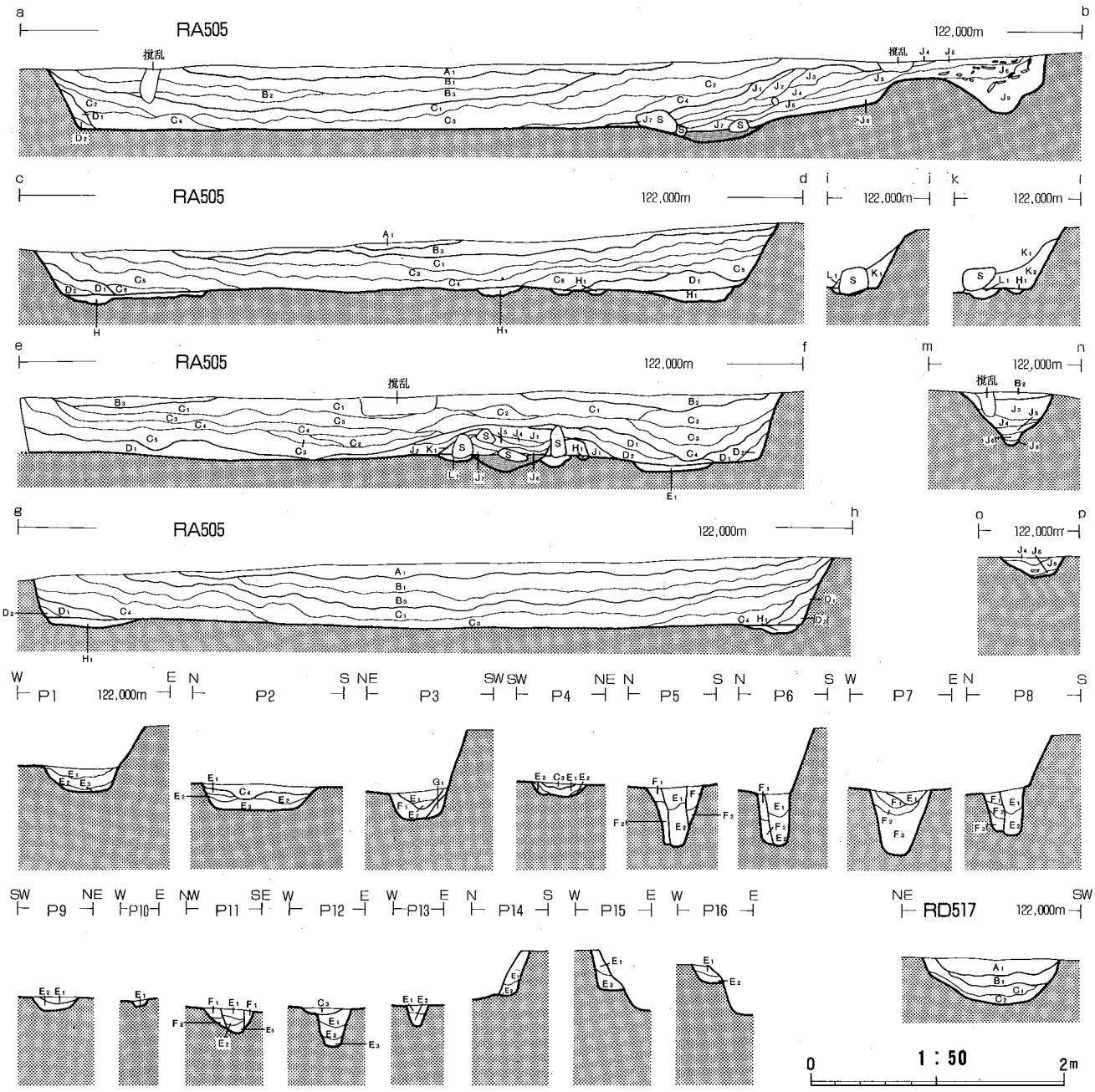


第16図　RA505竪穴住居跡、RD517土坑

は皿状を呈する。

かまど崩壊土（J層）は、焼土を僅かに混入し、褐色～黄褐色シルトを粒～小塊状にやや多く含む黒褐色土。なお、この崩壊土は煙出しから煙道、さらに火床面を中心とした範囲を覆っている。火床面から袖の位置にあるJ５～７層には構築に使用したとみられる0.09～0.40m大の自然礫が多く混入し、火熱を受けている。

煙出しは焼土・カーボンを多く含み、また土器の破片の混入も見られる。煙出しの平面形は楕円形で長軸0.84m 短軸0.63mをはかる。検出面からの深さは先端部側に段差をもち0.28～0.44mをはかり中央部が最も深くなる。



第17図　RA505竪穴住居跡、RD517土坑土層断面

柱　　穴　ピットは16口を検出しているが、主柱穴は南に寄って配置されたＰ５～８の４本が相当する。主柱穴間の柱間寸法は南北のＰ５－Ｐ６が4.24ｍ、Ｐ７－Ｐ８が4.39ｍ。東西のＰ５－Ｐ７が2.61ｍ、Ｐ６－Ｐ８が2.27ｍをはかる。平面形は不整円形を呈し、埋土は２層（Ｅ・Ｆ層）に大別され、柱痕跡部分（Ｅ層）は、褐色シルト粒～塊をやや多く含む黒～暗褐色土。また、カーボンを少し含み、しまりがない。掘方埋土（Ｆ層）は暗褐色シルト粒をやや多く含む褐色土で、しまりがよい。壁にかかる小柱がＰ14～16は支柱穴と考えられる。Ｐ11・12も柱痕跡が認められ、入口施設に関連する柱穴であろう。また、貯蔵穴とみられるＰ１はかまど右側に位置し、不整楕円形を呈する。規模は長軸0.78ｍ、短軸0.57ｍ、床面からの深さ0.18ｍをはかる。埋土は暗褐色シルト粒と焼土を僅かに含む黒褐色土で、多量の遺物も認められる。Ｐ２も貯蔵穴で平面形は長楕円形を呈する。規模は長軸1.19ｍ、短軸0.60ｍ、床面からの深さ0.18～0.20ｍをはかる。埋土はＰ１と類似し、遺物も認められる。このほか皿状を呈する浅いピットがある。

それぞれの柱穴・ピットの規模は、Ｐ５が径0.41～0.45ｍ、床面からの深さ0.46ｍ、Ｐ６が径0.27～0.29ｍ、深さ0.41ｍ、Ｐ７が径0.42～0.50ｍ、深さ0.48ｍ、Ｐ８が径0.32～0.38ｍ、深さ0.37ｍをはかる。Ｐ３・４は不整楕円形を呈しており、規模はＰ３が0.38～0.75ｍ、深さ0.21ｍ、Ｐ４が0.60ｍ以上、深さ0.09ｍ。Ｐ９～16は、ほぼ円形を呈し径が0.11～0.46ｍ、深さ0.04～0.34ｍをはかる。

出土遺物　（第18～25図）１～５は須恵器坏である。１は回転ヘラ切無調整、２～４は回転糸切無調整である。２・４は口縁部が外反しており、内外面に重ね焼きによる痕跡が認められる。２は体部外面に逆さに墨書文字が認められ、「坏」カ。

６～13はあかやき土器坏で、６・７・９は回転糸切無調整、８・10は静止糸切無調整である。７・８・11は部分的に煤が付着しており、７・10・12には重ね焼きによる黒斑が見られる。13は全体がほぼ欠損した坏の破片であるが、逆さに墨書文字が認められ「道」カ。

14～34は、土師器の坏である。14～17は回転糸切後に再調整を施すものである。14は体部下端から底部全面にかけてヘラミガキによる再調整が施され、体部外面に墨書文字が認められ、２文字が上下に合わされたようで「真」と「木」カ。なお、口縁部には重ね焼きによる黒斑が見られ、胎土には金雲母が混入している。15・16は体部下端から底部全面にかけて手持ちのヘラケズリ調整を施している。16は床面より出土しており、体部外面には墨書文字が認められ、「道」と判読できる。なお、非常に歪みが大きく、重ね焼きによる黒斑が見られる。17は体部下端から底部周縁にかけて手持ちのヘラケズリ調整を施す。

18～22・24～27・29は回転糸切無調整のものである。19・20・23～25・31・32は床面、26は焚口である。また、19・20・22・23・25～31は器面に重ね焼きによる黒斑が見られ、21・25は内面の黒色処理がとんでいる。20の体部外面には墨書が認められるが、字体は判読不明である。23・28は静止糸切無調整で、23は器面調整は内面に横方向主体のヘラミガキが施されるが、ロクロ目が部分的に残り丁寧な調整ではない。24は放射状のヘラミガキを施した後、口縁部に強いヘラミガキを施しているため、内面がややくぼんでおり、内面にはタール状の灯芯痕が認められる。25は外面体部下端に火熱を受けており、内面は磨滅しているため調整が不鮮明である。26は体部外面の横方向に墨書文字が認められ、「吉」である。29は口縁部が大きく開き、器厚もうすいものである。30・31は底部を欠損しており、口縁部がやや外反する。31は体部外面に

墨痕が認められる。32・33は口縁部～体部下半にかけて欠損しており、32の外面底部周囲にはミガキ工具による痕がみられる。34は口縁部破片の外面に、逆さに墨書文字が認められる。35・36は高台付坏であり、35は口縁部が大きく開き口縁部が外反し、底部に菊花状のナデツケを施す。36は体部が欠損しており、底部の切離しは糸切で断面三角形状の高台を付する。また、体部外面には煤が付着する。35はかまどの焚口、および36はＰ26から出土している。

37は須恵器壷で体部下半から底部にかけてのみ残存する。器面調整は外面下端に横方向の手持ちヘラケズリ調整を施す。

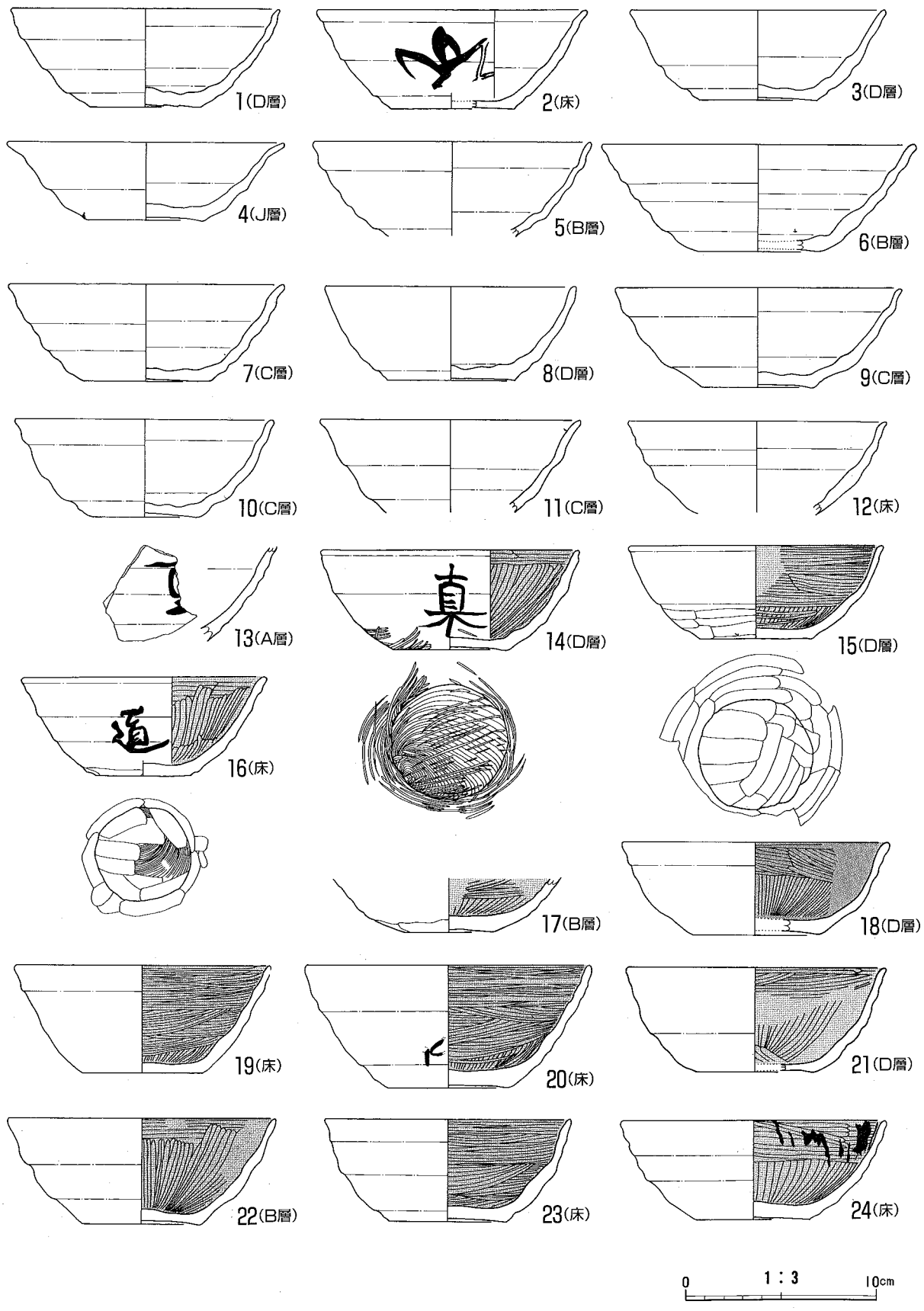
38～42はあかやき土器小形甕で、38・39は体部下半から底部にかけて約１／２を欠損しており、39の内面には全体的に煤が付着する。40・42は体部上半を約１／２欠損している。40は床面およびＰ１より出土しており、残存高5.9㎝、底径6.1㎝をはかる。底部の切離しは静止糸切で、体部下端に回転ヘラケズリ調整を施し、内面の一部には煤が付着する。41はあかやき小形甕で体部上半を欠損しており、残存高6.1㎝、底径6.7㎝をはかる。42は残存高6.9㎝、底径5.5㎝をはかり、底部の切離しは回転糸切で底部に不明瞭なナデを施す。また、火熱により器面が一部剝落している。

43～47はあかやき土器長胴甕で、43は煙出しから出土しており、ほぼ完形で平底の底部が一部欠損している。器高32.5㎝、口径26.4㎝、体部最大径27.7㎝、底径13.2㎝をはかり、最大径を体部中央にもつ。器面調整は、外面が体部上半から体部下端にかけてヘラケズリ調整を施し、内面は体部下半～底部を中心にハケメを残す。また、内面の一部には煤が付着する。44は体部下半が約１／３欠損しており、残存高24.7㎝、口径26.1㎝、最大幅26.3㎝をはかり、最大径を口縁部にもつ。器面調整は外面の体部上半にカキメが施され、後に体部下端にかけてヘラケズリ調整を施し、後に体部下端にがけてヘラケズリを施す。なお、内外面の一部には煤が付着する。45は最大径を口縁部にもち、残存高22.3㎝、口径26.8㎝をはかる。口縁部はロクロナデ成形し、器面調整は外面の体部上半に平行文のタタキで整形し、後に体部下端にかけてヘラケズリを施す。内面はロクロ成形後、縦方向のナデを施す。46は体部中央～底部にかけて欠損しており、残存高13.4㎝、口径27.1㎝をはかる。口縁部はロクロナデ成形しており、内外面の一部には煤が付着する。47は体部中央～底部にかけて欠損しており、残存高13.7㎝、口径24.5㎝をはかる。器面調整は外面の体部にヘラケズリ調整を施す。

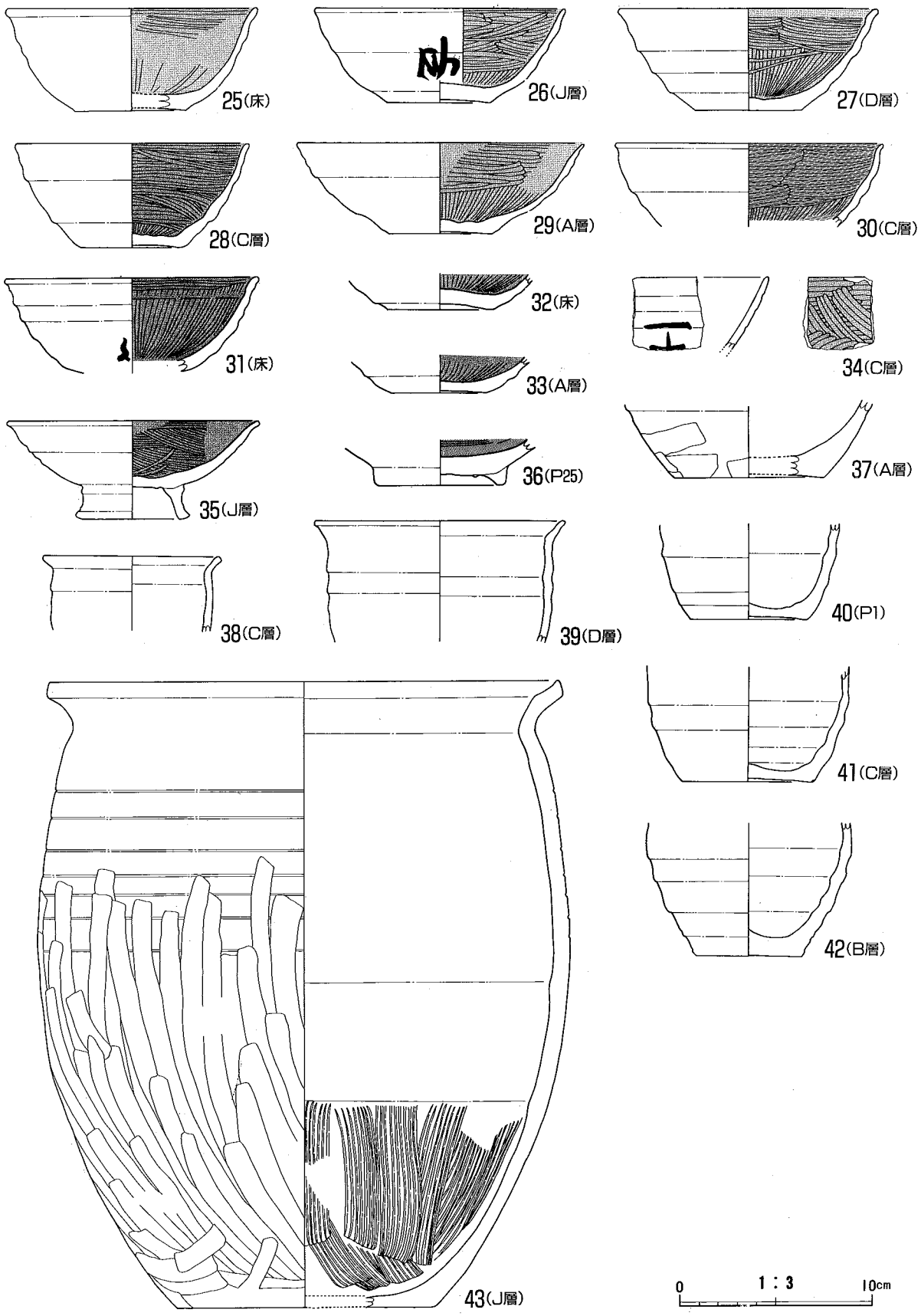
48～50は土師器甕である。49は体部下半～底部にかけて欠損しており、残存高19.3㎝、口径20.0㎝をはかり、最大径を口縁部にもつ。器面調整は口縁部の内外面にヨコナデを施し、外面の口縁部下からヘラナデ、内面の口縁部下からハケメ後にヘラナデを施す。48・50は煙出しから出土しており、体部上半～底部にかけて欠損している。48は残存高12.6㎝、口径26.0㎝をはかり、最大径を口縁部にもち、体部外面には巻上げ痕が残る。器面調整は口縁部の内外面にヨコナデを、内面はハケメの後、幅広のヘラナデを施す。50は残存高8.2㎝、口径25.0㎝をはかり、最大径を口縁部にもち、口縁部体部外面には巻上げ痕が残る。器面調整は口縁部の内外面にヨコナデ、口縁部下から外面はヘラケズリ調整、内面はヘラナデを施す。

51・52は土師器の小形壷であるが、いずれも口縁部と底部を欠損している。51は外面が横方向のヘラミガキの後に丹塗り、内面はナデを施す。52は外面に丹念な横方向のヘラミガキが施される。内面にはナデ痕が見られる。

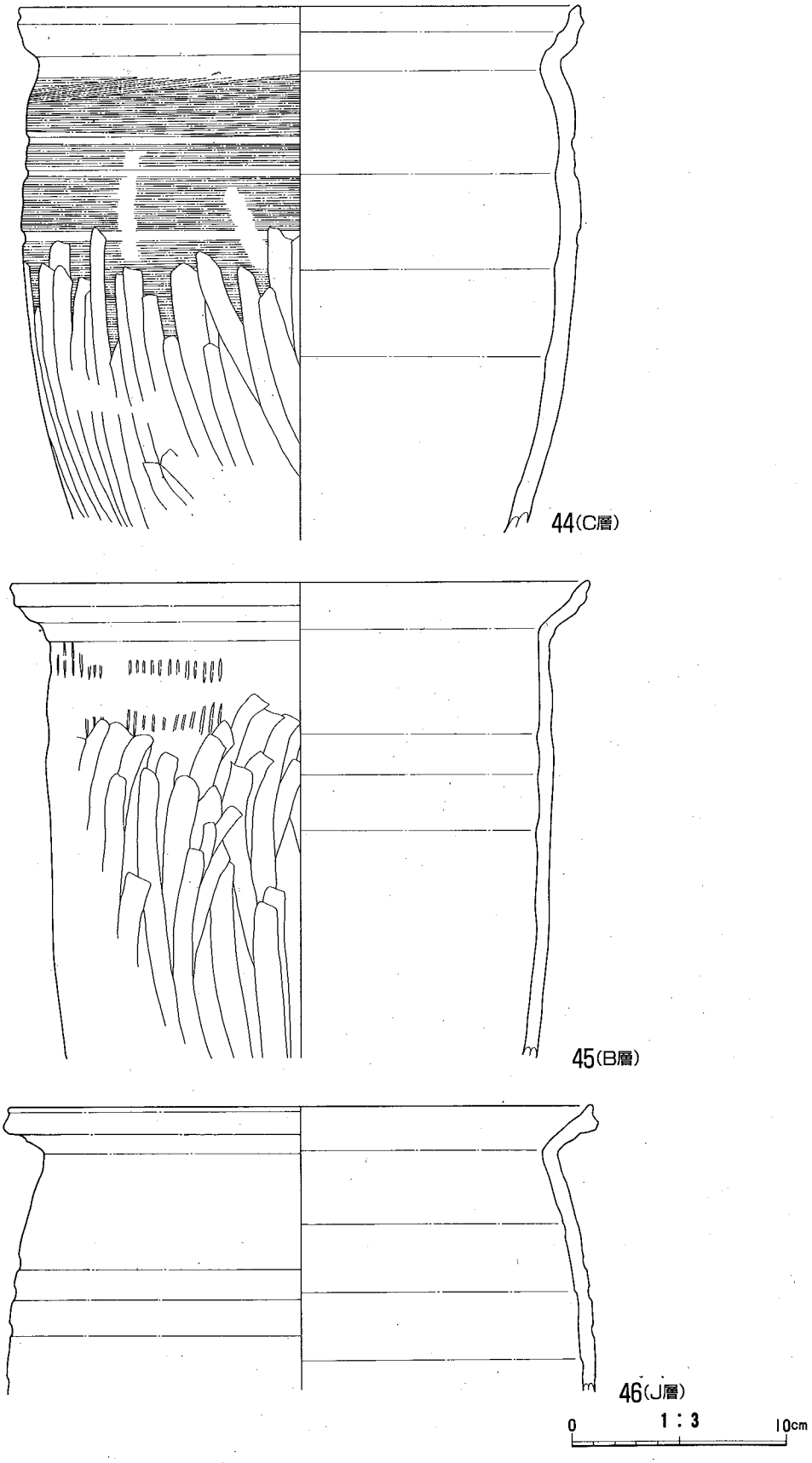
53は須恵器の壷であり、口縁部を欠損している。底部は平底で、最大径を体部上半にもつ。残存高32.5㎝、最大幅32.3㎝、底径12.8㎝をはかり、器面調整は外面は体部上半がカキメを施



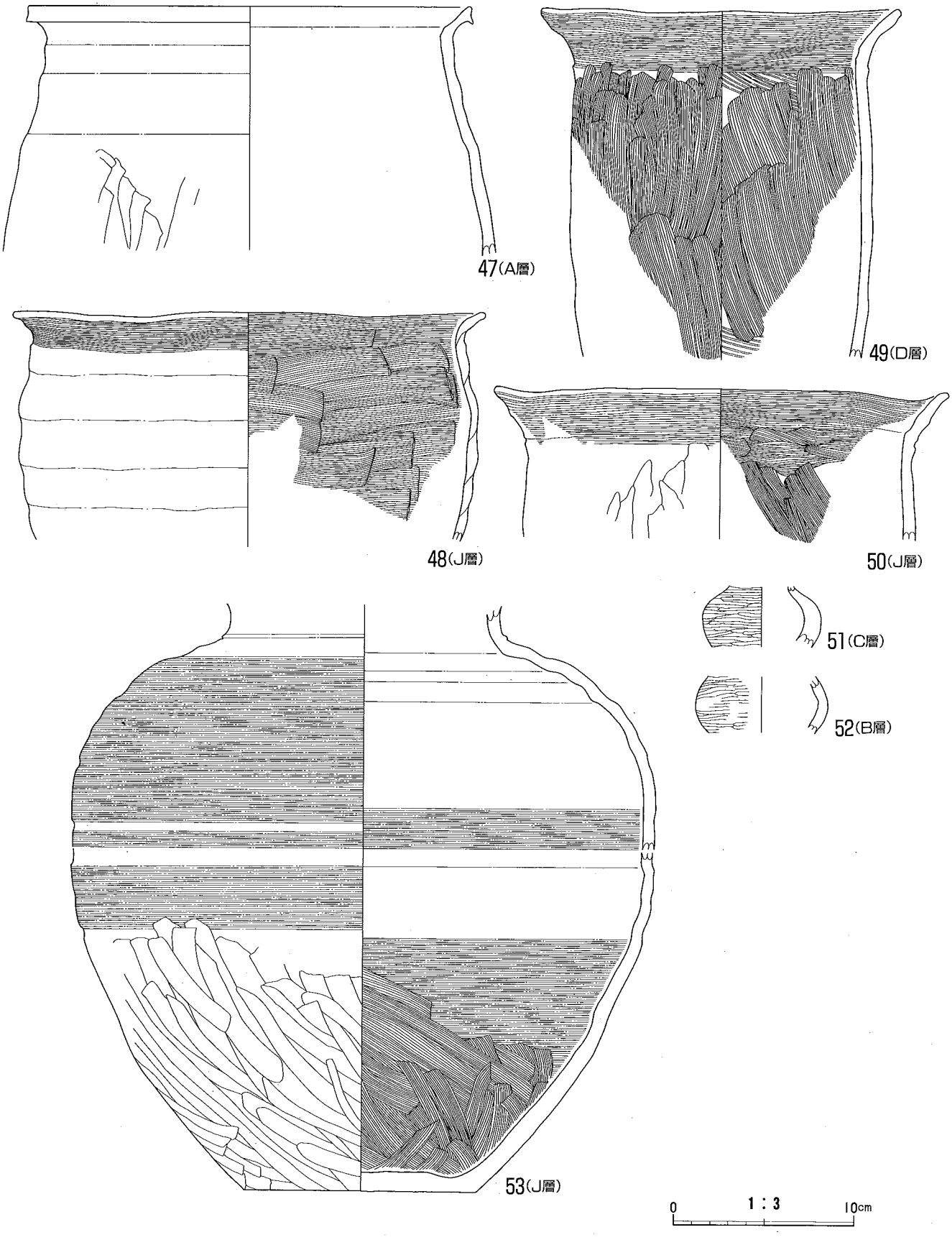
第18図　RA505竪穴住居跡出土遺物(1)



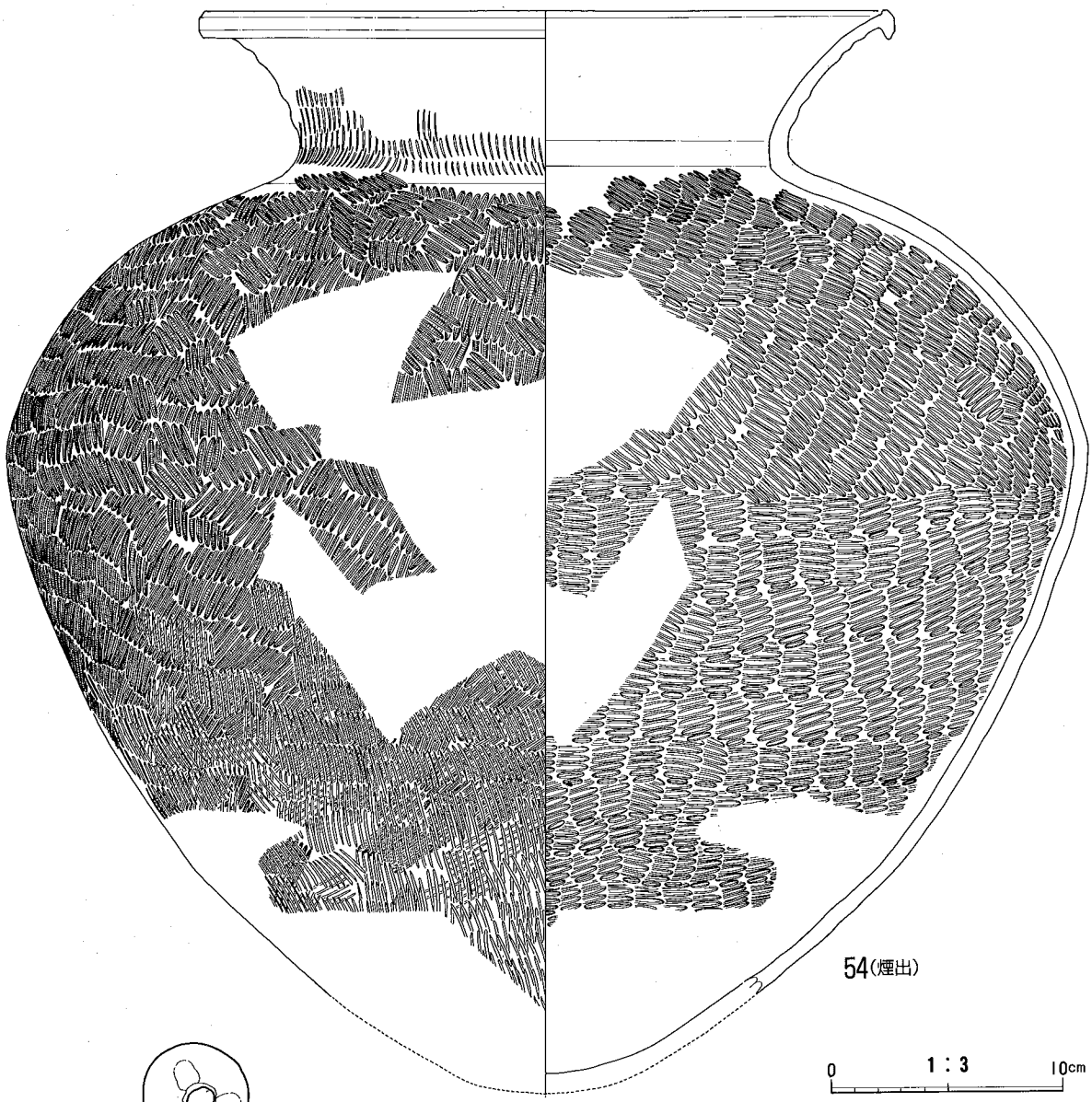
第19図　RA505竪穴住居跡出土遺物(2)

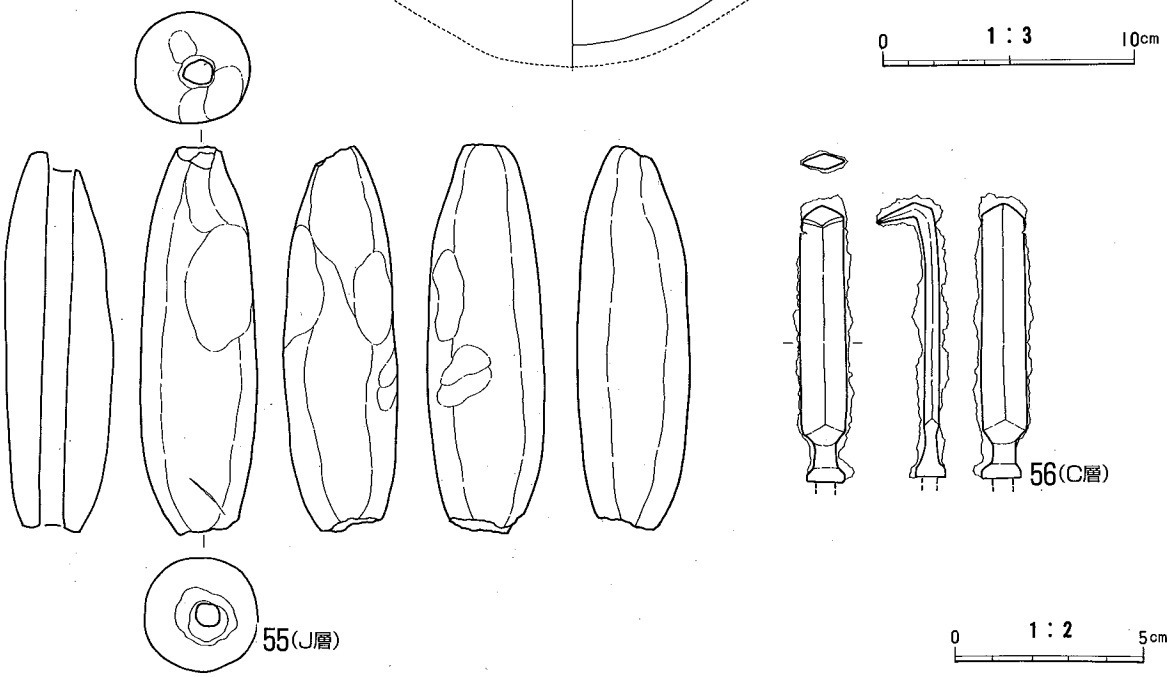


第20図　RA505竪穴住居跡出土遺物(3)

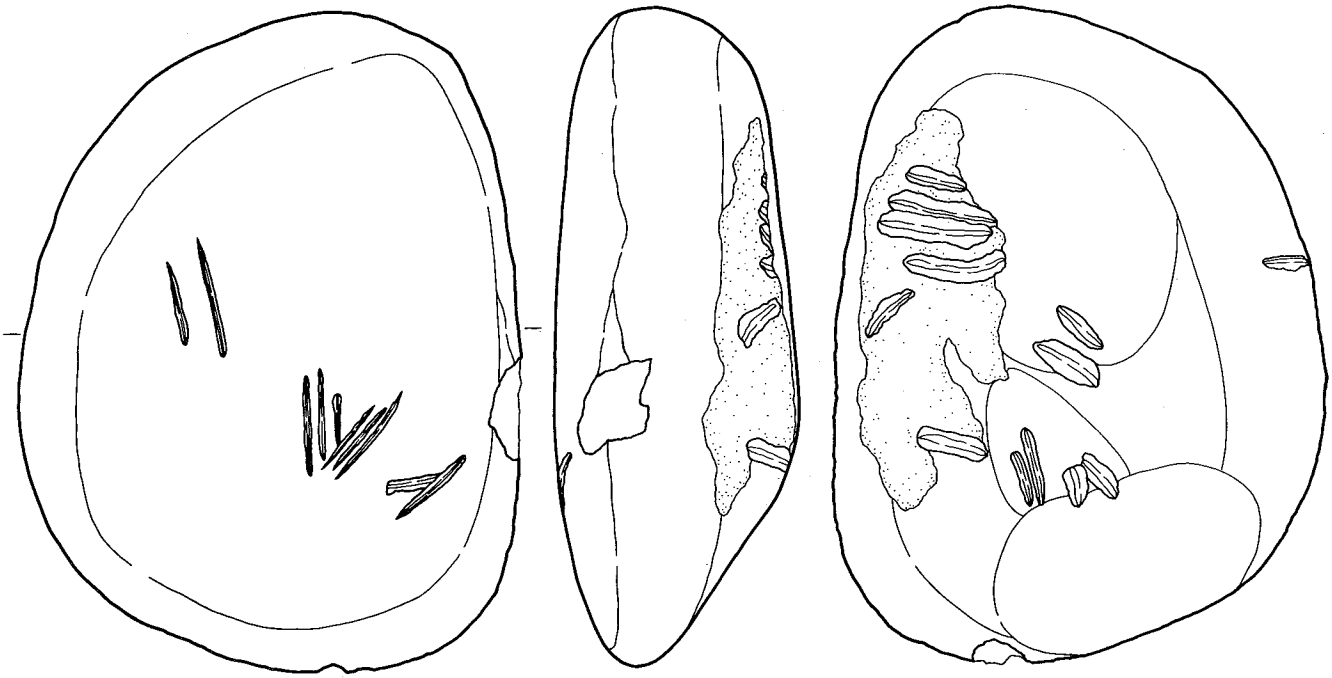


第21図　RA505竪穴住居跡出土遺物(4)

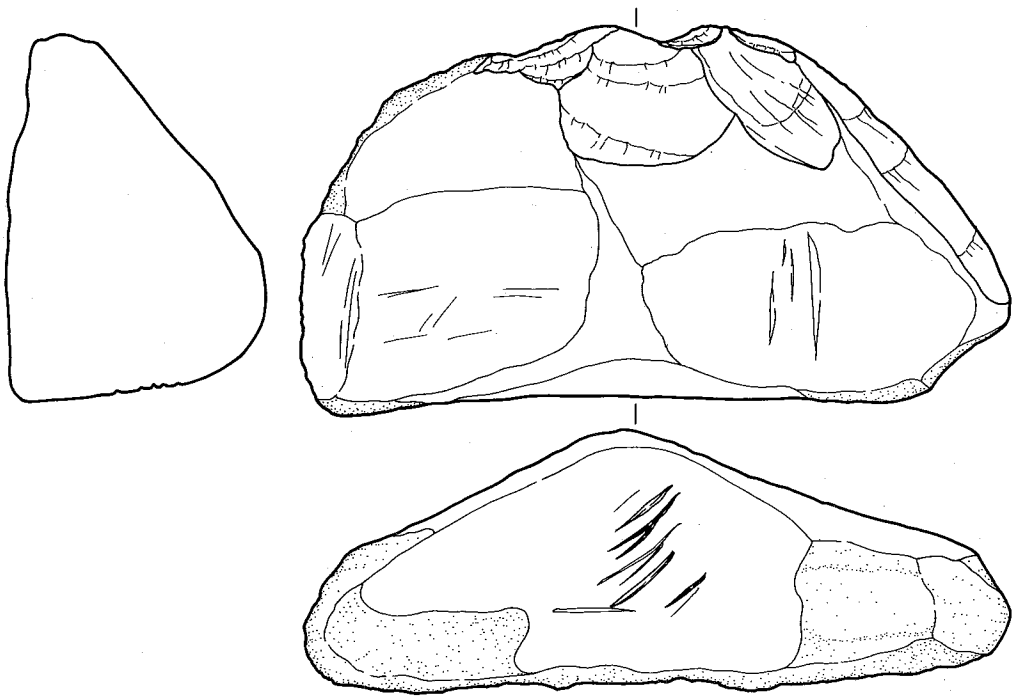




第22図　RA505竪穴住居跡出土遺物(5)



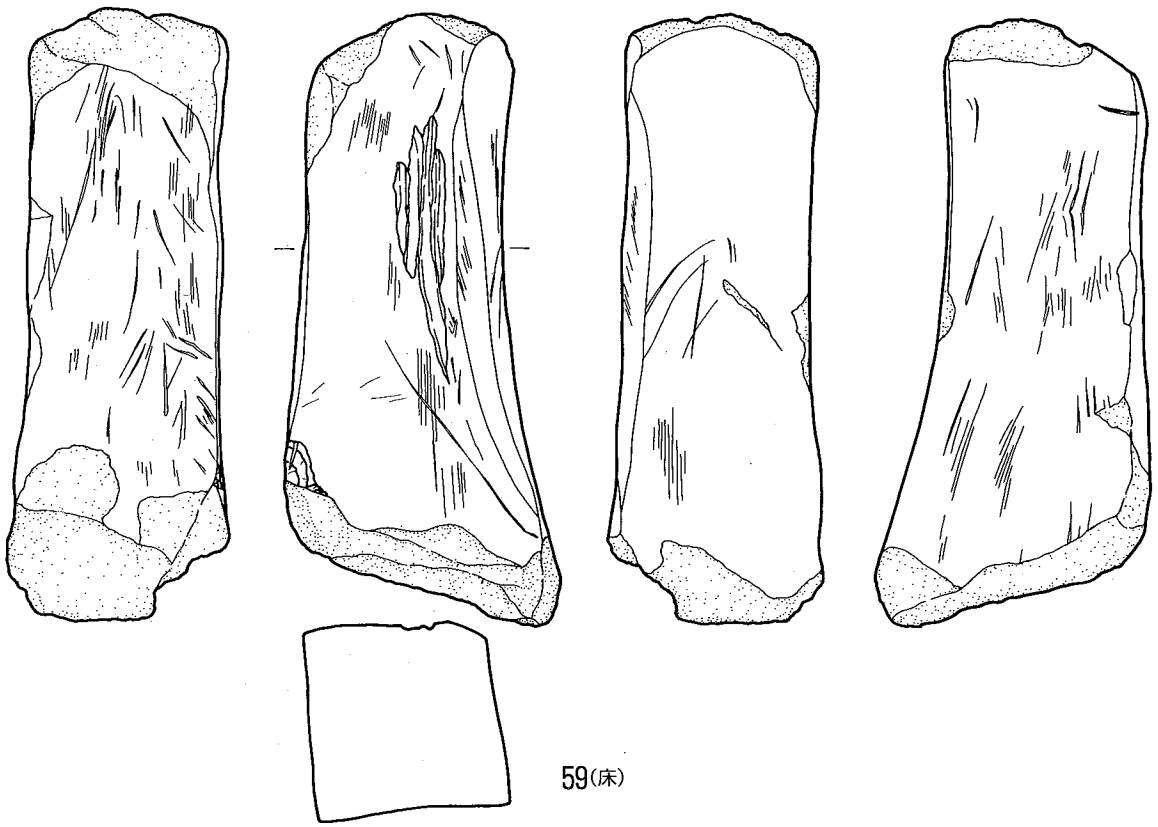
57(P11)

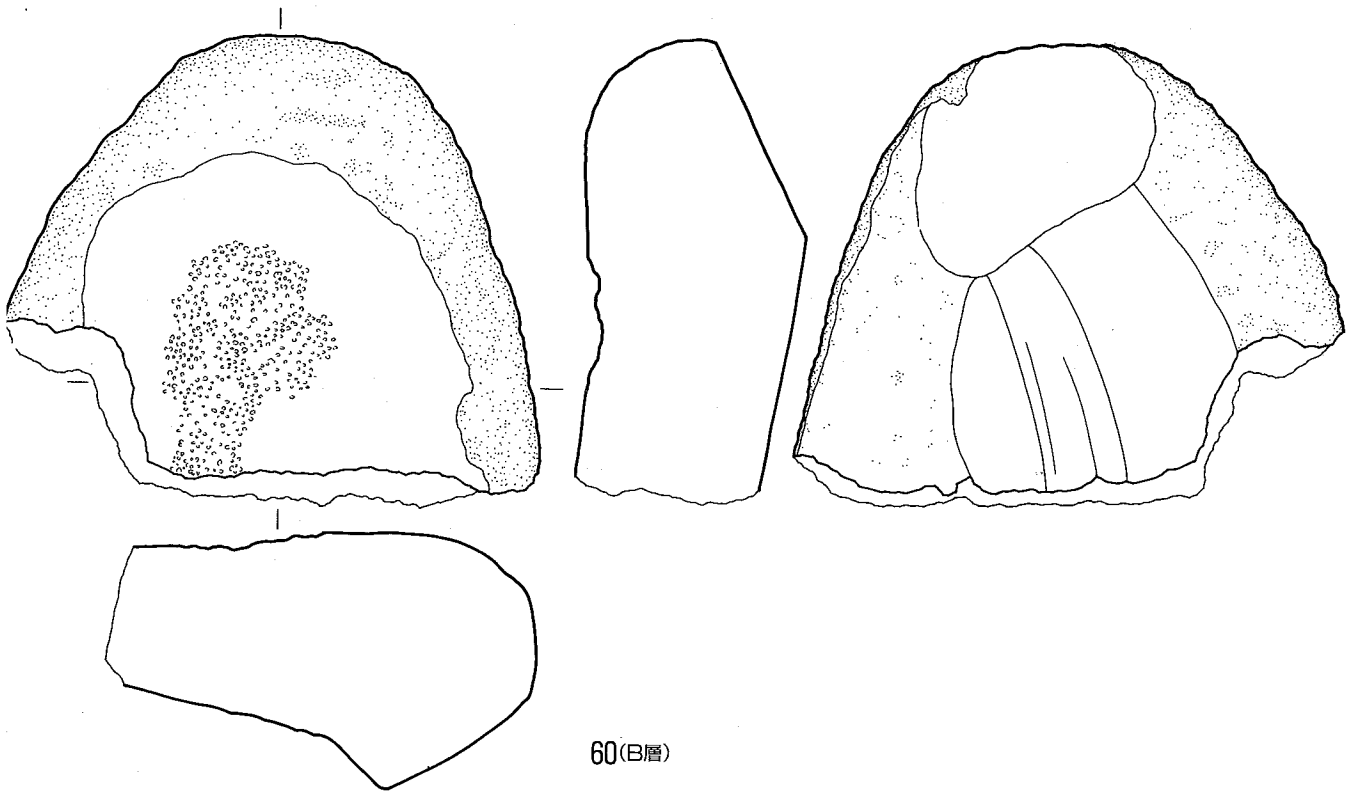


58(床)

0 1:2 5cm

第23図　RA505竪穴住居跡出土遺物(6)





0 1:2 5cm

第24図　RA505竪穴住居跡出土遺物(7)

し、後に体部中央から体部下端にかけてヘラケズリ調整を施す。内面も体部中央と体部下半に部分的なカキメが見られ、それを消すように体部下半から底面にかけてヘラナデを施す。54は底部を欠損するが、ほぼ完形にちかい須恵器大甕である。残存高57.6cm、口径39.2cm、最大幅62.3cmをはかり、最大径を体部上半に持つ。器面調整は内外面とも体部上半～底部周辺にかけて平行文様のタタキを施すが、段階的に底部周辺から体部上半へと横方向におおよそ3段のタタキ調整が認められる。

55は土錘で、かまど崩壊土より出土している。全長7.6cm、最大幅2.3cm、穿孔径0.5～0.55cmをはかる。56の鉄製品は槍鉋と見られ、柄取付け部より先端まで、良好な状態で残存しているが先端部は屈曲している。

57～62は砥石であり、57はP11、58・59は床面、60はB層、61は火床面、62はC層から出土している。57は楕円礫状の安山岩製で、ほぼ全面に使用痕が認められる。58・59の色調は白色を呈し、58は細粒凝灰岩製でほぼ全面に磨面がある。59は細粒砂岩製で四角柱状の短冊形を呈し、4面に磨面が観察される。60は楕円形を呈する多孔質安山岩で、中央部がやや窪み裏面には打痕が残る。61・62は板状を呈しており石材は不明であるが、61は条痕が観察され、62は1面だけに磨面が見られるほか、ほぼ全面に炭化物が付着する。

RD517土坑（第16・17図）

位　　置　調査区北西端。　　**平　面　形**　不整円形。

規　　模　上端0.92～1.18m　下端0.52～0.73m。

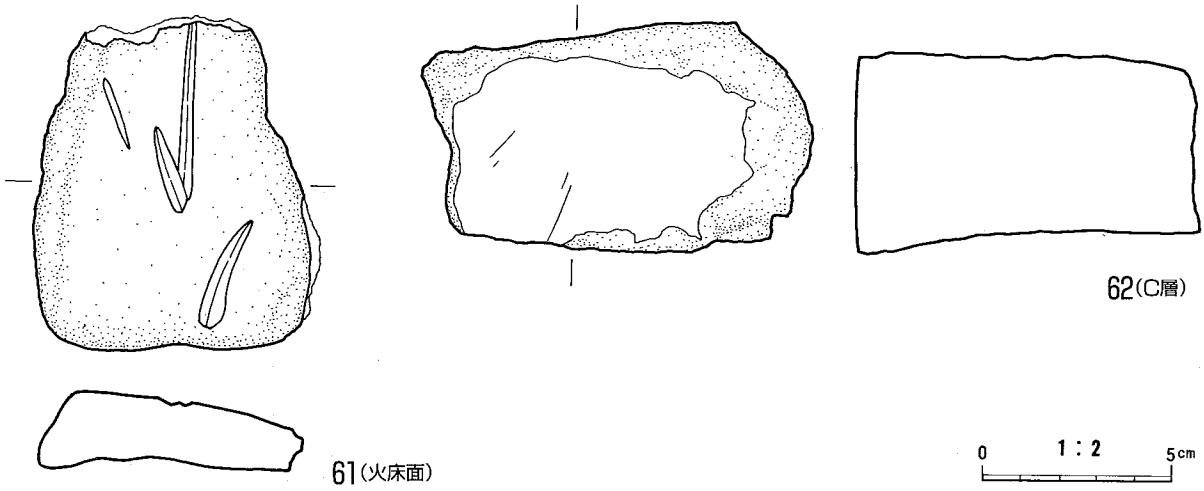
重複関係　なし。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でA～C層。C層は2層に細分。A層－暗褐色シルト粒を少し含む黒褐色土。またカーボンを多く含む。B層－カーボン・炭化材を多く含む黒～黒褐色土。C層－褐色シルト塊を大量に含む黒褐色土。

壁の状態　壁高は0.34mで、検出面から0.11mの所までは直壁だが、その下は湾曲する。

底の状態　ほぼ平坦だが底面が狭い。　　**出土遺物**　なし。



第25図　RA505竪穴住居跡出土遺物(8)

RD501土坑（第26図）

位　　置　調査区北側西寄り、ＲＡ503とＲＡ505の中間。　**平　面　形**　ほぼ円形。

規　　模　長軸上端1.25ｍ、短軸上端1.19ｍ、長軸下端1.03ｍ、短軸下端0.91ｍ。

重複関係　なし。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　未精査。

壁の状態　壁高は0.34ｍで、ほぼ直壁にちかい。　**底の状態**　ほぼ平坦。　**出土遺物**　なし。

RD502土坑（第26図）

位　　置　調査区中央北側、ＲＡ503の南西。　**平　面　形**　南半は撹乱されているが円形～楕円形を呈する。

規　　模　上端0.88ｍ以上、下端0.71ｍ以上。

重複関係　東側を井戸に切られ、北西をＰ95が切る。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ・Ｂの２層。Ａ層－褐色シルト粒を少し含む黒褐色土。Ｂ層－黄褐色シルト塊を多く含む暗褐色シルト。しまりがよい。

壁の状態　壁高は0.16ｍで、底から緩やかに立ち上がる。　**出土遺物**　なし。

RD503土坑（第26図）

位　　置　調査区中央北側、ＲＡ503の南西。　**平　面　形**　北東を撹乱されているが、円形～楕円形を呈する。

規　　模　上端0.63ｍ、下端0.46ｍ。

重複関係　北東側を井戸に切られる。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ・Ｂの２層。ＲＤ502の埋土にほぼ類似する。Ａ層－暗～褐色シルト粒を少し含む黒褐色土。Ｂ層－黄褐色シルト粒～小塊を多く含む暗褐色シルト。しまりややあり。

壁の状態　壁高は0.17ｍで、ほぼ直壁である。　**底の状態**　ほぼ平坦。　**出土遺物**　なし。

RD504土坑（第26図）

位　　置　調査区北端中央からやや東寄りで、ＲＡ503の東側。

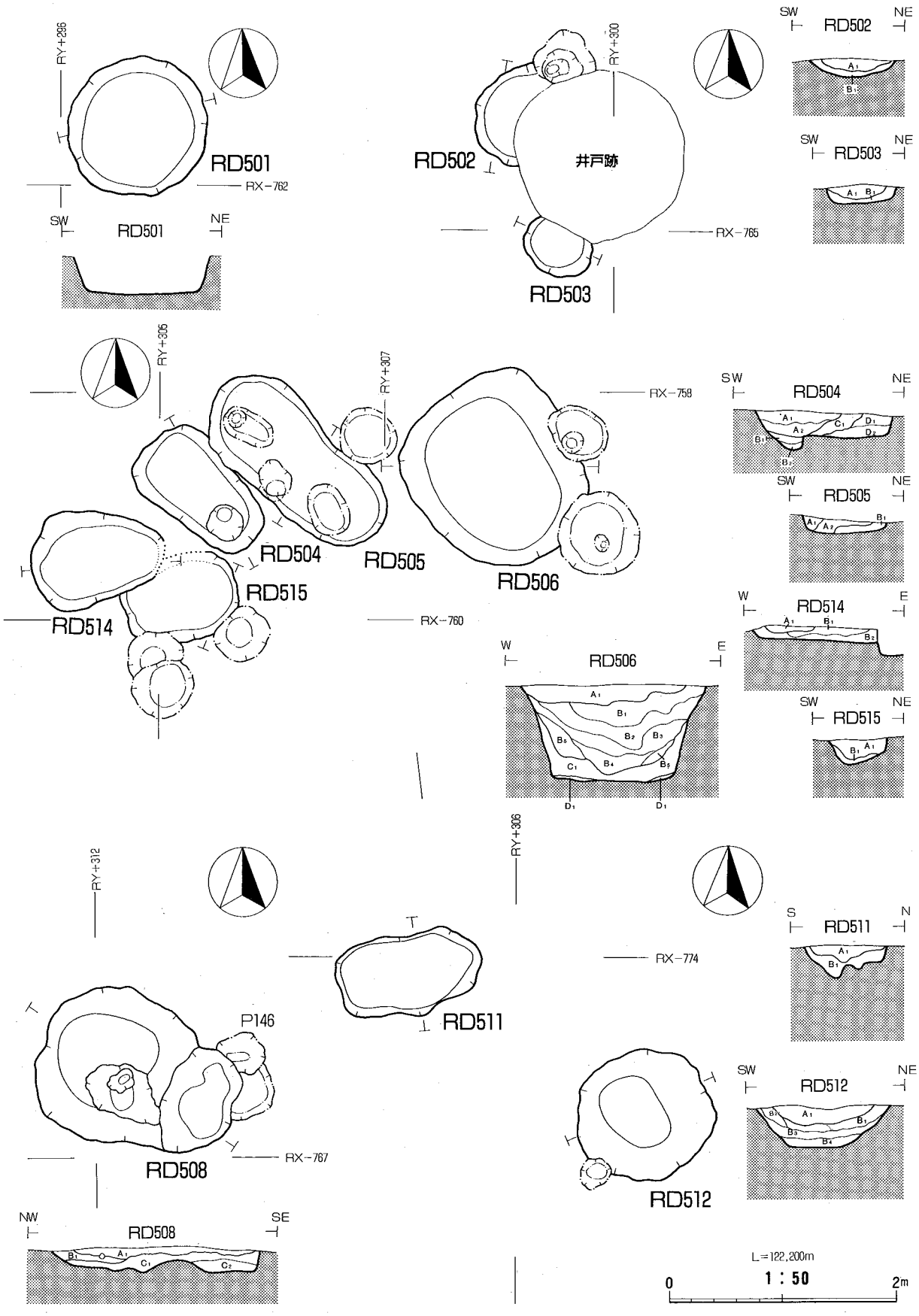
平　面　形　不整長方形。底面南東隅にピットをもつ。　**長軸方向**　N55°W。

規　　模　長軸上端1.26ｍ、短軸上端0.58～0.76ｍ、長軸下端1.06ｍ、短軸下端0.38～0.53ｍをはかる。

重複関係　ＲＤ101を切り、北東側をＲＤ505に切られる。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ～Ｄの４層。Ａ・Ｂ・Ｄ層は２層に細分。Ａ層－褐色シルトを僅かに含む暗褐色土。しまりがある。Ｂ層－褐色シルト塊を少し含む黒褐色土。ピット状落込みにはＢ層が堆積する。Ｃ層－褐色シルト塊を僅かに含む黒褐色土。D_1層－褐色シルトをやや多く含む暗褐色土。D_2層－暗褐色土を少し含む褐色シルト。しまりがよい。



第26図　RD501～506・508・511・512・514・515土坑

壁の状態　壁高は0.23ｍである。北西側はほぼ直壁で南東側は緩やかに立ち上がる。

底の状態　ほぼ平坦で、南東側が落ち込む。(底面に検出したピットの深さは0.35ｍ。)

出土遺物　なし。

RD505土坑（第26図）

位　　置　ＲＤ503の北東側。　**平　面　形**　長楕円形。　**長軸方向**　N62°W。

規　　模　長軸上端1.87ｍ、短軸上端0.73ｍ、長軸下端1.71ｍ、短軸下端0.63ｍをはかる。

重複関係　ＲＤ101・ＲＤ504を切る。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ・Ｂの２層。Ａ層は２層に細分。Ａ層－暗褐色土粉～粒を少し含む黒褐色土。しまりがよい。Ｂ層－黒褐色土粒を僅かに含む暗褐色土。しまりもよい。

壁の状態　壁高は0.06～0.12ｍで、ほぼ直壁である。　**底の状態**　やや起伏がある。

出土遺物　なし。

RD506土坑（第26図）

位　　置　ＲＡ503の北東側。　**平　面　形**　楕円形。

規　　模　長軸上端1.66ｍ、短軸上端1.48ｍ、長軸下端1.33ｍ、短軸下端0.98ｍ。

重複関係　東側をＰ119・122に切られる。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積で、Ａ～Ｄの４層。Ｂ層は５層に細分。Ａ層－褐色シルトを僅かに含む暗褐色土。しまりがある。Ｂ１～４層－褐色シルト粒～塊をやや多く含む黒褐色土。しまりがある。Ｂ５層－暗褐色土を多く含む褐色シルト。Ｂ１～４層ほどしまりがない。Ｃ層－暗褐色土を僅かに含む褐色シルト。Ｄ層－褐色シルト粒を僅かに含む黒褐色土。

壁の状態　壁高は0.82ｍで、底面から直壁ぎみに外傾する。

底の状態　小規模な凹凸が認められるもののほぼ平坦。　**出土遺物**　なし。

RD508土坑（第26図）

位　　置　ＲＡ502の北東側。　**平　面　形**　底面中央および東側端にピットをもつ不整形。

長軸方向　N61°W。

規　　模　長軸上端1.84ｍ、短軸上端0.96ｍ、長軸下端1.62ｍ、短軸下端0.84ｍ。

重複関係　東側でＰ146を切る。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ～Ｃ層。Ｃ層は２層に細分。Ａ層－褐色シルト粒とカーボンを僅かに含む黒褐色土。しまりがある。Ｂ層－褐色シルトと焼土粒を僅かに含む黒褐色土。しまりがある。Ｃ層－褐色シルト粒とカーボンを少し含む黒褐色土。しまりがある。

壁の状態　壁高は0.13～0.20ｍで、北西側は緩やかに立ち上がり、南東側はほぼ直壁である。

底の状態　不整で起伏あり。

出土遺物　埋土上層からあかやき土器坏・甕が出土。ロクロ整形にによる坏は体部下端～底部破片と口縁部の小片が各１点で、甕は頸部及び体部破片が４点、器面調整は外面ヘラケズリを施す。

RD511土坑（第26図）

位　　置　ＲＡ502の南西側。　**平　面　形**　不整長円形。　**長軸方向**　N79°E。

規　　模　長軸上端1.29ｍ、短軸上端0.62ｍ、長軸下端1.16ｍ、短軸下端0.56ｍ。

重複関係　なし。　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ・Ｂ層。Ａ層－褐色シルト粒と小礫を僅かに含む暗褐色土。しまりがある。Ｂ層－暗褐色土を僅かに含む褐色シルト。しまりがある。

壁の状態　壁高は0.14～0.29ｍで、北側は直壁で南側は緩やかに立上がる。

底の状態　不整で著しい凹凸あり。　**出土遺物**　なし。

RD512土坑（第26図）

位　　置　ＲＡ502の南側。　**平　面　形**　ほぼ円形。

規　　模　上端1.12～1.21ｍ、下端0.46～0.67ｍ。　**重複関係**　Ｐ149に切られる。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ・Ｂ層。Ｂ層は４層に細分。Ａ層－褐色シルト塊をやや多く含む暗褐色土。また黒褐色土も僅かに含み、しまりがある。Ｂ層－褐色シルト粉～小塊とカーボンを僅かに含む黒褐色土。しまりがある。

壁の状態　壁高は0.35ｍで、ゆるやかに立ち上がる。　**底の状態**　ほぼ平坦。

出土遺物　Ａ層からあかやき土器坏の体部破片１点、土師器坏は口縁から体部にかけての破片が３点、あかやき土器甕体部破片が１点、土師器の甕体部破片が５点が出土した。

RD513土坑（第27・28図）

位　　置　調査区南端中央で、調査区外に広がる。

平　面　形　楕円形を呈し、南壁に溝状の張出しをもつ。

規　　模　土坑長軸上端1.52ｍ、短軸上端0.96ｍ、長軸中端1.31ｍ、短軸中端0.87ｍ、長軸下端1.37ｍ短軸下端0.82ｍ。溝状の張出し部の規模は長さ0.33ｍ以上、上端幅0.29～0.46ｍ、下端幅0.11～0.24ｍ。

重複関係　なし。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ～Ｄ層。Ｃ層は２層に細分。Ａ層－褐色シルト粒と焼土粒を僅かに含む黒褐色土。Ｂ層－黒褐色土とカーボンを僅かに含む赤褐色の焼土。Ｃ１層－褐色シルト粒と僅かに含む黒褐色土。また、カーボンを多量に含む。Ｃ２層－褐色シルト粒を少し含む黒褐色土。Ｄ層－黒褐色土粒～塊をやや多く含む褐色シルト。すべてややしまりがある。

壁の状態　壁高は0.21ｍで、北側は袋状を呈する。　**底の状態**　ほぼ平坦であるが傾斜をもつ。

出土遺物　１は須恵器の坏で、口縁部を欠損している。底部の切離しは回転糸切無調整である。２はあかやき土器坏で、底部が一部欠損しているが回転糸切無調整である。３は内面にヘラミガキ調

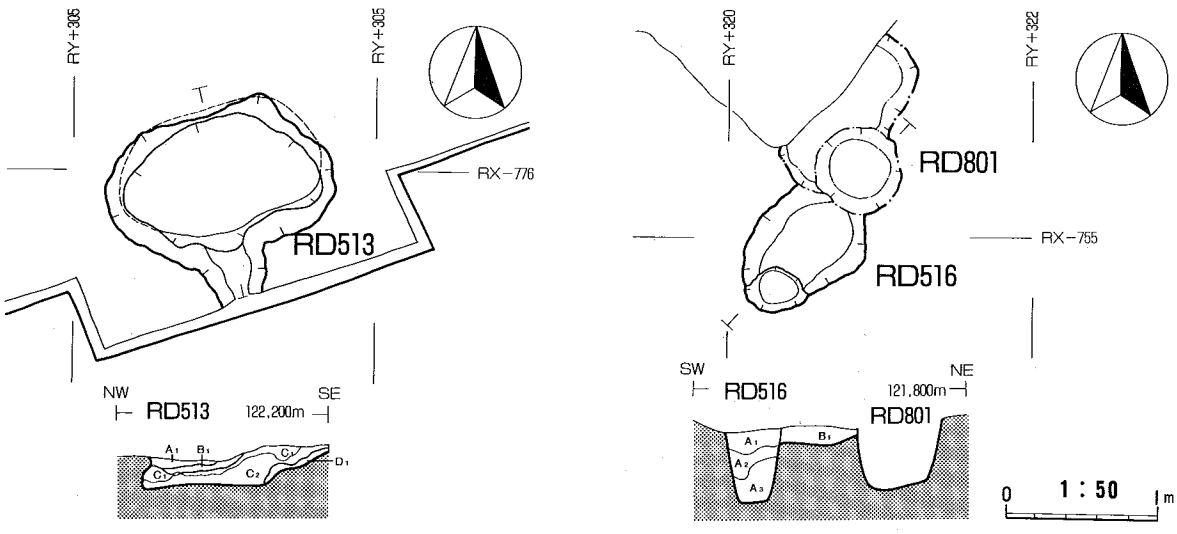
整を施す土師器の坏で、底部の切離しは回転糸切無調整である。口縁部に重ね焼きによる黒斑が見られる。4はあかやき土器甕である。体部下半～底部にかけて約1／3ほど欠損している。残存高19.2cm、口径24.1cmをはかり、最大径は口縁部にある。外面は体部中央からヘラケズリ内面は口縁部下にカキメ、その後にハケメ・ナデを施す。外面には煤が付着する。

RD514土坑（第26図）

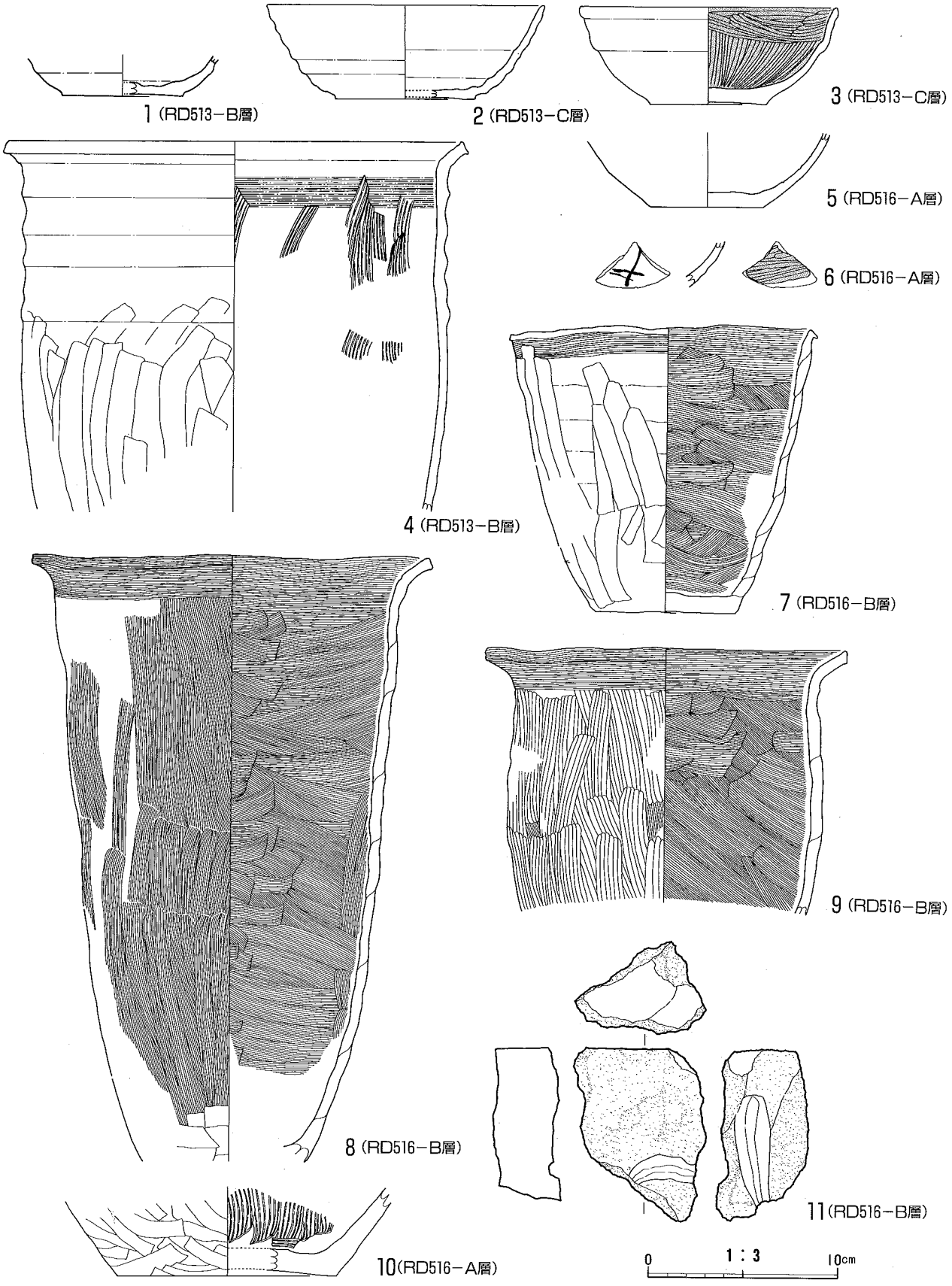
位　置　調査区北端やや東寄り。ＲＡ503北東側。　**平面形**　不整楕円形。
長軸方向　N72°E。
規　模　長軸上端1.18ｍ以上、短軸上端0.80ｍ、長軸下端1.04ｍ以上 短軸下端0.58ｍ。
重複関係　ＲＡ503とＲＤ515に切られる。
検出状況　**掘込面**－削平。　**検出面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。
埋　土　自然堆積でＡ・Ｂ層。Ｂ層は2層に細分。Ａ層－黒褐色土に褐色シルト粒を僅かに含み、しまりがある。Ｂ層－暗褐色土に褐色シルトを僅かに含み、しまりがある。
壁の状態　壁高は0.12ｍで、緩やかに立ち上がる。　**底の状態**　ほぼ平坦。
出土遺物　なし。

RD515土坑（第26図）

位　置　ＲＡ503北東側。ＲＤ514に隣接。　**平面形**　不整長方形。　**長軸方向**　N69°E。
規　模　長軸上端1.01ｍ、短軸上端0.68ｍ、長軸下端0.89ｍ、短軸下端0.51ｍ。
重複関係　ＲＡ503とＰ124・126に切られ、ＲＤ514を切る。
検出状況　**掘込面**－削平。　**検出面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。
埋　土　自然堆積でＡ・Ｂ層。Ａ層－褐色シルト粒を僅かに含む黒褐色土で、しまりがある。Ｂ層－暗褐色土をやや多く含む褐色シルトで、しまりがある。
壁の状態　壁高は0.12～0.24ｍで、ほぼ直壁である。
底の状態　西側が東側より0.15ｍほど深くなる。　**出土遺物**　なし。



第27図　RD513・516土坑



第28図　RD513・516土坑出土遺物(1)

RD516土坑（第27・28・29図）

位　　置　調査区東端北寄り。　　**平 面 形**　不整楕円形を呈し南西隅をピットに切られる。

規　　模　長軸上端0.87ｍ以上、短軸上端0.68ｍ、長軸下端0.79ｍ、短軸下端0.44ｍ。

重複関係　ＲＤ801とＰ175ピットに切られる。

長軸方向　Ｎ37°Ｅ。

検出状況　**掘 込 面**－削平。　　**検 出 面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　Ａ層はピットの埋土で３層に細分。Ａ層－褐色シルトを粒～塊状に少し含む暗褐色土。ややしまりがある。なお、Ａ1層のみカーボンを含む。Ｂ層－僅かな褐色シルト粒を含む黒褐色土。ややしまりがある。また、土器を多量に混入する。

壁の状態　北東側の壁高は0.13ｍで緩やかに立ち上がり、ピットは直壁で検出面からの深さは0.47ｍをはかる。

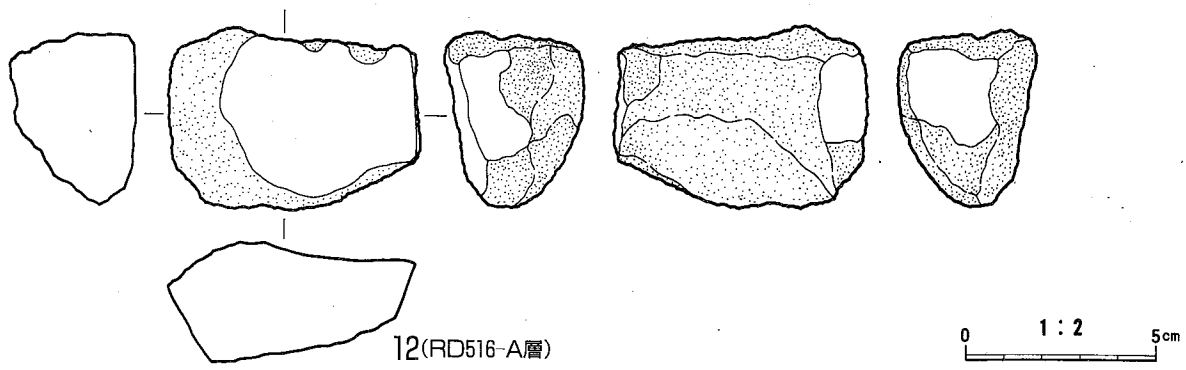
底の状態　北側が0.08ｍほど高い。

出土遺物　５は須恵器坏で、口縁部を欠損しており、回転糸切無調整である。６は土師器坏の破片で、外面に墨書文字が認められるが、破片のため文字は判読不能である。７は土師器鉢である。ほぼ完形で器高15.1㎝、口径約16.0㎝、底径7.4㎝をはかり、最大径を口縁部にもつ。内外面には巻上げ痕が残る。器面調整は、口縁部の内外面がヨコナデ、体部外面にはヘラケズリ、体部内面にはヘラナデを施す。

８・９は土師器甕である。８は底部が欠損しており、残存高32.2㎝、口径約21.2㎝をはかる。最大径を口縁部にもち、小さく外反する。器面調整は、口縁部の内外面がヨコナデ、体部外面にはヘラナデ、体部下端にはヘラケズリ調整、体部内面はヘラナデを施す。９は体部下半から欠損しており、残存高14.6㎝、口径17.7～19.6㎝をはかる。器面調整は、口縁部の内外面がヨコナデ、体部外面にはヘラナデ後にヘラミガキ、体部内面にはヘラナデを施すも部分的にヘラミガキ様の細い単位が観察される。

なお、８・９とも口唇部の整形には工具による。10は須恵器の甕で、底径は12.0㎝をはかる。器面調整は、外面が体部下半から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリ調整を施し、内面は底部までハケメが施される。

11・12は安山岩製の砥石で、それぞれ深い切創痕と磨面が認められる。



第29図　RD513・516土坑出土遺物(2)

(3) 中世以降の遺構と遺物

RG801溝跡（第30図）

位　　置　調査区東側、北北西－南南東を軸にＲＧ802と併走。

平 面 形　北側でやや細くなり、西にわずかに弧を描く。検出した平面形約１／３を、底部まで検出精査し、掘削の及ぶ北側は、検出面から深さ約0.40ｍまで精査を行い、それ以下を遺構保存措置とした。上端線は両側とも凹凸が著しい。　**長軸方向**　Ｎ14°Ｅ。

規　　模　検出された溝の総延長は19.92ｍで、上端5.11～6.08ｍ、中端0.19～0.81ｍ、下端0.06～0.36ｍ。深さは、検出面から底面まで1.86ｍをはかる。

断 面 形　逆二等辺三角形を呈する薬研形を呈し、約135°に開く。北側がやや下端の間隔がひろがり、最深部の底部の形状はやや丸みを帯びる。

重複関係　ＲＧ803－Ｗ・ＥとＰ１に切られる。804との重複関係は不明。

検出状況　**掘 込 面**－削平。　**検 出 面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ～Ｄ層。Ａ層は４層、Ｃ・Ｄ層は６層に細分。Ａ層－褐色シルト粒を少し含暗褐色土で、しまりがある。全体に東側に偏って堆積。Ｂ層－暗褐色土と褐色シルトの混合土で僅かにカーボンを含み、多量の拳～人頭大の自然礫が混入し西側に顕著に堆積。Ｃ層－焼土粒～塊とカーボンを多量に含む暗褐色土。Ｄ層－褐色シルト粒～塊をやや多く含む、粘性の高い黒～暗褐色土。底面直上のＤ$_{5・6}$層には焼土粒・カーボンを少し含む。水成堆積の痕跡は認められない。

壁の状態　やや凹凸はあるが、底面から緩やかに立ち上がる。

柱　　穴　溝壁面に18口検出。平面形はおよそ不整円形～楕円形を呈する。柱痕跡が確認できるものはＰ１のみで、Ｐ２～17はＲＧ801壁面に構築された柱穴で、壁面に堀込まれる。Ｐ18はＲＧ803－Ｗに切られる。径及び検出面からの深さは次表のとおり。

（単位：ｍ）

No.	径	深さ	No.	径	深さ	No.	径	深さ	No.	径	深さ	No.	径	深さ
1	0.42	0.49	2	0.34	0.31	3	0.26	0.06	4	0.16	0.08	5	0.20	0.09
6	0.28	0.18	7	0.23	0.08	8	0.22	0.12	9	0.21	0.16	10	0.13	0.16
11	0.24	0.18	12	0.22	0.24	13	0.21	0.08	14	0.24	0.16	15	0.18	0.10
16	0.24	0.24	17	0.22	0.24	18	0.16	0.44	－	－	－	－	－	－

埋土はＲＧ801下層のＤ$_{4～6}$に類似するも、しまりはより強く混入土もやや多い。これら柱穴は西壁の120.6～121.0ｍの等高線間に集中する傾向が見られる。溝跡の一部のみでの検出であるため、間尺や配置等の検討が課題である。

出土遺物　すべて、Ａ層からの出土。須恵器・あかやき土器・土師器である。

RG802溝跡（第30図）

位　　置　調査区東側、ＲＧ801の西側に約0.50～0.62ｍの間隔をおいて南北に併走。

平 面 形　東西にゆるやかに蛇行し、中央西側でいったん２条に分かれるが、約6.50ｍで再び合流する。上端線は両側とも凹凸がややあり、中端は北側で東寄り、南側で西寄りに認められる。また、溝の幅は北側で狭くなる。

規　　模　検出された溝の総延長は18.37ｍで、上端は0.37～1.12ｍ、中端0.46～0.97ｍ、下端0.12～0.68ｍ、合流部では上端1.45～1.68ｍ。深さは検出面から底面まで0.05～0.56ｍをはかり、南側に僅かに深くなる。

断 面 形　壁は南端で底面から直壁ぎみに立ち上がるが、北側ではほぼ平坦な底面から緩やかに立ち上がる。

重複関係　なし。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　　**検　出　面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ～Ｄ層。基本的な層位・埋土はＲＧ801に類似する。Ｄ層下部の暗褐色土に褐色シルトを少し含み、よくしまる。水成堆積と考えられる砂粒が堆積する。なおＲＧ801との間に0.16～1.21ｍの幅で平坦面が認められるが、この上に堆積するＦ１層は、堅い褐色シルトに黒褐色土・黄褐色シルトが塊状に堆積し、シルト面とは節理状に剝離する。非常に堅くしまり、人為的に踏まれたと考えられる。

壁の状態　凹凸があり底面から0.48ｍ所で一部壁の崩落が認められるが、壁は緩やかに立ち上がる。

柱　　穴　溝底面にＰ18～20の３口検出。平面形はおよそ不整円形～楕円形を呈する。径は0.15～0.45ｍ、検出面からの深さ0.18～0.35ｍをはかる。埋土はＲＧ801の柱穴と類似。

出土遺物　なし。

RG803Ｅ・Ｗ溝跡（第36図）

位　　置　調査区東端南寄り。

平 面 形　北北東－南南西方向を軸にＥ・Ｗ共にＲＧ801に直交し、Ｅ・Ｗ間は検出できなかったが、ＲＧ801堆積段階での検出であり、一連の溝である。ＲＧ801上端から東側で0.46ｍ、西側で0.61ｍ張り出すが上・下端共に終結する。上端線は両側とも凹凸あり。

規　　模　溝の総延長は推定で7.03ｍで、Ｅ－2.16ｍ、Ｗ－1.77ｍ（共に残存値）をはかる。幅はＥの上端0.36～0.49ｍ、下端0.19～0.30ｍ、Ｗの上端0.34～0.52ｍ、下端0.19～0.31ｍ。Ｅ・Ｗともに約1.10ｍの比高差があり、ＲＧ801中央部に向かって傾斜する。深さは、検出面から底面までＥが0.14～0.33ｍ、Ｗが0.12～0.43ｍをはかる。

断 面 形　断面形はＵ字状を呈する。

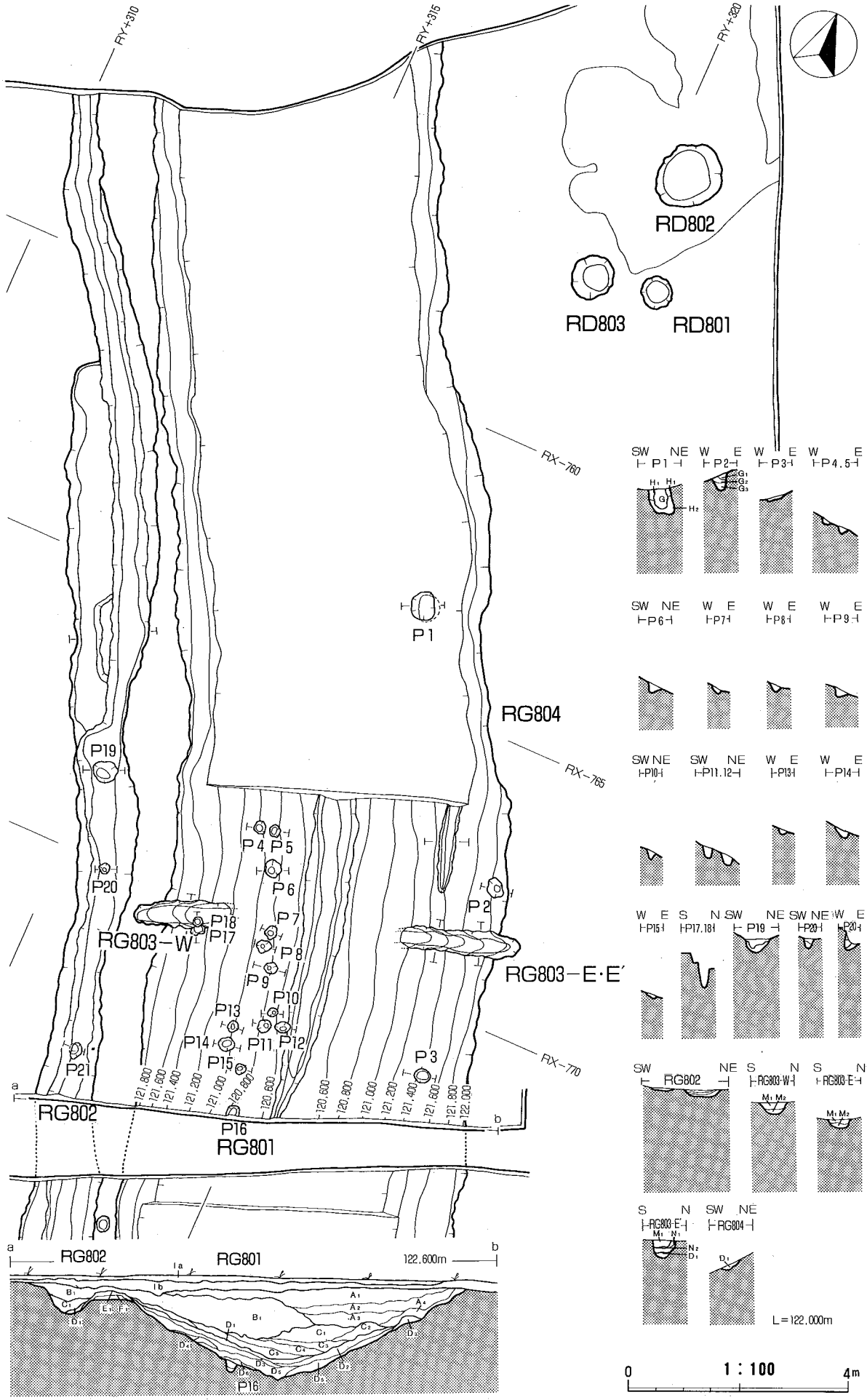
重複関係　ＲＧ801及びＰ17・18を切る。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　　**検　出　面**　ＲＧ801の壁面。

埋　　土　自然堆積でＭ～Ｏ層。Ｎ層は２層に細分。Ｍ・Ｎ層－褐色シルト粒を僅かに含む暗褐色土で、しまりがある。Ｏ層－褐色シルト粒を僅かに含む黒褐色土で、しまりがある。

壁の状態　凹凸があり、直壁ぎみに立ち上がる。

出土遺物　なし。



第30図　RG801・802・803・804溝跡

RG804溝跡（第30図）

位　　置　調査区東端南寄り。ＲＧ801の東壁に構築される。

平 面 形　北北西－南南東方向を軸にのびる。北側は未検出で、上端線は細かな凹凸あり。

規　　模　検出した長さは1.57ｍで、幅は上端0.22～0.30ｍ、下端0.14～0.16ｍ。深さは、検出面から底面まで0.09ｍ。

重複関係　ＲＧ801との新旧関係は不明だが、ＲＧ801の一施設の可能性もある。

検出状況　**掘 込 面**－不明。　**検 出 面**　ＲＧ801の壁面。

埋　　土　自然堆積でＲＧ803のＯ層に類似。

壁・底の状態　皿状で緩やかに立ち上がる。

出土遺物　なし。

RD801土坑（第31図）

位　　置　調査区北西隅。　**平 面 形**　不整円形。

規　　模　上端0.57～0.58ｍ、下端0.37～0.40ｍ。

重複関係　Ｐ175・ＲＤ516を切る。

検出状況　**掘 込 面**－削平。　**検 出 面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　人為堆積でＡ・Ｂ層。各２層に細分。Ａ層－褐色シルト粒を少し含む暗褐色シルト。Ｂ層－褐色シルト粒を少し含む黒褐色土で、しまりがよい。

壁の状態　壁高は0.43～0.48ｍで、ほぼ直壁。

底の状態　中央がややくぼむ。

出土遺物　人骨や副葬品はないが、堆積から近世墓と考えられる。

RD802土坑（第31図）

位　　置　調査区北西隅、ＲＤ801の北側に隣接。　**平 面 形**　不整楕円形。

規　　模　上端1.04～1.32ｍ、下端0.78～0.99ｍ。　**重複関係**　なし。

検出状況　**掘 込 面**－削平。　**検 出 面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積。Ａ層が６層に細分される。$A_{1\cdot2}$層－褐色シルト粒～小塊を少し含む暗褐色土で、しまりがある。A_3層－褐色シルト粒を僅かに含む黒色土。$A_{4\sim6}$層－褐色シルト粒～塊をやや多く含む暗褐色土で、よくしまる。

壁の状態　確認した壁高は0.22～0.34ｍで、北西側はほぼ直壁で、南東側が緩やかに立ち上がる。

底の状態　北側がやや深くなる。

出土遺物　Ａ層から須恵器坏の体部破片が１点、外面ヘラケズリ調整を施す須恵器壷の体部破片が１点出土している。また土師器坏の体部破片１点、糸切後再調整された底部破片が１点出土した。

なお、人骨や副葬品はないが、堆積から近世墓と考えられる。

RD803土坑（第31図）

位　　置　調査区北西隅、ＲＤ803西側に隣接。　**平 面 形**　不整円形。

規　　模　上端0.71～0.82ｍ、下端0.44～0.47ｍ。

重複関係　P174を切る。

検出状況　**掘込面**－削平。　　**検出面**－耕作土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　人為堆積でA・B層の2層。A層－褐色シルト粒を少し含む暗褐色土で、しまりがある。B層－褐色シルトを僅かに含む黒褐色土で、しまりがある。

壁の状態　壁高は0.36～0.38mで、ほぼ直壁。

底の状態　ややくぼむ。

出土遺物　副葬品はないが、人骨が出土しており、近世墓である。

RD804土坑（第31図）

位　　置　調査区中央から東寄り、RA502の北東側に隣接。　　**平面形**　不整楕円形。

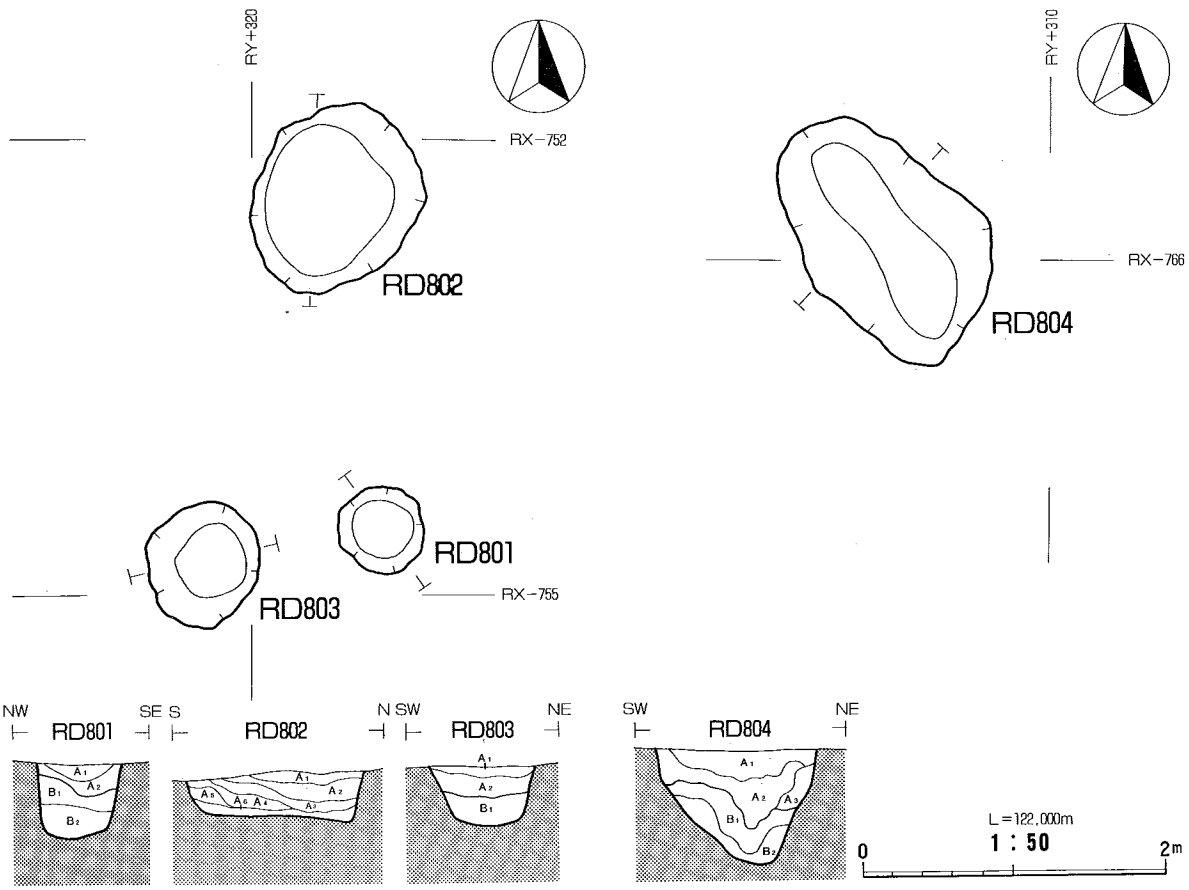
長軸方向　N35°W。

規　　模　長軸上端1.79m、短軸上端1.11m、長軸下端1.47m、短軸下端0.34m。

重複関係　なし。

掘込面　削平。　　**検出面**－耕作土直下の黄褐色シルト上面。

埋　　土　自然堆積でA・B層。A層は3層に、B層は2層に細分。A層－黒褐色土粒～塊とカーボンを少し含む暗褐色土で、しまりがある。B層－褐色シルト粒とカーボンを僅かに含む黒褐色土で、しまりがある。



第31図　RD801・802・803・804土坑

壁の状態　壁高は0.70～0.74ｍ、上部２／３あたりまで直壁、その下は緩やかである。

底の状態　ややくぼむ。　　**出土遺物**　なし。

ピット群（第32図）

位　　置　第１・３次調査区で検出したピットは総計196口を数える。このうち、ＲＧ801・802で述べた21口を除いたピットは175口をかぞえ、何らかの建物跡を構成する柱穴と考えられるが明確な遺構を確認し得なかった。

ピットの分布は調査区中央部付近が、特に密に分布が認められる。特にＲＤ513西側、ＲＡ501北側、ＲＡ503東側、ＲＡ505周囲に集中するようである。

規　　模　個々のピットの規模は径が約0.15ｍ前後の小さなものＰ11～14、16～23、径が約0.30ｍ前後のものＰ1～10、24～26、径が0.40前後の比較的大きなものＰ63～67、85～87、その他にＰ58が0.60～1.30ｍ、Ｐ79が0.60×0.66ｍ、Ｐ100が0.60～0.90ｍをはかるが、埋土が混合土であり規模の大きさから抜き取り痕とも考えられる。

柱痕跡　柱痕跡が確認できるものは、Ｐ１・２・６・８・15・16・26・40・48～50・66・80・90・91・96・100・101・108・115・126・148・150・156･159の計25口である。

埋　　土　検出面は削平された地山シルトで、また堀込み面は不明であるが、埋土のほとんどは、黒褐色～暗褐色土を主体とし、褐色シルトを含むものが主流となる。概ね２～３層の堆積が確認できる。層相に明瞭な共通性・規格性は認められないが、近接するピットの埋土においては類似性が認められる。

出土遺物　なし。

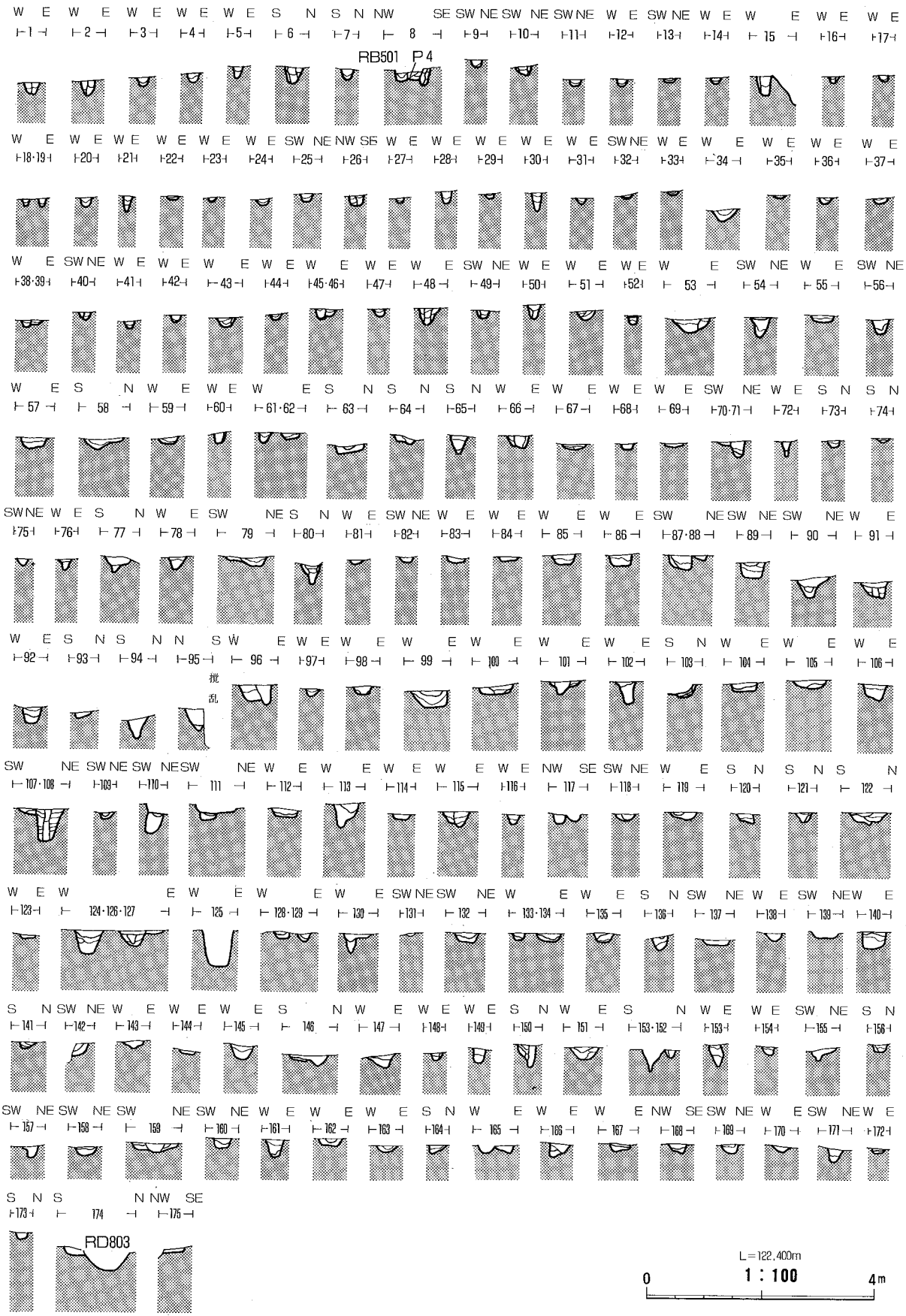
表土・撹乱の遺物（第33図）

縄文土器・石器　１～３は深鉢で、１・２は口唇部～体部上半の土器片である。口縁～頸部にかけては垂直で、頸部～体部までは大きく膨らむ器形である。また、口唇部に連続する指頭押圧を施す。石器は４が石鏃、５は石匙で、先端部が欠損している。６は削器である。７は磨製石斧で欠損している。

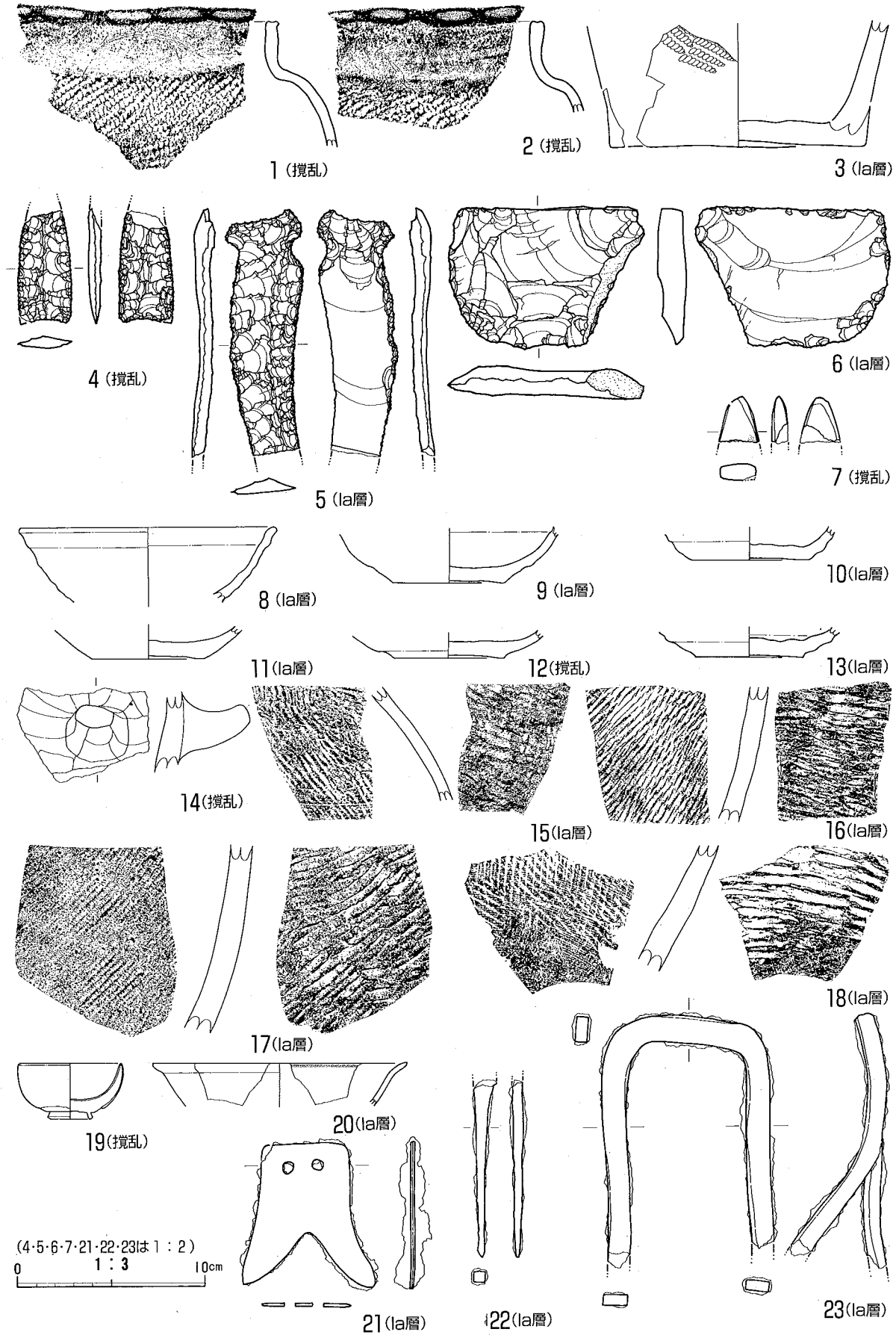
須恵器　８・10・12は須恵器坏であり、８は底部が欠損、10・12は口縁部を欠損しており、底部の切離しは回転糸切無調整である。９・11・13はあかやき土器坏で口縁部を欠損しており、回転糸切無調整である。13は回転糸切後、底部周縁のみにヘラケズリ調整を施す。14は土師の把手と思われる。15～18は須恵器甕で、内外面に平行文のタタキを施す。

陶磁器　19は猪口で、20は16世紀頃の中国染付皿と思われる。

鉄　　器　21の鉄製品は茎部に貫通孔が２つ開いており、先端は鋭角であるが鏃ではない。22は釘、23はＵ字状の棒状鉄製品である。



第32図　第1・3次調査ピット土層断面



第33図　遺構外、表土出土遺物

2．第2次調査

位　　置　第2次調査区は、第1・3次調査区の北北西約40mの地点で、遺跡東端部の中央に位置する。現況は宅地になっており、やや削平されているが、隣接地はリンゴ果樹園や畑地になっており旧地形を良好にとどめている。個人住宅建替えに伴う今次調査区は、旧家屋の基礎による撹乱が著しく、検出した全ての遺構は、部分的に削平や損壊を受けていた。遺構検出面は表土直下で、黄褐色シルト層で遺構の検出を行った。

検出遺構　縄文時代の遺構は土坑3基を検出したが、陥穴と思われる溝状土坑がRD108・110の2基、ビーカー形土坑がRD109の1基である。遺物はRG801の埋土中から、後期の深鉢形土器の体部片が1点のみ出土しているが、摩滅が著しい。

平安時代の遺構は、竪穴住居跡を1棟を検出している。全体形の大半が調査区外に拡がっており、かまどは未検出である。遺物は竪穴住居跡から須恵器・あかやき土器・土師器が少量出土した。

中世の溝跡2条を確認した。方向・平面・断面形状及び埋土等から1次調査で検出したRG801・802の北側延長部分で同一遺構である。削平されたためRG802は殆ど残存しておらず、さらにRG801は、住宅基礎が及ばないため、遺構西壁の肩部分と一部東壁を確認するに止まり、埋土A層から寛永通宝を出土している。

(1)　縄文時代の遺構と遺物

RD108土坑（第35図）

位　　置　調査区北西。　**平　面　形**　溝状。　**長軸方向**　N56°W。

重複関係　なし。

規　　模　長軸上端3.45m、短軸上端0.86～0.94m、長軸中端3.24m、短軸中端0.32～0.57m、長軸下端3.26m、短軸下端0.09～0.20m。検出面からの深さは、1.16mをはかる。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－表土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でA～C層までの3層。A層は5層に、B・C層は各4層に細分。A_{1}～$_{4}$層－暗褐色シルト粒を少し含む黒色土で、あまりしまりがない。A_{5}層－褐色シルト粒を多量に含むにぶい黄褐色土。B層－暗褐色シルト粒～塊を少し含む褐色土。C層－B層に類似し、塊状に暗褐色シルトを多量に含む。

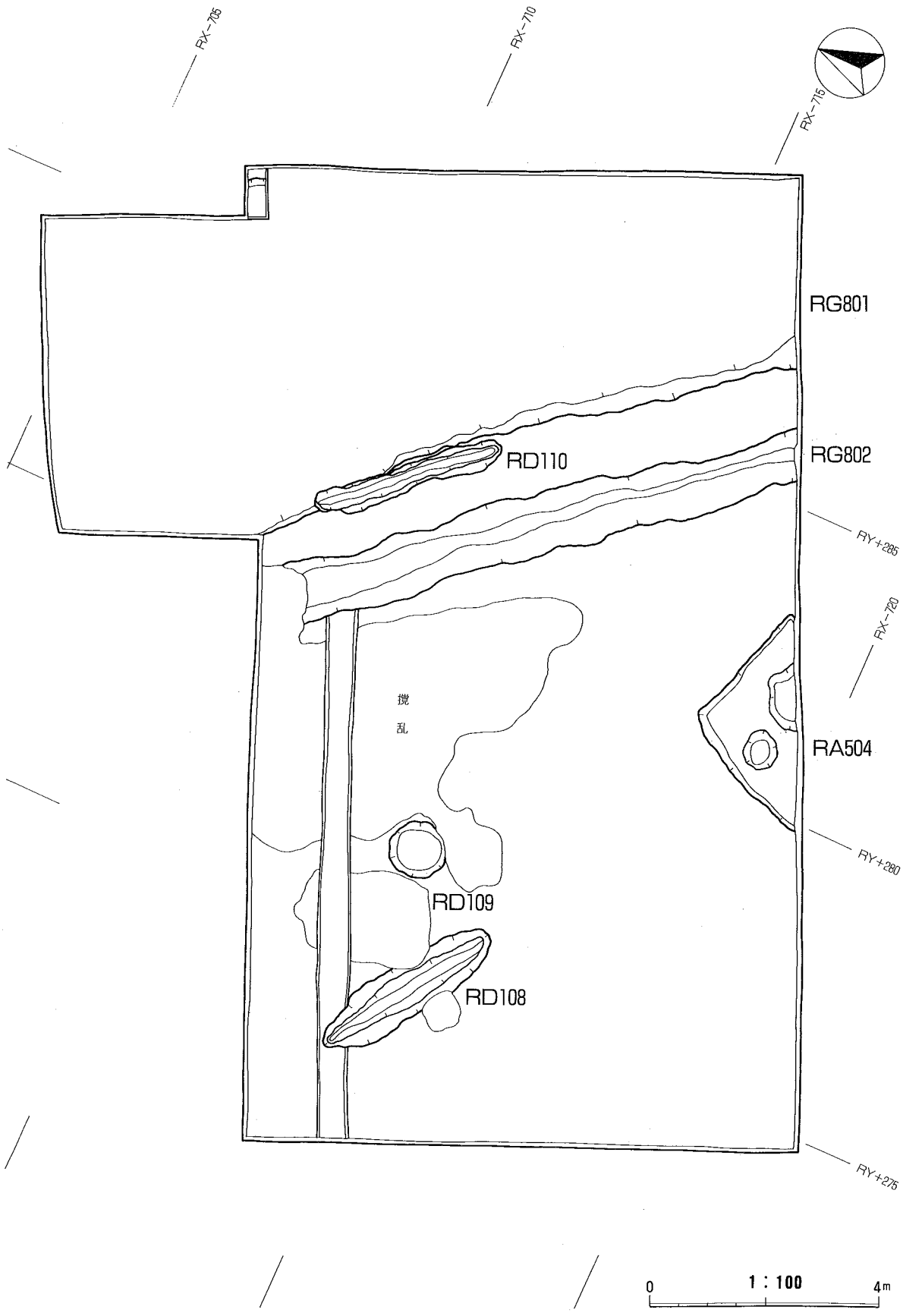
壁の状態　壁高は0.94～1.01mで、上部までは外傾するが、その下はほぼ直壁である。

底の状態　おおむね平坦。

出土遺物　なし。

RD109土坑（第35図）

位　　置　調査区北西、RD108の北東。　**平　面　形**　円形。　**重複関係**　なし。



第34図　第２次調査区全体図

規　　模　上端0.97～1.01m、下端0.67～0.77m。検出面からの深さは、0.84mをはかる。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　　**検　出　面**－表土直下の黄褐色シルト上面。

埋　　土　自然堆積でA～C層。A層は5層に、B・C層は各3層に細分。A層－暗褐色シルト粒～小塊をやや多く含む黒褐色土で、ややしまりがある。B層－褐色シルト塊をやや多く含む暗褐色土。C層－黄褐色～褐色シルトを粒状にやや多く含む褐色土で、しまりがある。

壁の状態　壁高は0.75～0.80mで、上半は外傾するが、下半は直壁である。

底の状態　壁の立上がりが丸くなるが、ほぼ平坦。

出土遺物　なし。

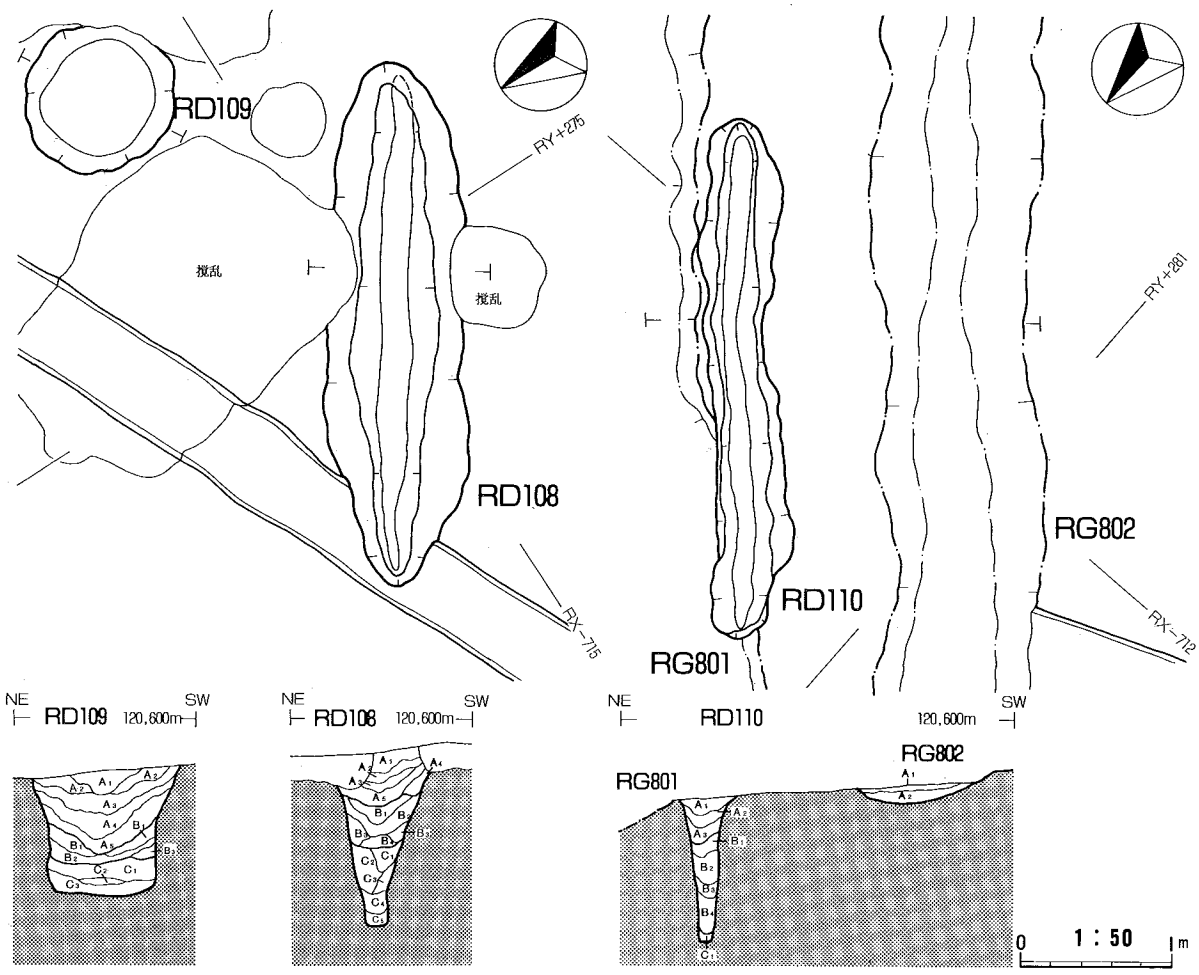
RD110土坑（第35図）

位　　置　調査区中央東寄り。　　**平　面　形**　溝状。　　**長軸方向**　N81°W。

規　　模　長軸上端2.90m、短軸上端0.18～0.28m、長軸下端3.02m、短軸下端0.08～0.12m。

重複関係　RG801に切られる。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　　**検　出　面**－表土直下の黄褐色シルト層上面。



第35図　RD108・109・110土坑

埋　　土　自然堆積でA～C層。A層は3層に、B層は4層に細分。A層－暗褐色～褐色シルトを粒状～塊状に多く含む黒褐色土。B層－暗褐色土塊を多く含む褐色シルト。C層－暗褐色～褐色土をやや多く含む暗褐色シルトで、ややグライ化している。

壁の状態　壁高は0.95ｍで、上端は外傾するが、その下はほぼ直壁である。

底の状態　ほぼ平坦。

出土遺物　なし。

(2)　平安時代の遺構と遺物

ＲＡ504竪穴住居跡（第36図）

位　　置　調査区南端中央。

平 面 形　調査区外に拡がるが、方形を呈すると思われる。　　**主軸方向**　不明。

規　　模　東西－2.44ｍ以上、南北－2.69ｍ以上。

重複関係　なし。

検出状況　**掘 込 面**－削平。　　**検 出 面**－表土直下の黄褐色シルト層上面。

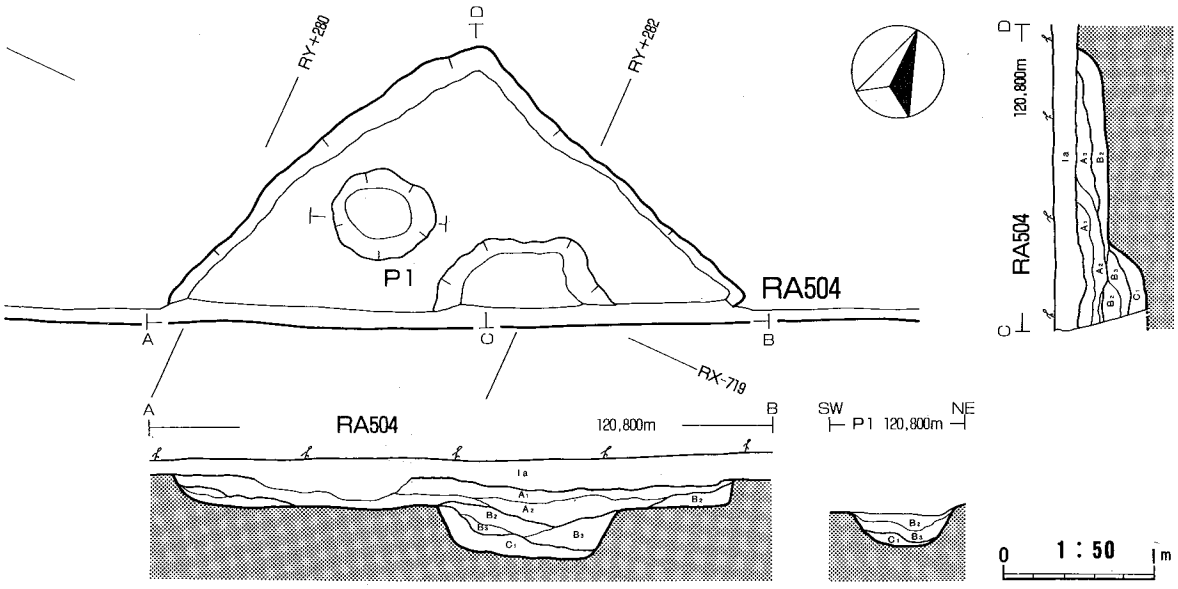
埋　　土　自然堆積で、層相の違いによりA～Cの3層にわかれる。A・B層は各3層に細分。

A層－褐色シルト粒～小塊をやや多く含む暗褐色土。A_3層にはカーボンが少し含まれる。B層－褐色シルト塊～大塊を多量に含む黒褐色土。C層－褐色シルト粒を僅かに含黒褐色土で粘性がある。床構築土は認められないが、やや北東寄りに土坑状の落込みがあり、この最下層がC層となる。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.13～0.21ｍで、直壁ぎみに立ち上がる。

床の状態　ほぼ平坦で、シルト層面を床面にしている。

か ま ど　未検出。



第36図　RA504竪穴住居跡

ピ　ッ　ト　平面形西寄りにP_1を検出。平面形は不整楕円形。直径は0.56～0.70m、床面からの深さは0.21mをはかり、柱痕跡は認められない。柱穴埋土は2層（C・D層）に大別され、住居埋土と同様。

施　設　等　床面中央に土坑を検出した。調査区外に拡がるため、全体形は不明である。規模は上端1.19m以上、下端0.79m以上。深さは検出面から底面まで0.45m、床面からは0.30mをはかる。埋土は住居埋土と連続する自然堆積で、使用時中から廃棄直後にかけて掘り込まれたと考えられる。

出土遺物　埋土中から須恵器長頸瓶と思われる破片が1点、あかやき土器、坏、甕体部と土師器坏の体部破片があるが、いずれも小片である。

(3)　中世以降の遺構と遺物

RG801溝跡（第37図）

位　　置　調査区端に位置する。

検出状況　住宅基礎工事の掘削深までの精査をおこなうとともに調査区外に広がる東壁一部の検出をを行った。なお、土層確認のため、調査区南端に平行してサブトレンチを設定し、検出面から深さ0.30mまでの断面観察をおこなっている。

規　　模　検出した溝の総延長は、13.65mをはかり、上端幅は6.86mである。

断　面　形　未精査。

重複関係　RD110を切る。

掘　込　面　削平。

検　出　面　表土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積で精査したのはA層のみで5層に細分。A層－暗褐～褐色シルト粒を少し含む暗褐色土で、ややしまりがある。$A_{1～3}$層にはカーボンを僅かに含む。1次調査区での土層観察における層相の比較でも、明瞭な差異は認められない。

壁の状態　やや起伏あり。

柱　　穴　未精査のため不明。

出土遺物　平安時代の須恵器、あかやき土器、土師器が出土している。出土層位は検出面～埋土上層で各々の器種は、須恵器は坏・甕・長頸瓶などがある。部位はすべて体部破片で、器面調整は外面にはカキメが施される長頸瓶の他は小片のため不明。あかやき土器は甕のみで、部位は口～体部、器面調整は外面にヘラケズリ、内面にはヨコナデを施す。土師器は坏・甕で、部位は坏が体部下半～底部、甕は外面はヘラケズリ調整、内面にはハケメを施す。

その他金属製品として、鉄銭・銅銭が各1枚ずつ出土しており、いずれも寛永通宝とみられる。出土層位は検出面及び撹乱であり、腐食が著しいため詳細は不明である。

ＲＧ802溝跡（第37図）

位　　置　調査区東側、北西－南東を軸にＲＧ801の西側に位置し、801と並走する。

平 面 形　ほぼ直線。上端は両側とも凹凸あり。下端は北側に向かって徐々に広くなる。

規　　模　検出した溝の総延長は9.29ｍで、上端0.86～1.09ｍ、下端0.13～0.60ｍ。検出面から底面までの深さは0.13ｍをはかる。底面は南側で少し深くなる。

断 面 形　浅い皿状を呈する。

重複関係　なし。

検出状況　掘込面－削平。

検 出 面　表土直下の黄褐色シルト層上面。

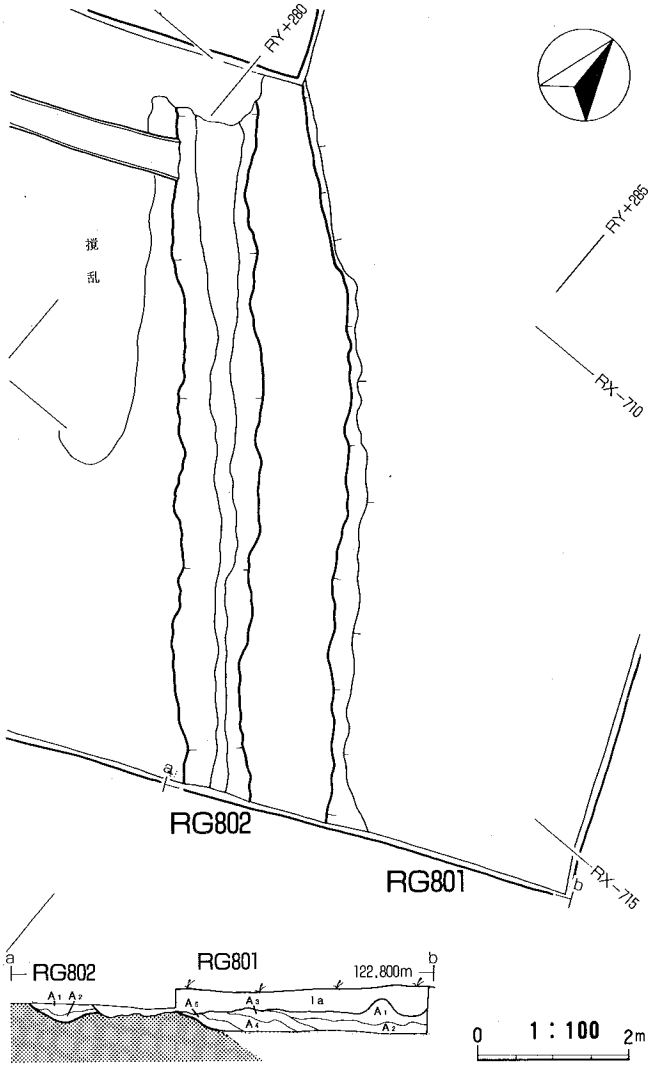
埋　　土　自然堆積でＡ層。２層に細分。

Ａ$_1$層－褐色シルトを粒状に少し含む暗褐色土で、しまりがない。

Ａ$_2$層－暗褐色シルトを粒状に僅かに含む黒褐色土でしまりがない。

壁の状態　やや凹凸あり。南側では急な立上がりで、北側ではゆるやか。

出土遺物　なし。



第37図　RG801・802溝跡

3．第４次調査

位　　置　第４次調査区は、１次調査区南東側に隣接する。調査地の地目は宅地となっいるが、旧状は畑地となっており、東側に旧国道（現県道）が南北に通る。遺構検出面は、南西側に傾斜している。

検出状況　調査が終了した１次調査区側は既に造成済みのため、４次調査区とは、最大幅1.40ｍ程度の未精査域を生じている。なお、調査区北西に検出された竪穴住居跡は、１次調査検出のＲＡ501と同一遺構であるため、可能な限り拡幅し精査した。

４次調査は、個人住宅新築に伴う事前調査で、小屋基礎等による撹乱も西側にごく小規模に認められるのみで、検出したほとんどの遺構は、あまり損壊を受けていなかった。検出面は標高およそ120.200～120.600ｍ付近で、表土直下の黄褐色シルト層面で、遺構の検出作業を行った。

検出遺構　縄文時代の遺構は土坑11基を検出・精査した。陥し穴ととされる溝状土坑はＲＤ113～119の７基、ビーカー形土坑がＲＤ111・120・121の３基、不整形の土坑がＲＤ112の１基である。

土器はほとんどが縄文時代後期の深鉢破片で、土坑からの出土はなくＲＡ501の埋土や表土あるいは撹乱層などから、平安時代の土器と混在して出土している。

平安時代の遺構は竪穴住居跡２棟を検出した。調査区北西側で検出したＲＡ501は、１次調査区で北半部を精査している。出土遺物は多量で、接合資料も多いため、ＲＡ501の報告は一括して第42～46図に掲載した。

調査区南東部にかかるＲＡ506は、中世以降の溝跡ＲＧ805に切られ、北壁の一部を検出したに止まったため、詳細は不明である。

調査区北西隅の漸移層上層に堆積する暗褐色シルト層に、希薄ながら平安時代の遺物包含層の形成が認められた。この層からは須恵器の長頸瓶・大甕、あかやき土器の坏・高台付坏・甕土師器坏・甕出土している。

中世以降の遺構はＲＧ801・802・805の溝跡３条と、ＲＧ801の壁部及び平坦面で検出したピット群を検出している。ＲＧ805は東端部でＲＡ506を切るが、その延長は調査区外にのびており、また西端部はＲＧ801と重複するか新旧関係は不明。ＲＧ805の傾斜は緩やかながらもＲＧ801から傾斜している。ＲＧ805のＣ層には水成堆積による細砂質のグライ化土が観察される。

ＲＧ801は、１～３次調査の精査状況とほぼ同様である。遺構北端で埋土中位まで精査し、１次調査区での堆積のあり方と対比した。また、南端部では一部底面まで検出し、精査した。検出した総延長のうち中央部の約12ｍは、基礎工事の掘削が及ぶ、深さ0.70～0.80ｍ付近までを精査対象とした。ＲＧ801の壁部を中心に検出されるピットは、１次調査より数が多く、分布は西側壁部に寄る傾向がある。

ＲＧ802も、これまでの状況とほぼ同様で、ＲＧ801の西側に緩やかに蛇行しながら並走している。

調査区内の表土などから遺物は、15～17世紀にかけての国産（唐津鉄絵皿等）及び中国製陶磁器（青磁皿）が出土している。

(1) 縄文時代の遺構と遺物

RD111土坑（第39図）

位　　置　調査区西端中央。　　**平　面　形**　楕円形を呈し、底面にピットを伴う。

規　　模　上端0.99～1.33m、下端0.58～0.64m。小ピットは径0.15～0.23m、底面からの深さ0.09mをはかる。

重複関係　RD111と112の新旧関係は不明。

検出状況　**掘　込　面**－重複により不明。　　**検　出　面**－表土直下の黄褐色シルト層上面およびRD112底面。

埋　　土　自然堆積でB～D層の4層。D層以外は各2層に細分。B層－褐色シルト粒～塊を多量に含む暗褐色土。また、小礫を少し含み、あまりしまりがない。C層－暗褐色シルト粒と小礫を少し含む黒褐色土。D層－C層に類似。

壁の状態　壁高は1.18mで、上部は緩やかに外傾するが、その下はほぼ直壁である。

底の状態　平坦であるがピットをもつ。　　**出土遺物**　なし。

RD112土坑（第39図）

位　　置　調査区西側。　　**平　面　形**　楕円形。　　**長軸方向**　N68°W。

規　　模　上端1.58～1.91m、下端1.15～1.51m。

重複関係　RD111を切る。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　　**検　出　面**－表土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でA層は2層に細分。A層－暗褐～褐色シルトの粒～塊状を多量に含む黒褐色土。

壁の状態　壁高は0.28mで、ゆるやかに立ち上がる。

底の状態　東側は平坦だが、中央部は深くくぼみ、RD111埋土の沈下によるものと考えられる。

出土遺物　なし。

RD113土坑（第39図）

位　　置　調査区北西部。　　**平　面　形**　溝状。　　**長軸方向**　N62°E。

規　　模　短軸上端0.94～1.10m、長軸中端3.27m、短軸中端0.38～0.40m、長軸下端3.34m、短軸下端0.21～0.28m。

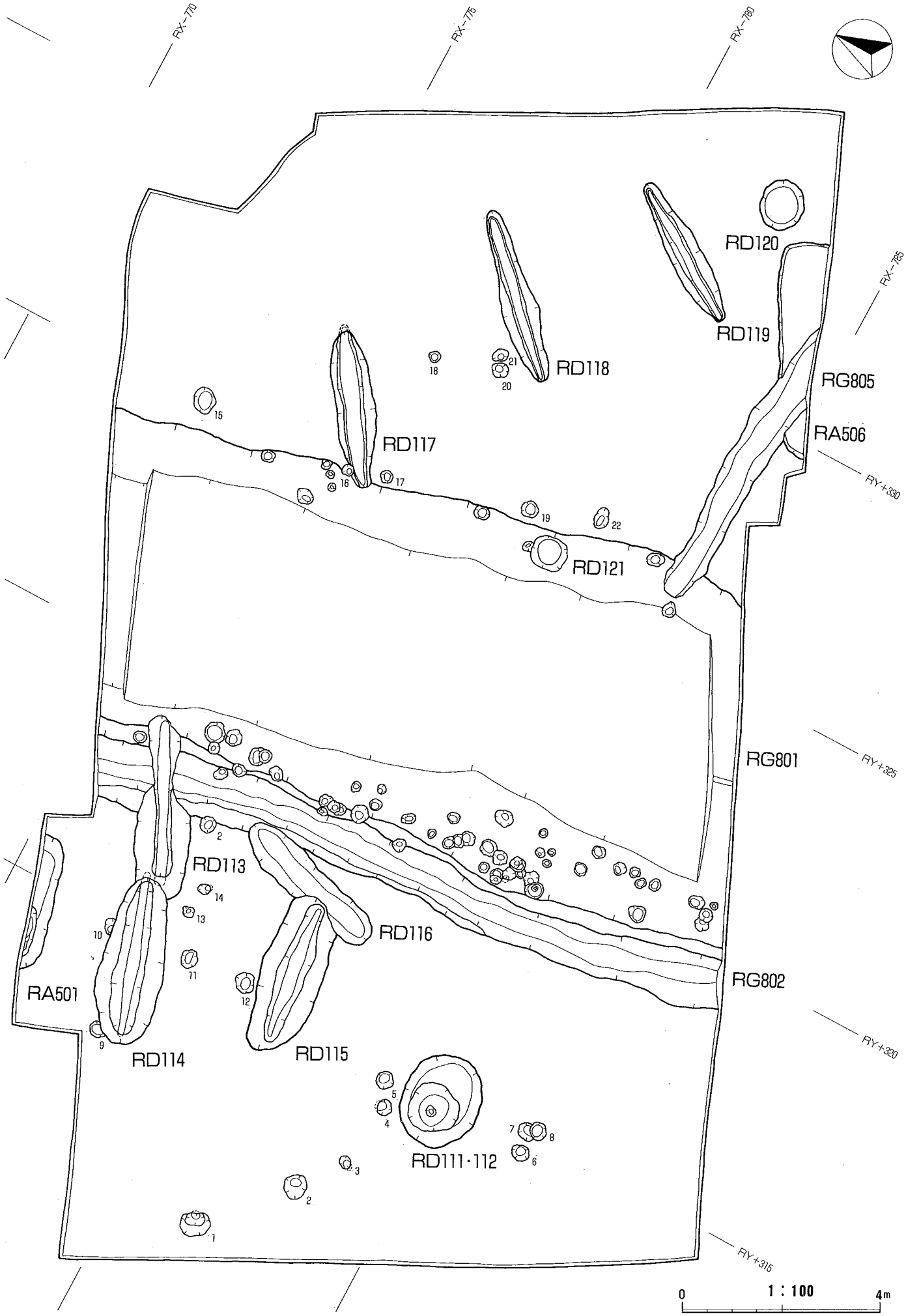
重複関係　RD114を西側で切り、RG801・802に切られる。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　　**検　出　面**－表土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でA～C層。A層は5層、C層は7層に細分。A層－褐色シルトの粒～小塊を多量に含む黒褐色～暗褐色土。B層－暗褐色土に明褐色シルトを塊状に多く含む壁崩壊土である。C層－黒褐色～暗褐色土の粒を多く含む褐色シルトで、小礫が混入する。

壁の状態　壁高は1.03mで、上部は緩やかに外傾するが、その下は直壁である。

底の状態　平坦。　　**出土遺物**　なし。



第38図　第４次調査区全体図

RD114土坑（第39図）

位　　置　調査区北西部。ＲＤ113と重複。　**平　面　形**　溝状。　**長軸方向**　N65°E。

規　　模　長軸上端3.36ｍ、短軸上端1.01～1.35ｍ、長軸中端3.12ｍ、短軸中端0.52～0.62ｍ、長軸下端3.33ｍ、短軸下端0.17～0.26ｍ。

重複関係　ＲＤ113とＰ9・10に切られる。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－表土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ～Ｃ層。Ａ層は６層、Ｂ層は３層、Ｃ層は４層に細分。Ａ層－黒褐色～暗褐色土の粒～塊をやや多く含む褐色シルトで、あまりしまりがない。Ｂ層－明黄褐色シルトを多く含む褐色土。また、焼土粒も僅かに混入する。Ｃ層－褐色シルト粒～塊を多く含む黒褐色土で、しまりがない。

壁の状態　壁高は1.09～1.11ｍで、上部は緩やかに外傾するが、その下はほぼ直壁である。

底の状態　ほぼ平坦。　**出土遺物**　なし。

RD115土坑（第39図）

位　　置　調査区西半中央。　**平　面　形**　溝状。　**長軸方向**　N83°E。

規　　模　長軸上端3.28ｍ、短軸上端1.12～1.30ｍ、長軸中端2.97ｍ、短軸中端0.35～0.61ｍ、長軸下端2.77ｍ、短軸下端0.15～0.29ｍ。

重複関係　ＲＤ116を切る。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－表土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ～Ｃ層。Ｂ・Ｃ層は４層に細分。Ａ層－褐色シルト粒～塊をやや多く含む暗褐色土。Ｂ層－にぶい黄褐色～褐色シルトを粒～塊状に多く含む黒褐色土。Ｃ層－明黄褐色土を粒～塊状に多く含むにぶい黄褐色～褐色土で、しまりがある。

壁の状態　壁高は1.13ｍで、上部は緩やかに外傾するが、その下はほぼ直壁である。

底の状態　浅くくぼむ。　**出土遺物**　なし。

RD116土坑（第39図）

位　　置　調査区西半中央、ＲＤ115に隣接。　**平　面　形**　溝状。　**長軸方向**　N16°E。

規　　模　長軸上端3.26ｍ、短軸上端0.69～0.82ｍ、長軸下端2.99ｍ、短軸下端0.28～0.40ｍ。

重複関係　ＲＤ115に切られる。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－表土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ層。４層に細分される。Ａ層－褐色シルト粒～塊をやや多く含む黒褐色～暗褐色土。

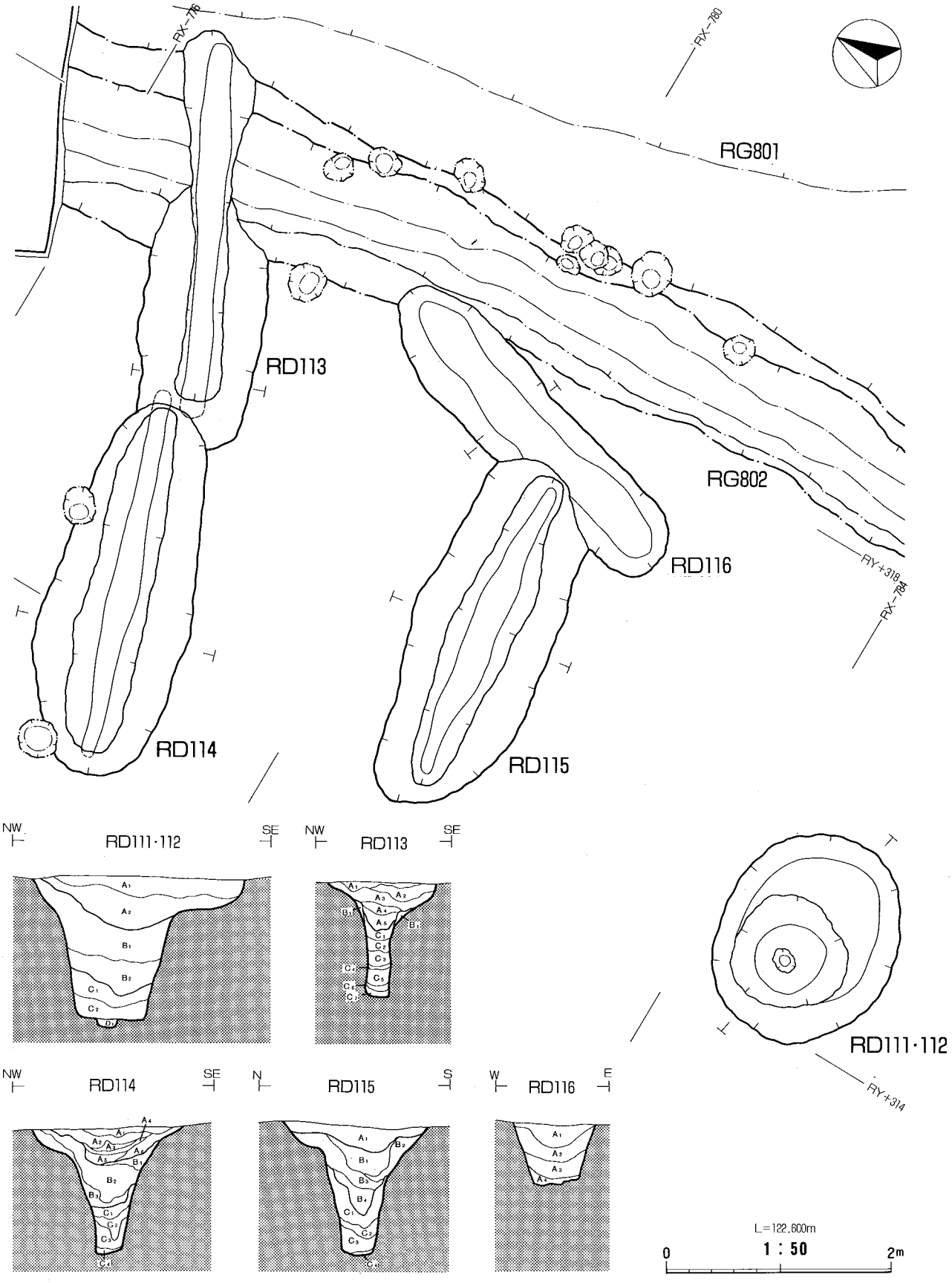
壁の状態　壁高は0.48～0.54ｍで、ほぼ直壁である。

底の状態　起伏が著しい。　**出土遺物**　なし。

RD117土坑（第40図）

位　　置　調査区東半中央。　**平　面　形**　溝状。　**長軸方向**　N81°E。

規　　模　長軸上端3.21ｍ、短軸上端0.28～0.79ｍ、長軸中端3.34ｍ、短軸中端0.16～0.50ｍ、長軸下端3.22ｍ、短軸下端0.11～0.37ｍ。



第39図　RD111・111・112・113・114・115・116土坑

重複関係　ＲＧ801・Ｐ16に切られる。

検出状況　**掘込面**－削平。　　**検出面**－表土直下の黄褐色シルト層上面。

埋土　自然堆積でＡ～Ｄ層。Ａ層は２層、Ｂ層は３層、Ｃ層は７層に細分。Ａ層－暗褐色シルト粒を多く含む黒褐色土。Ｂ層－にぶい黄褐色シルトを粒状にやや多く含む褐色土。Ｃ層－明黄褐色シルトを粒～塊状に多く含む暗褐色～褐色土。Ｄ層－暗褐色土の小塊を多く含む黒褐色土で、しまりがあまりない。

壁の状態　壁高は1.04ｍである。北西側はほぼ直壁で、東側は上半が緩やかに外傾し、その下は直壁である。

底の状態　平坦。　　**出土遺物**　なし。

RD118土坑（第40図）

位置　調査区東半東寄り。　　**平面形**　溝状。　　**長軸方向**　Ｎ79°Ｅ。

規模　長軸上端3.61ｍ、短軸上端0.24～0.77ｍ、長軸中端3.48ｍ、短軸中端0.13～0.33ｍ、長軸下端3.42ｍ、短軸下端0.08～0.20ｍ。

重複関係　なし。

検出状況　**掘込面**－削平。　　**検出面**－表土直下の黄褐色シルト層上面。

埋土　自然堆積でＡ～Ｅ層。Ｂ層は４層、Ｃ～Ｅ層は各２層に細分。Ａ層－黒褐色土を多く含む黒色土で、黄褐色シルトを僅かに混入する。Ｂ層－明黄褐色～にぶい黄褐色シルトの塊をやや多く含む褐色シルト。Ｃ層－黒褐色～暗褐色土の粒～塊を多く含む明黄褐色シルト。Ｄ層－暗褐色シルトをやや多く含む黒褐色土で、ややしまりがある。Ｅ層－僅かに暗褐色シルトを含む黒褐色土。

壁の状態　壁高は1.02ｍで、ほぼ直壁である。

底の状態　ほぼ平坦。　　**出土遺物**　なし。

RD119土坑（第40図）

位置　調査区南東隅。　　**平面形**　溝状。　　**長軸方向**　Ｎ58°Ｅ。

規模　長軸上端3.15ｍ、短軸上端0.24～0.67ｍ、長軸中端3.04ｍ、短軸中端 0.13～0.33ｍ、長軸下端2.99ｍ、短軸下端0.07～0.19ｍ。

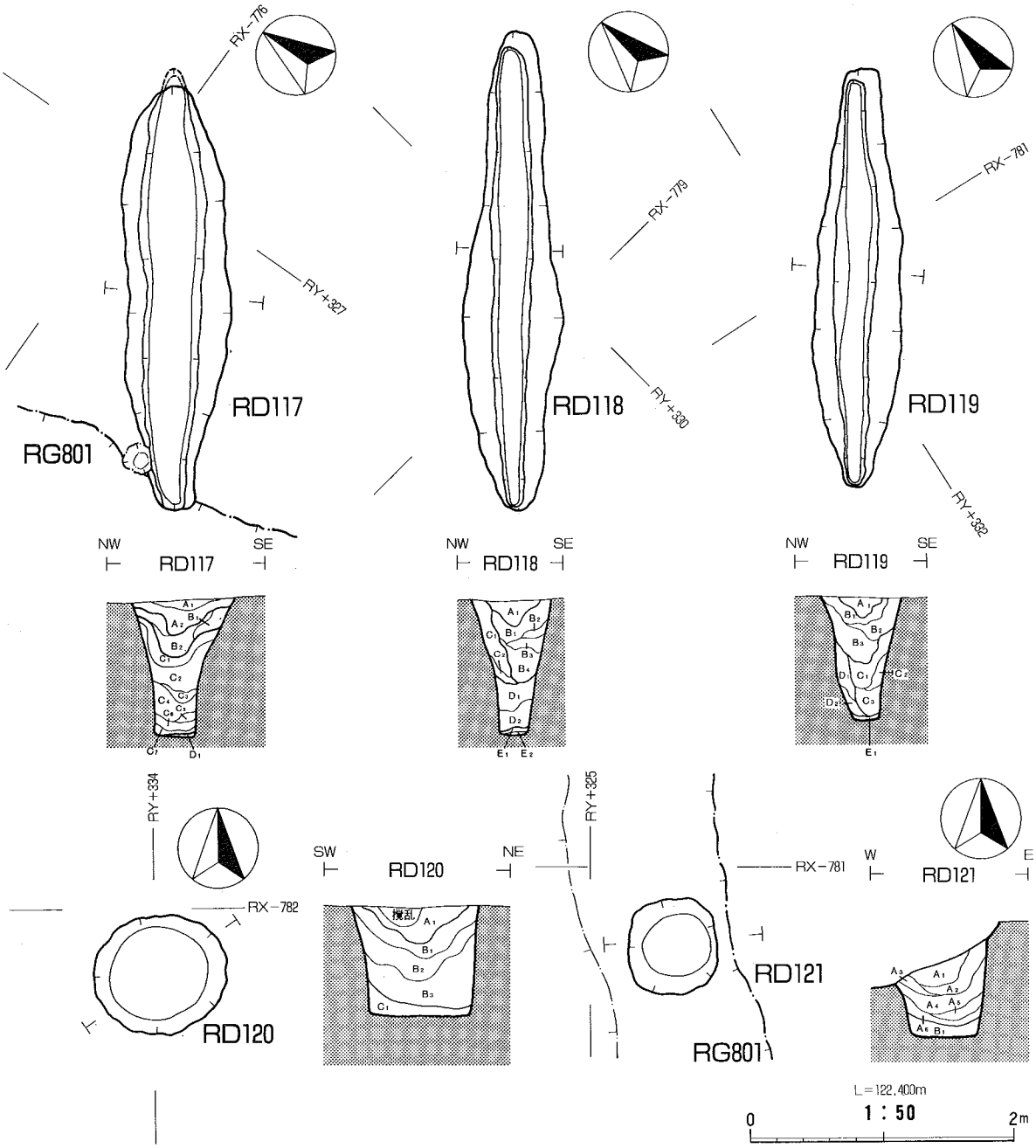
重複関係　なし。

検出状況　**掘込面**－削平。　　**検出面**－表土直下の黄褐色シルト層上面。

埋土　自然堆積でＡ～Ｅ層。Ｂ・Ｃ層は３層、Ｄ層は２層に細分。Ａ層－にぶい黄褐色シルトの小塊をやや多く含む黒褐色土。Ｂ層－黒褐色土を多く含む褐色シルトで、しまりはあまりない。Ｃ層－褐色粘土を塊状に少し含む明黄褐色シルト。Ｄ層－黒褐色土を僅かに含む明黄褐色シルトで、ややしまりがある。Ｅ層－粘性のある暗褐色シルトを僅かに含む黒褐色土。

壁の状態　壁高は0.92ｍ。北西側は下半で、えぐられるように崩壊している。南東側はほぼ直壁。

底の状態　ほぼ平坦。　　**出土遺物**　なし。



第40図　RD117・118・119・120・121土坑

RD120土坑（第40図）

位　　置　調査区南東隅。　　**平 面 形**　円形。

規　　模　上端0.87～1.03m、下端0.71m～0.76m。　　**重複関係**　なし。

検出状況　**掘 込 面**－削平。　　**検 出 面**－表土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でA～C層。B層は3層に細分。A層－暗褐色シルトを粒～塊状に少し含む黒褐色土。B層－黒褐色土を粒～小塊状にやや多く含む褐色シルトで、ややしまりがある。C層－A層に類似する。

壁の状態　壁高は0.82mで、ほぼ直壁である。　　**底の状態**　平坦。　　**出土遺物**　なし。

RD121土坑（第40図）

位　　置　調査区中央南東寄り。　　**平　面　形**　不整円形。

規　　模　上端0.67～0.76ｍ、下端0.46～0.52ｍ。

重複関係　ＲＧ801に切られる。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　　**検　出　面**－ＲＧ801東壁。

埋　　土　自然堆積でＡ・Ｂ層。Ａ層は６層に細分。ＲＧ801埋土とは明確に差異がある。Ａ層－にぶい黄褐色・褐色シルトを粒～小塊状にやや多く含む明褐色シルト。Ｂ層－暗褐色シルトをやや多く含む黒褐色土で、ややしまりがある。

壁の状態　壁高は0.72ｍで、ほぼ直壁である。　　**底の状態**　平坦。　　**出土遺物**　なし。

(2)　平安時代の遺構と遺物

RA501竪穴住居跡（第41～46図）

位　　置　第１次調査区南端東寄り及び４次調査区北端。　　**平　面　形**　不整方形。

主軸方向　Ｎ86°Ｅ。　　**規　　模**　東西－2.86～3.34ｍ、南北－3.09～3.14ｍをはかる。

重複関係　煙出しをＲＧ802に切られる。北西隅で$Ｐ_{165}$を、北東隅でＲＤ105・106を切る。

検出状況　**掘　込　面**－削平により不明。　　**検　出　面**－両調査区とも耕作土直下のシルト層上面であるが、耕作土の厚さにより４次調査区検出面は１次調査区に比べて、0.05～0.10ｍ深い。

埋　　土　埋土は自然堆積で、層相の違いによりＡ～Ｃの３層にわかれる。Ａ層－全般に褐色シルト粒が僅かに混入する黒褐色土で、赤褐色の焼土粒とカーボン粒を僅かに含み、しまりのよい土質である。Ｂ層－黒褐色土で褐色シルト粒と赤褐色の焼土粒が少し混入し、多量のカーボン粒を含み、Ａ層より僅かにやわらかい。Ｃ層－暗褐色土を僅かに含む褐色シルトで、しまりのよい土質である。床構築土（Ｆ層）は褐色シルトと黒褐色土との混合土である。

壁の状態　検出面から床面までの深さは0.47～0.68ｍで、南壁は検出面まで緩やかに立上がるが、東・西・北の壁は検出面から壁中位までは外傾するが、その下半はほぼ直壁となっている。

底の状態　床面は平坦、床面下ほぼ全面に構築土（Ｆ層）を確認。構築面は凹凸が著しく、構築土の厚さは、0.05～0.19ｍ。床面中央部に不整形を呈する、堅くしまる範囲が認められる。

か　ま　ど　東壁ほぼ中央に構築されており、火床面は壁の内側に位置している。煙道はくりぬきによるもので、平面形は溝状を呈する。煙道底面は壁際から徐々に深くなり、煙出し底面が最も深くなっており、火床面と煙出しの底面との比高差は0.48ｍをはかる。規模は東壁から煙出し先端までの長さ1.21ｍ、幅0.21～0.25ｍをはかり、検出面から火床面までの深さは0.54ｍ。かまど袖は両側共に残存するが、下部には構築土（Ｆ層）は認めらず、ややしまりのある黄褐色シルトと黒褐色土の混合土（Ｋ１層）に補強材として0.09～0.28ｍの自然礫及び土師器甕の底部を利用して構築する。規模は北側袖が長さ0.88ｍ、幅0.14～0.17ｍ、床面からの高さ0.13ｍをはかり、南側袖は長さ0.89ｍ、幅0.20～0.23ｍ、床面からの高さは0.09ｍをはかる。火床面はこの袖に囲まれた壁内にあり、0.26～0.33ｍの不整楕円形を呈する範囲で検出している。よく焼けており、浸透層は0.04ｍである。かまど崩壊土（Ｊ層）は、褐色シルトに多量の焼土粒及び炭化物粒を含む。煙出しの一部は調査区外に拡がっておるため、全体形は不明。長軸上端

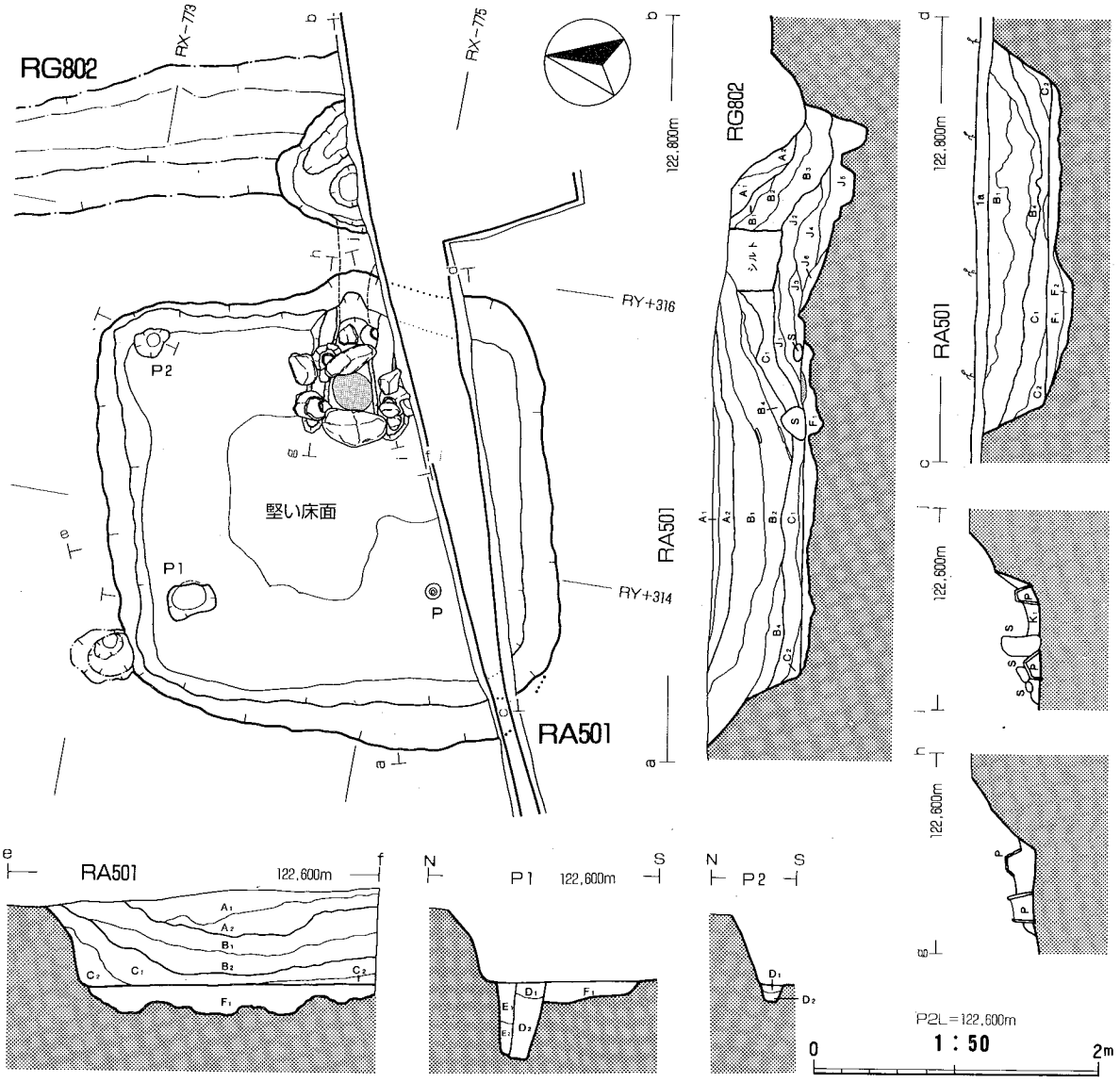
0.94m、検出面からの深さ0.76mをはかる。埋土は共通するが、平面形から煙出しの造り替えが想定される。

柱　　穴　北側の床面上で2口（P_1・$_2$）を検出。P_1は床面北西に位置し、平面形は不整楕円形。径0.21～0.36m、床面からの深さは0.54m。柱痕跡の直径は0.20mで、埋土（D層）はやわらかい暗褐色シルト、掘方埋土（E層）はD層類似するがしまりのよい土質である。P_2は、床面北東隅に位置する。平面形は不整楕円形で径0.14～0.26m、深さ0.13mをはかる。

出土遺物　1～13は、須恵器坏である。1の体部下端には墨書文字が認められ、「上」カ。

また、底部回転糸切後に体部下端から底部周縁にかけて手持ちのヘラケズリ調整を施す。2は底部回転糸切後に体部下端のみに手持ちのヘラケズリ調整を施す。3～10・12・13は回転糸切無調整である。3・6～10は火襷が3のみ内面に、他は外面に見られる。

14～20はあかやき土器坏で、14は底部回転糸切後に体部下端のみに手持ちのヘラケズリ調整



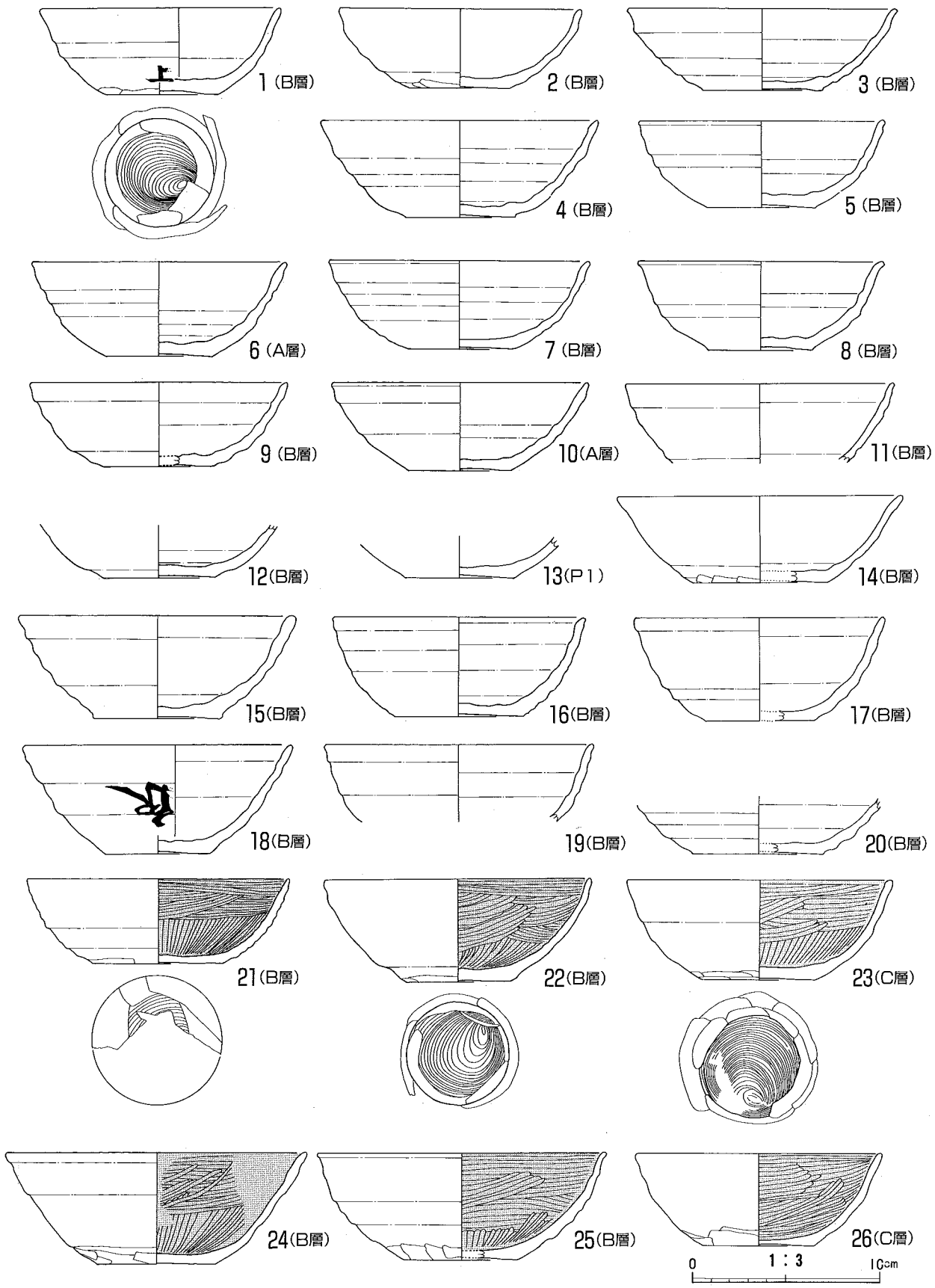
第41図　RA501竪穴住居跡

を施す。15～18・20は回転糸切無調整である。16は土器の歪みが非常に大きいものである。18の体部外面には逆さに書かれた墨書文字が認められ、「坏」カ。19・20はいずれも小片からの復元である。21～54は、土師器坏である。21～23は底部回転糸切後に体部下端から底部周縁にかけて手持ちのヘラケズリを施す。23は体部外面に火襷が認められる。24～29・31～36は底部回転糸切後に体部下端のみに手持ちのヘラケズリ調整を施すものである。30は底部静止糸切後に体部下端のみに手持ちのヘラケズリ調整を施す。37・38・40～42・44～49・51・53・54は回転糸切無調整であるが、39は静止糸切無調整である。48の体部外面には墨書が認められ、「仟」カ。49の体部外面に墨痕が認められるが、判読不明である。50・52は底部が欠損している。53は底部破片である。54は坏の体部破片で、墨書文字が認められ「千」または「禾」カ。なお、22・24～26・28～30・32・33・37・40・43・45～48・50には体部外面に重ね焼きによる黒斑が認められる。55は土師器小形椀で、全体にゆがみのある粗雑な造りである。外面は火熱により全体的に剝落しており、体部下端から底部全面にかけて手持ちのヘラケズリ調整を施す。また、内面には巻き上げ痕が残り、体部下半には液体が炭化して付着している。

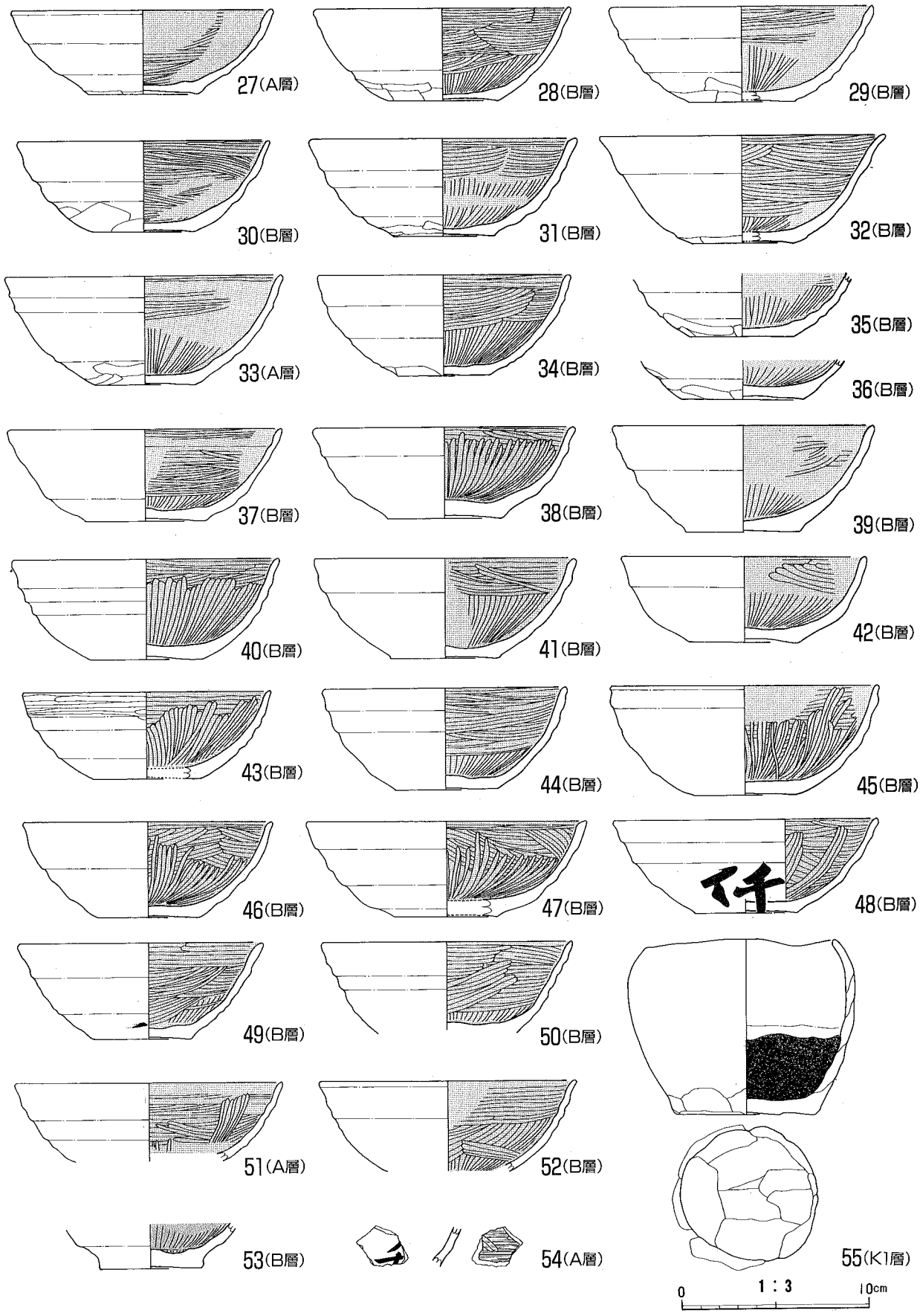
56は口縁～頸部と体部下半を欠損する須恵器長頸瓶である。体部は全体に丸みを帯びた球胴形を呈する。外面の体部上半には手持ちヘラケズリ調整を施し、体部下半はそれを切るように回転ヘラケズリ調整を施している。57はあかやき土器甑で、器高は16.4㎝、口径24.2㎝、最大幅25.5㎝、底径10.1㎝をはかる。最大径を口縁部下に持つため口縁部がやや内弯し、また底部には焼成前に内側から外側に径0.8～0.9㎝の貫通孔が穿たれている。器面調整は外面全体に、カキメ調整を施し、その後に体部下半に手持ちのヘラケズリ調整を施している。内面は体部下半から底面にハケメを施す。58は口縁部が大きく外反する土師器鉢で、体部下半から底部は欠損している。外面の一部に煤が付着し、体部にはヘラケズリ調整、内面は黒色処理後にヘラミガキを施す。59も底部が欠損する土師器鉢で、口縁部がやや強く外反している。外面は頸部下よりヘラケズリ調整が施され、内面は黒色処理後に全面に丁寧なヘラミガキを施す。

61～67はいずれもあかやき土器小形甕である。60は体部下半から底部を欠損しており、外面全体に煤が付着する。61は最大径が体部上半に、体部下半がすぼまる形態を呈し、底部は欠損する。器面調整はいずれも外面は頸部下よりヘラケズリ調整を施す。62～67はいずれも体部上半を欠損している。62・64は底部の切離しが静止糸切で、63・65・66・67は回転糸切無調整である。器面調整は62が外面体部下端に回転ヘラケズリ調整を施し、内面底部付近にはカキメ調整を施す。また、62の内面の一部に煤が付着しており、67の外面全体にも煤が付着する。68・69はあかやき土器長胴甕で、68は最大径が体部上半にもつ。体部下半がややすぼまる形態を呈し、底部は欠損する。器面調整はいずれも外面は頸部下よりヘラケズリ調整を施す。69は口縁部が大きく外反し、体部下半を約１／２を欠損している。外面はヘラケズリ調整が施され、煤が付着している。

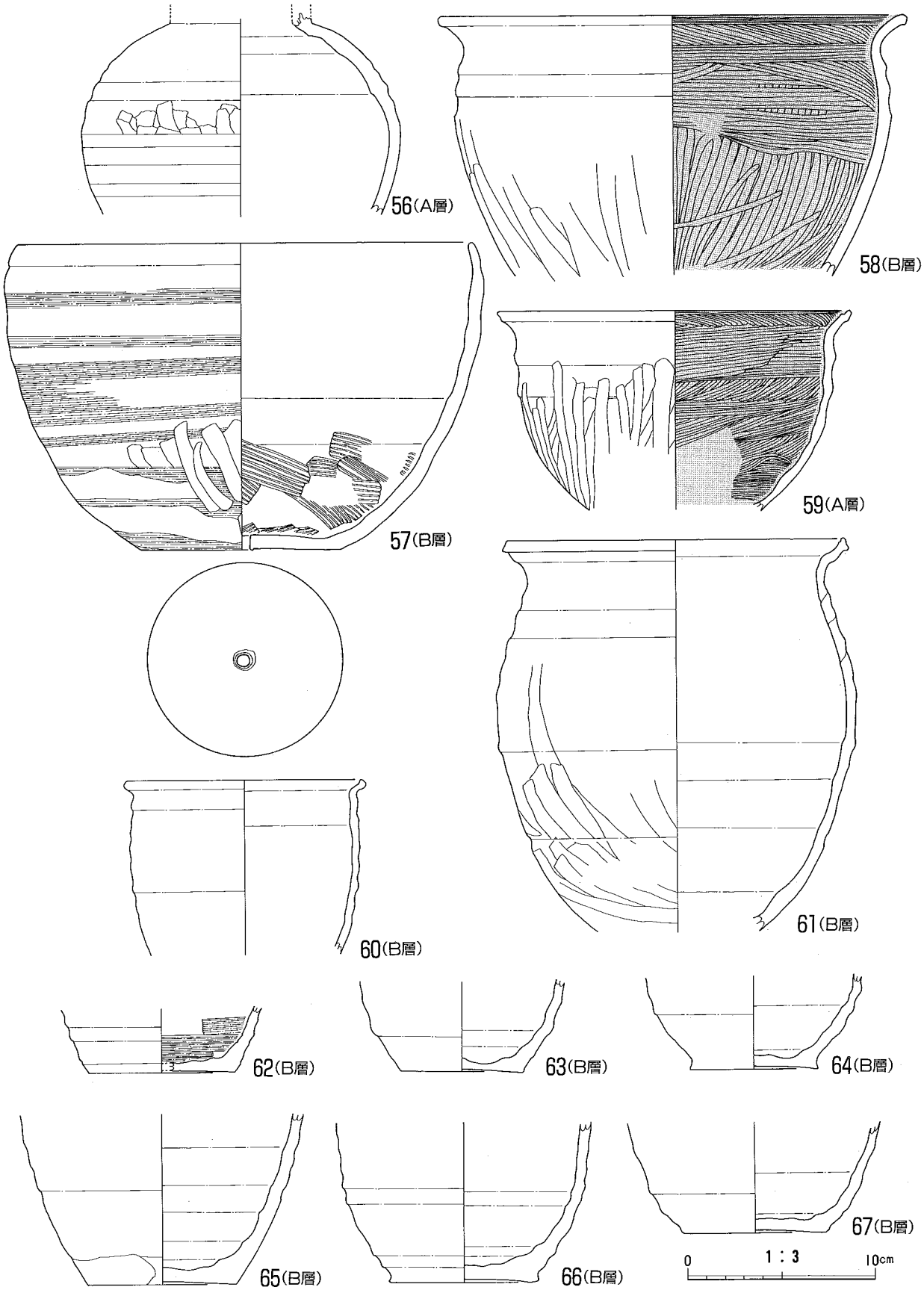
70～72は土師器小形甕である。70は体部下半を約１／２程欠損している。口唇部に工具による凹みが付され、口縁部の内外面にヨコナデを施す。また体部外面は体部にヘラナデ後ヘラミガキを施し、内面にはヘラナデを施す。71は器高は16.1㎝、口径15.2㎝、体部最大径14.0㎝、底径8.0㎝をはかり、外面には巻き上げ痕が観察される。器面調整は口縁部内外面ともヨコナデで、体部内外面はヘラナデを施すが、外面は不明瞭である。72は底部が欠損しており、口



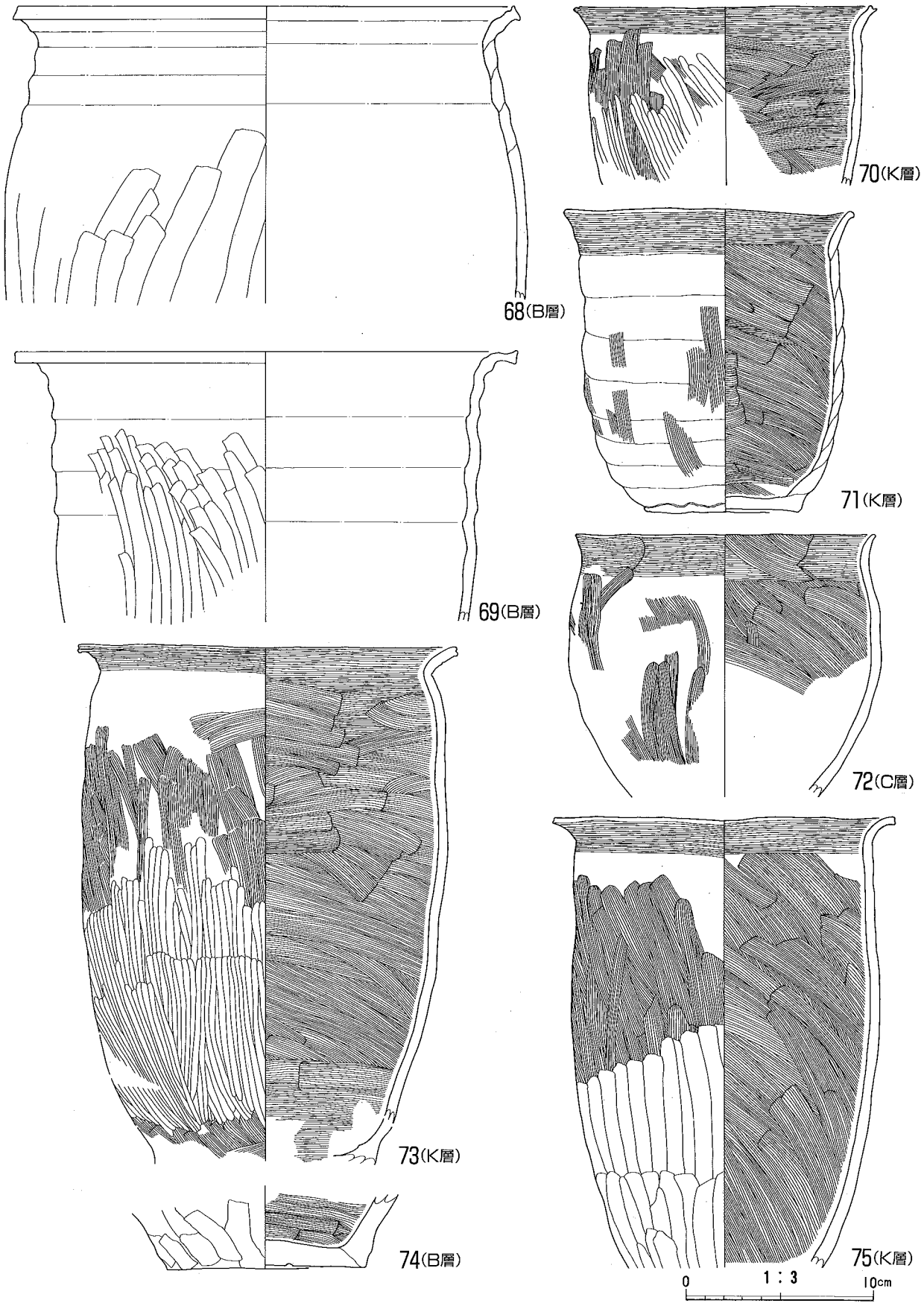
第42図　RA501竪穴住居跡出土遺物(1)



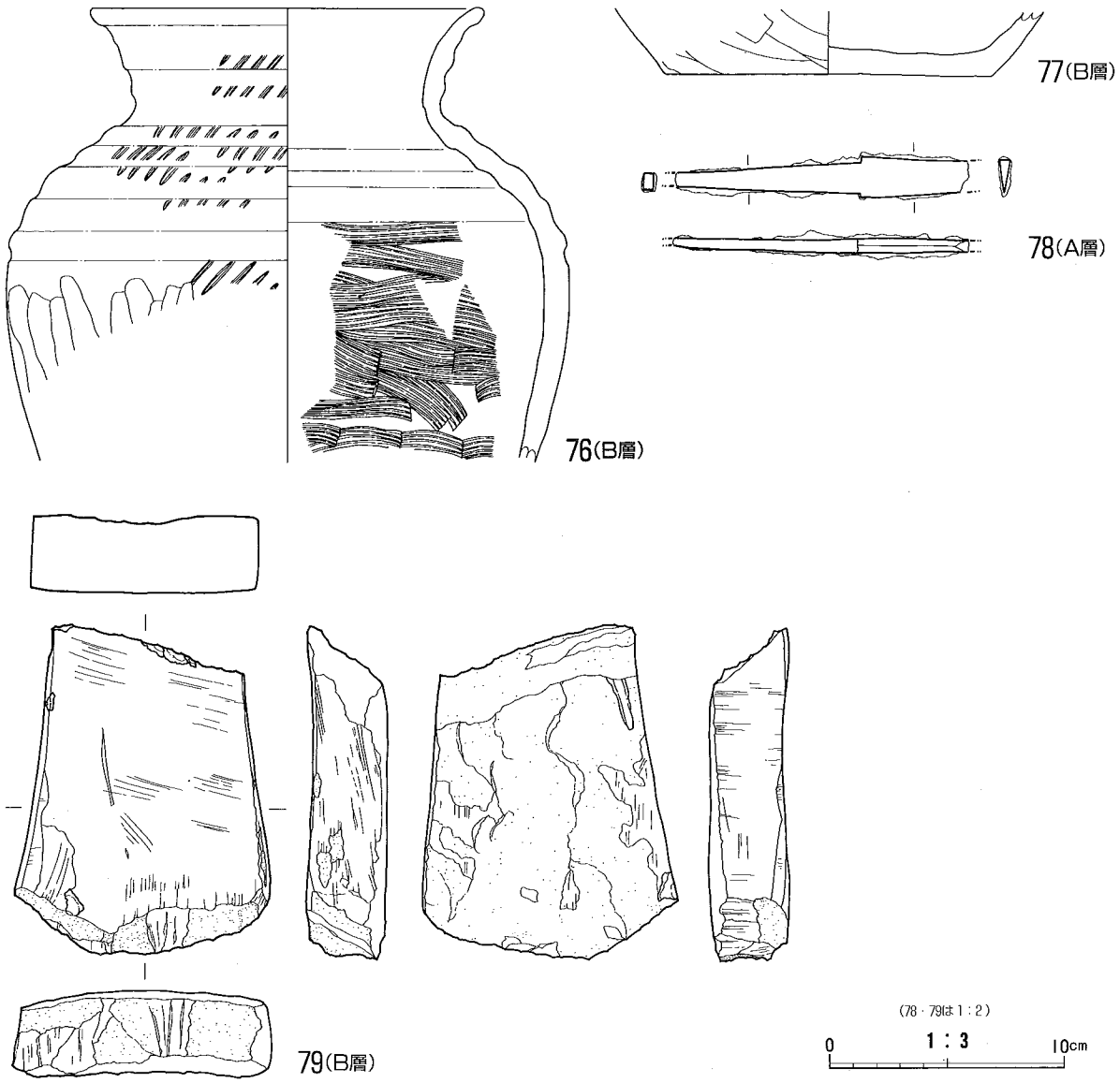
第43図　RA501竪穴住居跡出土遺物(2)



第44図　RA501竪穴住居跡出土遺物(3)



第45図　RA501竪穴住居跡出土遺物(4)



第46図　RA501竪穴住居跡出土遺物(5)

縁部外面にはタール状の付着物が見られる。器面調整は内外面とも口縁部がヨコナデ、体部はヘラナデを施す。73～75は土師器甕で、73はほぼ完形に近いが底部が欠損しており、残存高は27.8cm、口径20.2cm、体部最大径19.4cmをはかる。器面調整は内外面とも口縁部はヨコナデ、外面は体部上半がヘラナデ、体部下端がハケメ調整の後、体部下半に縦方向のヘラミガキが施される。内面はヘラナデを施す。74は体部下半から底部にかけての破片で、底部は木葉痕が残る。器面調整は外面がヘラケズリ調整、内面はヘラナデを施す。75は底部が欠損しているが、残存高24.7cm、口径18.4cm、体部最大径16.4cmをはかる。器面調整は内外面とも口縁部はヨコナデ、体部外面は全体にヘラナデ後、体部下半にヘラケズリ調整が施され、内面はヘラナデを施す。また、内外面の頸部下に炭化物の付着が見られる。なお、73・75とも口唇部には工具を用いて整形しているのが特徴である。

76は須恵器壷で、体部下半から底部にかけて欠損している。口径17.0cm、最大径24.0cmをは

かり、最大径を体部上半に持つ。器面調整は外面に口縁部から体部上半にかけて平行タタキ、後にロクロナデを施し、体部下半はタタキ痕を消すようにヘラケズリ調整を施す。内面体部にはハケメを施す。77は底部のみ残存している須恵器大甕で、底径は13.8㎝をはかる。器面調整は外面がヘラケズリ調整を施し、内面底部がナデおよび指頭圧痕が見られる。78はＡ１層より出土した両関（りょうまち）造りの刀子で、残存する長さは8.4㎝、厚さ0.2～0.4㎝をはかり、刀身の中程より切先にかけて欠損している。また、茎（なかご）には目釘穴はない。79は短冊形を呈する粘板岩製の砥石で、約１／２ほど欠損している。被熱のため、１面は大部分が剝落しているが５面に使用痕が認められる。

RA506竪穴住居跡（第47図）

位　　置　調査区南東隅。

平 面 形　調査区外に大半が広がるが、方形を呈すると思われる。

規　　模　東西－4.36ｍ、南北－0.90ｍ以上。

重複関係　ＲＧ805に切られる。

検出状況　掘　込　面－削平。

検 出 面　表土直下の黄褐色シルト層面。

埋　　土　埋土は自然堆積で層相の違いにより、A′・B′の２層にわかれる。A′は３層、B′層は２層に細分される。A′層－褐色シルトを粒～塊状に少し含む黒褐色土。B′層－黄褐色～褐色シルトを塊状にやや多く含む黒褐色土で、あまりしまりがない。また、B′３層は明黄褐色シルトを主体とし暗褐色シルトを少し含む。

壁の状態　検出面から床面までの深さ0.16～0.26ｍで、ほぼ直壁である。

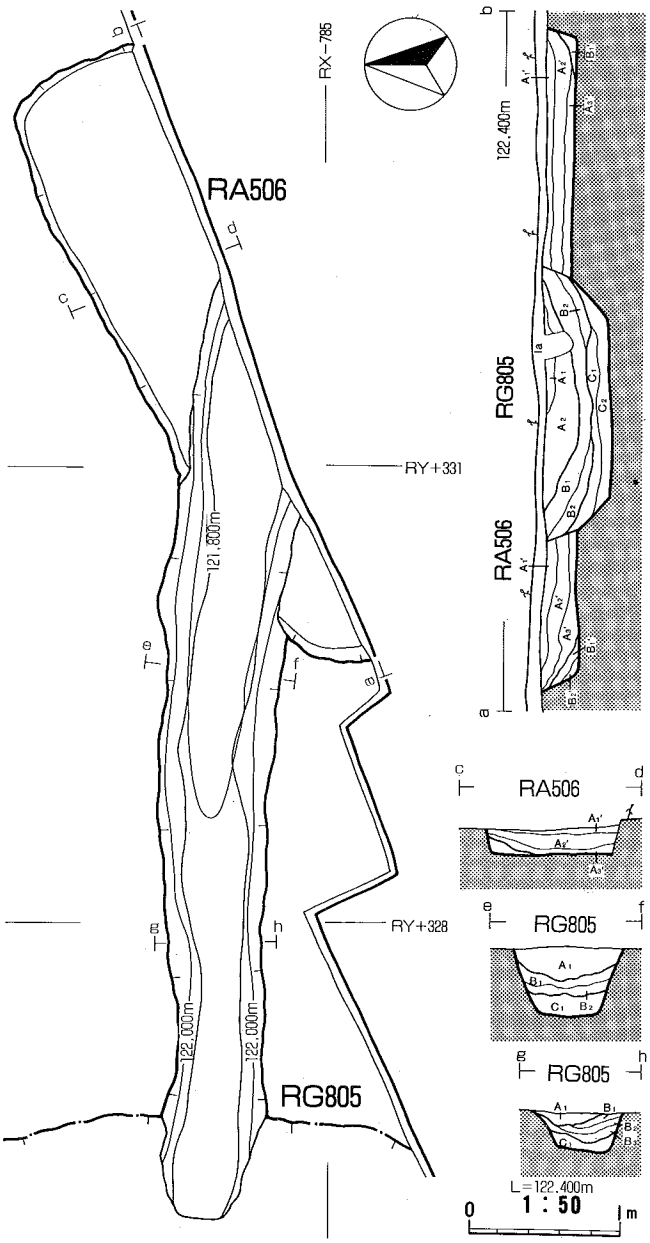
床の状態　ほぼ平坦。シルト層面を床面とし床構築土はない。

か　ま　ど　未検出。

柱　　穴　不明。

施　設　等　不明。

出土遺物　北東側で検出面及び床面直上



第47図　RA506竪穴住居跡・RG805

からあかやき土器・土師器が4点出土している。あかやき土器は小形甕の口縁部破片が1点出土しているが摩滅が著しい。土師器は坏の口縁部破片が2点で内外黒色処理を施しており、内面にヘラミガキ調整が見られる。検出面より出土した土師器甕は体部破片で外面はヘラケズリ調整、内面はヘラナデを施す。

(3) 中世以降の遺構と遺物

RG801溝跡（第48・49図）

位　　置　調査区中央。

平 面 形　北側でやや狭くなるが、ほぼ直線。　**長軸方向**　N14°E。

規　　模　検出した溝の総延長は約13.4mで、幅は上端5.88～7.36m、下端0.09m。深さは、検出面から床面まで1.86mをはかる。

断 面 形　逆二等辺三角形を呈する薬研形を呈し、壁は約140°に立ち上がる。

重複関係　西壁でRD113・116を、東壁でRD117を切る。

検出状況　**掘 込 面**－削平。　**検 出 面**－表土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でA～D層の4層。A層は4層、C層は7層、D層は3層に各細分。1次調査で精査した埋土と比較して相違はない。A層－褐色シルトを粒～塊状に多く含む黒褐色～暗褐色土で、あまりしまりがない。並走するRG802にも共通して覆っている。B層－暗褐色土と褐色シルトの混合土で僅かにカーボンを含み、しまりがない。多量の自然礫を混入し西側に顕著に堆積。C層－焼土粒～塊とカーボンを多く含む暗褐色土で、比較的良くしまる。D層－褐色シルト粒～塊をやや多く含む黒褐色～暗褐色土。底面直上のD3層には焼土粒・カーボンをやや多く含む。水成堆積の痕跡は認められない。

壁の状態　起伏はあまりなく、底面から緩やかに立ち上がる。

柱　　穴　溝西壁面に50口、東壁面に9口を検出。西壁では121.500～121.900mの高さに集中する。平面形はおよそ不整円形～楕円形を呈する。柱痕跡が確認できるものは、P_1・P_7・P_8・P_{13}・P_{15}・P_{17}・P_{22}・P_{23}・P_{28}・P_{33}・P_{35}・P_{37}・P_{40}・P_{41}・P_{45}・P_{47}の16口である。重複が認められるピットの新旧関係は、P_4がP_5を、P_{13}がP_{12}とP_{14}を、P_{33}がP_{31}を、P_{35}がP_{34}を、P_{34}とP_{33}がP_{32}を、P_{49}がP_{48}をそれぞれ切る関係にある。直径及び検出面からの深さは、76ページ参照。

埋土（G・H層）は、G層がRG801下層のD_1層に類似し混入土も多く、あまりしまりがない。H層は掘方の充填埋土と考えられ、黄褐色シルトに暗褐色土の粒～塊を含み、あまりしまりがない。これらは溝跡の一部での検出のため、ピット間の距離や配置等は検討課題である。

出土遺物　1は口縁部を欠損しているが、肥前京焼風灰釉碗と思われる。2は全体形は不明で、17世紀初頭の美濃の織部向付で、登窯Ⅰ期のものと思われる。3・4は煙管で、木質部は腐食して残っていない。また、A層中から須恵器・あかやき土器・土師器などが出土しており、器種も坏・甕・大甕などがある。

（単位：m）

No.	径	深さ	No.	径	深さ	No.	径	深さ	No.	径	深さ	No.	径	深さ
1	0.24	0.16	2	0.24	0.22	3	0.25	0.20	4	0.27	0.19	5	0.42	0.16
6	0.34	0.11	7	0.24	0.22	8	0.36	0.26	9	0.25	0.12	10	0.27	0.12
11	0.18	0.09	12	0.19	0.20	13	0.24	0.24	14	0.24	0.27	15	0.42	0.19
16	0.20	0.21	17	0.26	0.23	18	0.17	0.23	19	0.26	0.14	20	0.17	0.11
21	0.13	0.13	22	0.25	0.18	23	0.30	0.27	24	0.32	0.11	25	0.20	0.14
26	0.20	0.13	27	0.32	0.15	28	0.34	0.27	29	0.29	0.29	30	0.33	0.12
31	0.29	0.42	32	0.17	0.23	33	0.26	0.34	34	0.28	0.36	35	0.30	0.40
36	0.12	0.10	37	0.18	0.21	38	0.13	0.20	39	0.17	0.09	40	0.24	0.20
41	0.25	0.26	42	0.22	0.16	43	0.22	0.13	44	0.18	0.10	45	0.36	0.32
46	0.27	0.10	47	0.26	0.29	48	0.29	0.27	49	0.29	0.28	50	0.14	0.09
51	0.20	0.19	52	0.30	0.31	53	0.16	0.08	54	0.14	0.11	55	0.19	0.10
56	0.29	0.17	57	0.16	0.22	58	0.29	0.15	59	0.28	0.12	60	0.29	0.29

RG802溝跡（第48図）

位　　置　調査区西半中央、ＲＧ801と並走。　**平　面　形**　わずかに蛇行。

規　　模　検出した溝の総延長は約13.7ｍで、幅は上端0.74～1.35ｍ、下端0.09～0.46ｍ。検出面から底面までの深さは、0.58～0.67ｍをはかる。

断　面　形　逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦。　**重複関係**　ＲＤ113・116を切る。

検出状況　**掘　込　面**－削平。　**検　出　面**－表土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でＡ～Ｄ層。層序・埋土はＲＧ801と共通し、ＲＧ801との間に存在する平坦面も同様に認められる。Ｅ１層は、ＲＧ801・802両側の埋土の下に堆積する、にぶい黄褐色シルトの小塊を僅かに含む褐～暗褐色シルトで、さほどしまりがない。その下の平坦面直上に堆積するＦ１層は１次調査時にも検出している。

壁の状態　やや起伏はあるが、西壁は検出面から0.16～0.24ｍまではほぼ直壁で、その下は緩やかにさがる。

出土遺物　Ａ層から出土しており、須恵器の坏・長頸瓶・大甕、あかやき土器の坏・甕、土師器の坏・甕などがある。

RG805溝跡（第47図）

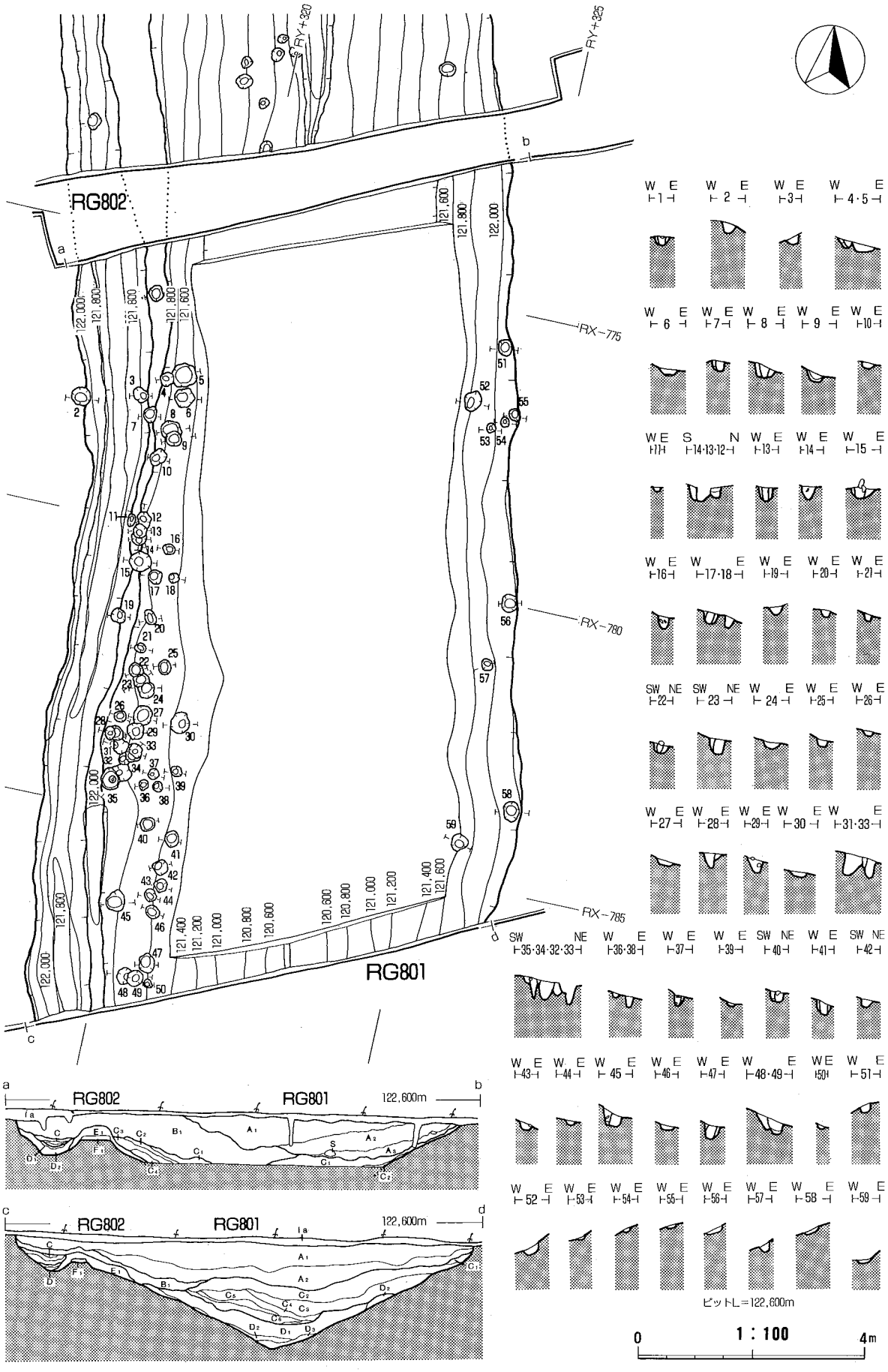
位　　置　調査区南東部、ＲＧ801に直交する。　**長軸方向**　Ｎ88°Ｗ。

平　面　形　ほぼ直線で西側は削平されたため幅が狭く、東側の幅はやや広い。

規　　模　検出した溝の総長は、北側上端6.27ｍ、下端5.88ｍ、南側上端4.64ｍ、下端4.82ｍ。溝の幅は上端0.55～0.81ｍ、下端0.25～0.47ｍ。深さは、検出面から底面まで0.22～0.46ｍをはかる。

断　面　形　逆台形状を呈し、底面は平坦である。

重複関係　東側でＲＡ508を切り、西側はＲＧ801に接続するが新旧関係は不明。ＲＧ801に関連する可能性もある。



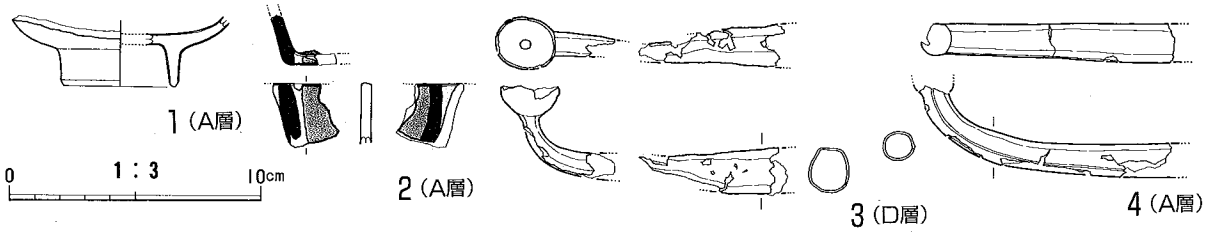
第48図　RG801・802溝跡

検出状況　**掘　込　面**－削平。　　**検　出　面**－表土直下の黄褐色シルト層上面。

埋　　土　自然堆積でA～C層の3層。B層は3層に細分。A層－にぶい黄褐色～暗褐色シルトの粒～塊状を多く含む黒褐色土。B層－にぶい黄褐色～褐色シルトの粒～小塊をやや多く含む黒褐色土。C層－にぶい黄褐色土の塊を多く含む褐色シルトで、ややしまりがある。また、細砂質のグライ化土が観察されることから水成堆積が認められる。

壁の状態　ほぼ直壁ぎみに、立ち上がる。

遺　　物　検出面から須恵器、あかやき土器、土師器が出土している。須恵器は大甕の体部破片が1点で内外面に平行文のタタキによる整形が施される。あかやき土器は甕の体部破片が2点出土しており、外面にヘラケズリを施す。土師器は甕の体部破片が1点で、内外面にヘラナデを施す。



第49図　RG801溝跡出土遺物

ピット群（第50図）

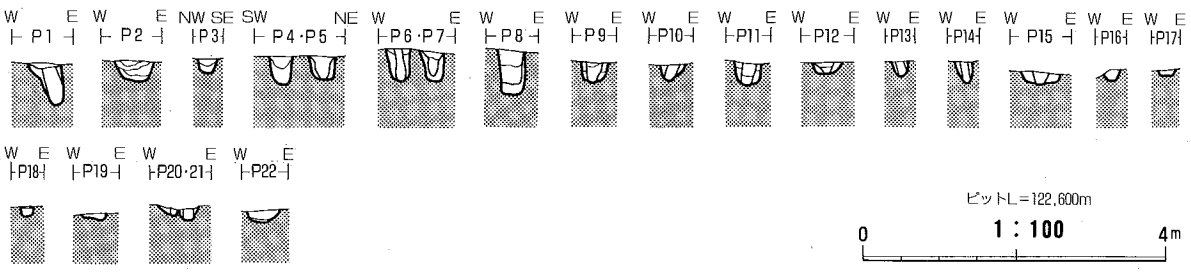
位　　置　4次調査区で検出したピットは総計81口を数える。このうちRG801とRG802に関連のあるもの、59口を除いたピットは22口を数え、何らかの施設を構成する柱穴と考えられるが、明確な遺構を確認し得なかった。希薄ながら、分布傾向は調査区内全域に散在する。

平　面　形　個々のピットの平面形は円形・不整円形・楕円形・方形を呈する傾向が認められる。

規　　模　規模は径が約0.30m以下のもの－P3～13・14・16、0.30m以上のもの－P1・2・4～12・15・19・22がある。

柱　痕　跡　柱痕跡が確認できるものはP1・5～15・18・19の計14口。

埋　　土　検出面はシルト層で、堀込み面は不明である。埋土の大半は褐色シルトを含む黒褐色～暗褐色土を主体としている。層相に明瞭な共通性・規格性は認められないものの、近接するピットの埋土において類似性が認められる。　　**出土遺物**　なし。



第50図　第4次調査区ピット土層断面

Ⅲ　調査のまとめ

1．縄文時代の遺構と遺物

土　　坑　第１次～４次調査において、検出した縄文時代の遺構は土坑のみである。１次調査では６基、２次調査では３基、３次調査では１基、４次調査では11基を検出しており、総計21基を数える。このうち陥し穴と思われる溝状土坑は14基、断面形がビーカー形やフラスコ形などの円形主体の土坑は７基である。これら１・３・４次調査区の土坑は、丘陵の最も高い場所に位置し、土坑数も２次調査区よりも多く、密度が高い様相を呈している。

溝状土坑は単体で存在するのではなく、ＲＤ102・103・104、ＲＤ108・110、ＲＤ114・115、ＲＤ105・113・116、ＲＤ117・118・119のように、２～３基が等高線に直行するように平行に配置されている。調査区外にのびる可能性も考え、3～5基を一群とする配置が想定される。山間部のいわゆる「けもの道」とは異なる平野部における狩猟遺構のあり方として注目されよう。なお、円形を呈する土坑の配置には規則性は認められない。

また、遺構にともなう遺物はないが遺構外から縄文時代後期の土器の出土しており、当該時期の遺構と想定される。

これまでの調査では、竪穴住居跡は確認されておらず、北側に隣接する町田遺跡で縄文時代後期の竪穴住居跡が検出されているが、この地域の縄文時代の様相は不明な点が多く、今後の調査により次第に明らかになっていくだろう。

2．平安時代の遺構と遺物

検出遺構　第１次～４次調査において、検出した平安時代の遺構は、掘立柱建物跡１棟、竪穴住居跡６棟（１次調査・４次調査－ＲＡ501同一遺構）、土坑18基である。内訳をみると、第１・３次調査が掘立柱建物跡１棟、竪穴住居跡４棟、土坑18基で検出遺構量が多い。第２次調査は竪穴住居跡１棟、第４次調査が竪穴住居跡２棟を検出している。１・３・４次調査をみると、段丘の頂部から北西斜面にかけて遺構の拡がりが捉えられる。

建　物　跡　ＲＢ501は東西２間（総長3.40ｍ）×南北２間以上（3.40ｍ）の総柱建物跡である。全体の規模は確認していないが、埋土の状況から平安時代の遺構と考えられる。

竪穴住居跡との共伴関係は不明であるが、わずかに真北方向から東にふれる主軸方向は、ＲＡ501や502との竪穴主軸方向と近似している。

細かな時期は特定できないが、北上盆地で平安時代に増加する集落内の倉庫としての性格を想定できる。

竪穴住居跡　竪穴住居跡の規模をみると、最も小さいのはＲＡ501で、一辺 3ｍ前後、次いでＲＡ503が、4ｍ以下の竪穴住居跡である。また最も大きいのはＲＡ505が、6ｍ前後。次いでＲＡ502が、5ｍ以上の竪穴住居跡である。ＲＡ505はＲＡ501の床面積でおよそ4倍の広さをもつ。主軸方向は、ＲＡ503・505・506がほぼ一致している。なお、他の住居跡は主軸がやや東に振れるものの大差はない。さらに2次調査のＲＡ504は強く東に振れているが、地形に左右されたためとも捉えられる。また、平面形はほぼ方形を呈している。かまどの位置の確認されたものは、すべて東壁に構築され、ＲＡ501・505は中央から南寄りで、503は北寄りである。

また、柱穴をみるとＲＡ502・505は4本柱で住居中央南壁際に寄っているが、503は柱配置からみると西壁下の2本柱が想定される。かまどの構造をみると、削平の大きいＲＡ503、かまどが調査区外に広がるＲＡ504・506については不明であるが、ＲＡ501・505は共に礫とシルトで袖が構築される。ＲＡ502も撹乱中の礫の混入から同様の構造が想定される。いずれも出土土器から同時期の集落を構成する竪穴住居群として捉えられる。

土　　坑　平面形が、不整な長楕円～楕円形を呈するものが最も多く、次いで円形が多い。方形や長方形プランも検出している。規模はすべて1～2ｍ以内に収まり、堀込みも浅いものが多い。また、用途は明らかでないが、溝状の施設をともなうＲＤ513もある。

土坑は、竪穴住居跡が集中する1・3次調査区のみで確認されていることなどから、竪穴住居跡との関わりの中で構築されたものと考えられるが、性格は不明である。

土　　器　第1～4次調査で出土した土器のうち図示可能な総点数は 184点をかぞえる。このうち須恵器は44点（24％）、あかやき土器53点（28.7％）、土師器87点（47.3％）である。

須恵器のうち器形と点数の内訳は坏が25点、鉢1点以下 瓶5点、壷4点、甕6点、大甕3点、である。あかやき土器は坏が24点、甑1点、小形甕11点、長胴甕17点である。また、土師器は坏が68点、高台付坏2点、鉢4点、小形壷2点、長胴甕9点、小形甕2点である。さらに須恵器・あかやき土器・土師器に共通するものとして器種別に見ると坏が119点（65％、高台付坏含む）、甕が47点である。このように須恵器・あかやき土器に対して、土師器は倍の出土量を示している。このように、土師器の得有率と坏の占める比率が高いのが特徴である。

坏について器形分類を試みたものが第51図である。119点中91点が分類可能であり、残る28点については口縁部～体部上半、体部下半～底部または底部を欠損しているため不明の個体である。

なお91点中、須恵器は18点、あかやき土器が18点、土師器は55点（高台付含む）である。

A類－体部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反し、Ａ1類は体部下半にやや強く丸みを持つもので、Ａ2類はそうでないものである。（第51～54図）

須恵器の（18－4）およびあかやき土器の（42－14）はA類の中でも器形、再調整が入ることを考えると古い様相を呈している。これらを除くものは、すべてＡ2類に属する。土師器では様々なバリエーションがあり、体部から内湾気味に立ち上がるが口唇部が外反するもの（42－25，43－32，10－14，19－30，43－45など）や、器高が低いもの（10－12，19－29など）、体部からゆるく内湾気味に立ち上がるが、中程で内湾がきつくなるもの（10－10，43－38，18－18など）がある。

B類－体部から口縁部にかけて全体に内湾気味に立ち上がる器形である。（第51～54図）

器高が低いもの（10－1・2・6・11，43－21・27・37・42・43など）やまた、土師器には口

径が小さく、器高があるもの（18－23，19－28，43－44）などがある。

C類－体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものである。（第51～54図）

全体に大きくて深いものが多い。この分類では、須恵器とあかやき土器の器形や法量が近似している。このように須恵器・土師器はA・B類に集中し、あかやき土器はB類に集中する。なお、須恵器のC類はみられない。また、A・B類の底径はC類と比べて小型のものが多い。

これらA・B・C分類の坏は、遺構の重複がなく、床面出土の坏もA～C類が混在する。このように、坏の法量等から時間差を考え得る特長が抽出できなかったため、共伴するものと捉えられる。

なお、土師器でA類に分類したもののなかにはB類に含まれる可能性の坏があると思われる。

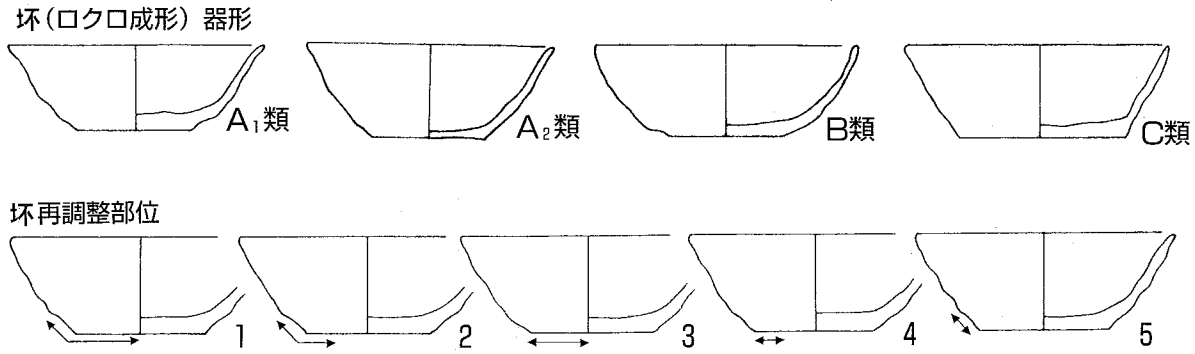
坏再調整　底部切離しと再調整を各器種についてみると須恵器は25点中22点、あかやき土器は24点中19点、土師器は68点中56点が観察可能である。坏全体をとおして圧倒的に多いのが、糸切無調整で計67点中、須恵器は19点、あかやき土器は17点、土師器は31点を数える。次に土師器の糸切再調整を施す坏で、25点を数え、ほとんど手持ちヘラケズリ（表2～6でHと表示）で、体部下端の周縁に再調整を施すものが多い。須恵器は25点中2点が手持ちヘラケズリを施される。あかやき土器は24点中2点で、手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリ（表6でWと表示）を施すものがみられる。また、須恵器にヘラ切無調整のものが1点みられ、B類に属する。

墨書土器　（第55図）第1～4次調査からは21点の墨書土器が出土しており、19点掲載した。ほとんどが竪穴住居跡から出土している。

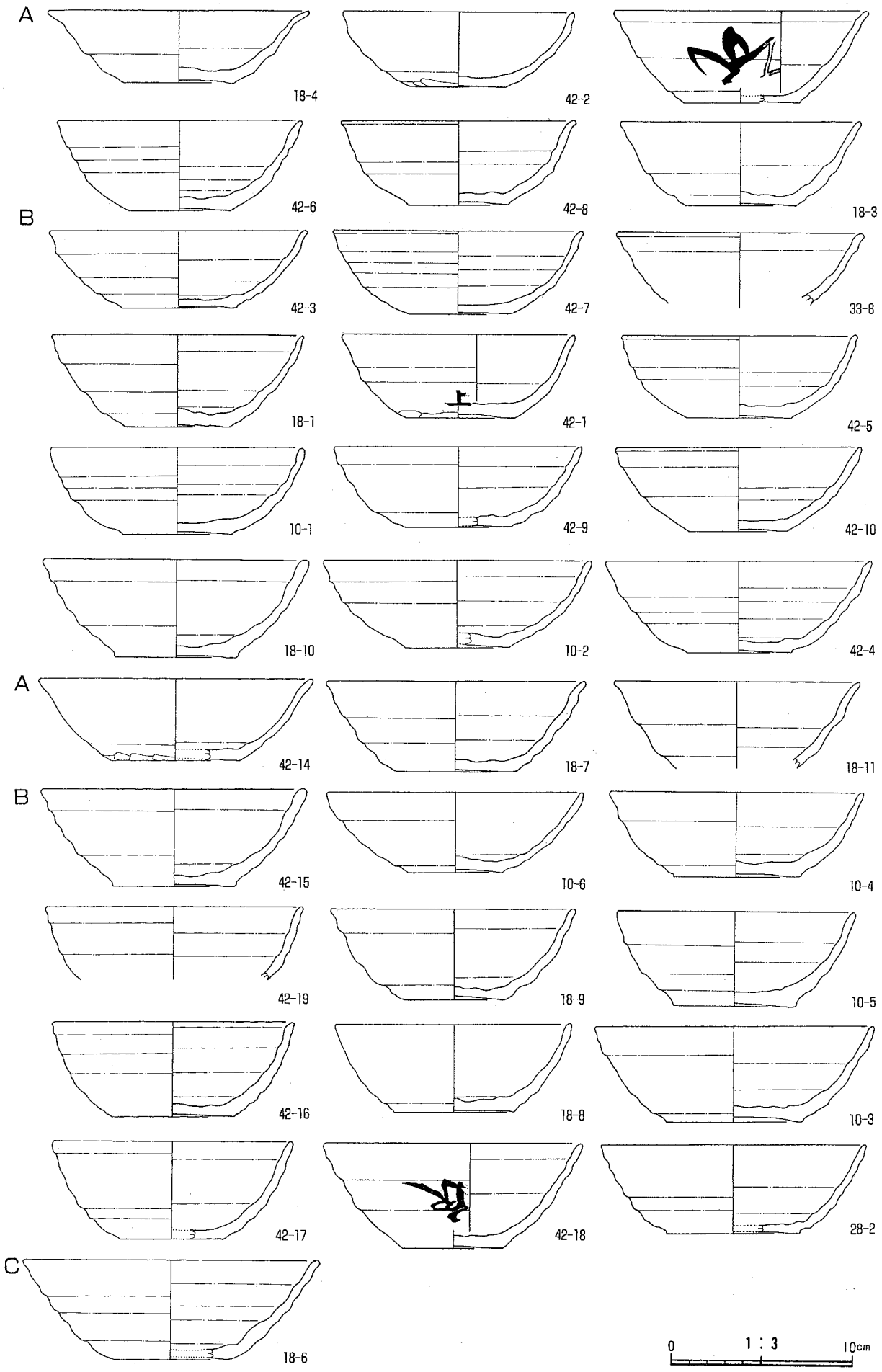
墨書土器の字の種類をみると、「上」カ、「仟」、「吉」、「道」、「坏」カ、「真木」カ、等がある。2の字は不明である。5・9・14は「吉」で、このように同じ字が多く用いられているようである。また、土器に対して倒位のものや横向きのもの等があり、これが意味するところは不明である。

乙部地区では過去に墨書土器が出土しており、『都南村史』によれば「㊻松長根住居址　乙部字菖蒲田　現在乙部小学校建築されている敷地と、その背後の畑。（中略）墨書土師器「下」、（高さ五・二センチ、口径一四・八センチ、底径六センチ）、墨書須恵器「仐」、（高さ五センチ、口径一四センチ、底径五・八センチ）いずれも糸切底」とある。

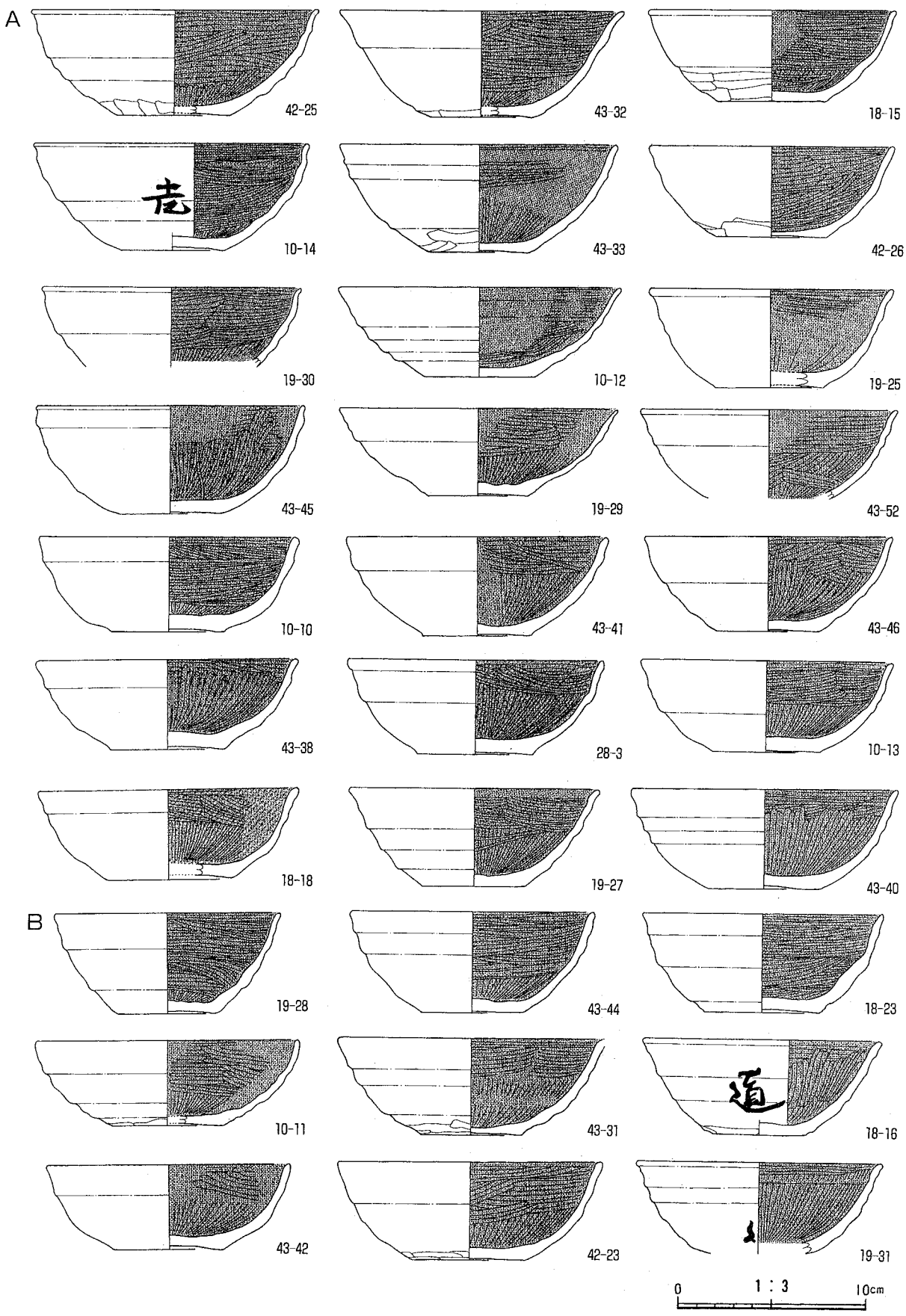
土師器甕　土師器甕をみるとRA501で出土した（45－73・75）やRD516（28－8・9）の甕は、口縁部に工具を使用し平坦に仕上げている。またRA501（45－70・73）の甕は体部外面にヘラミガキを施している。なお、須恵器・あかやき土器にはカキメが多用されていることも本遺跡の特徴としてあげられる。



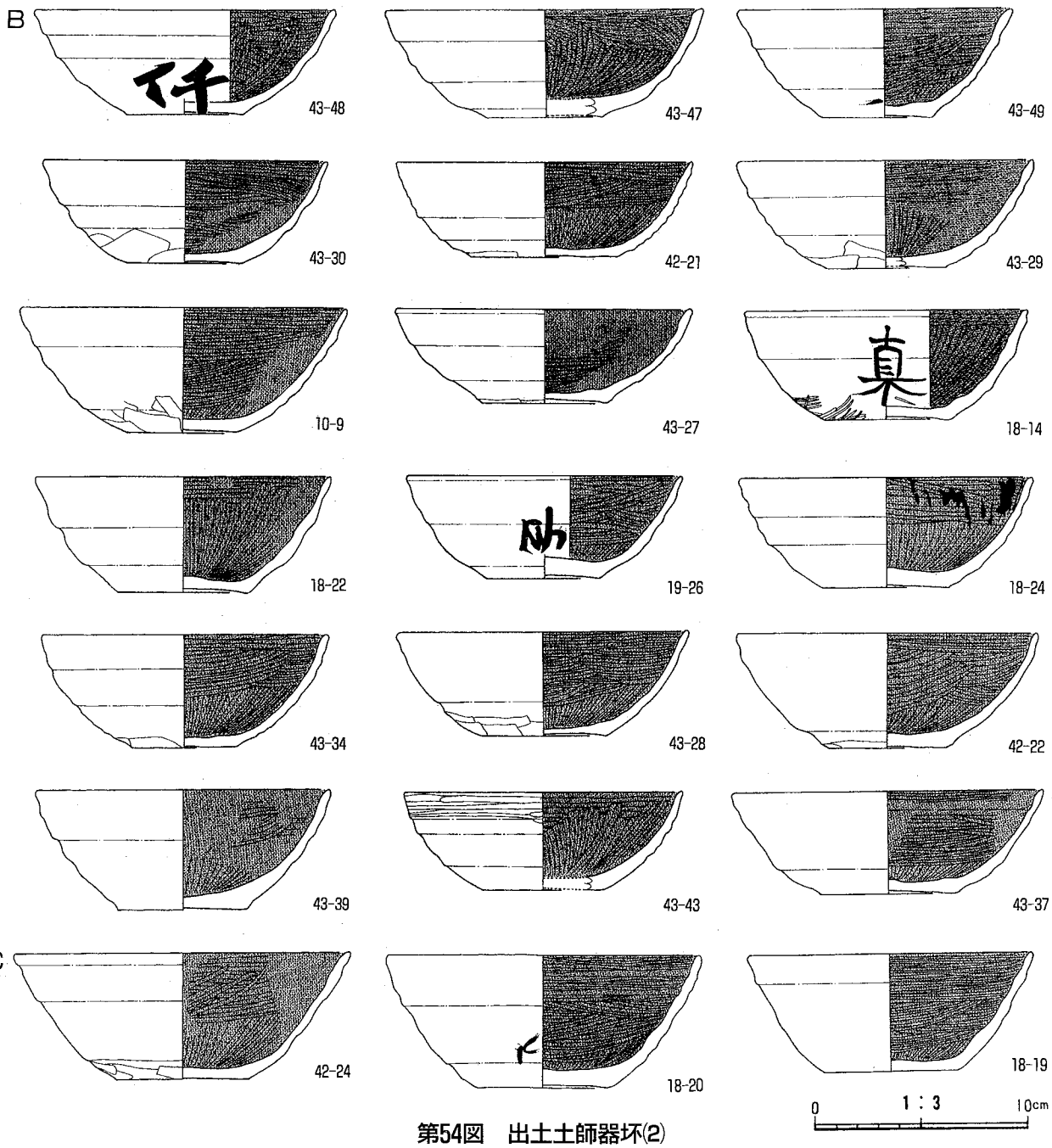
第51図　土器器形分類と再調整部位



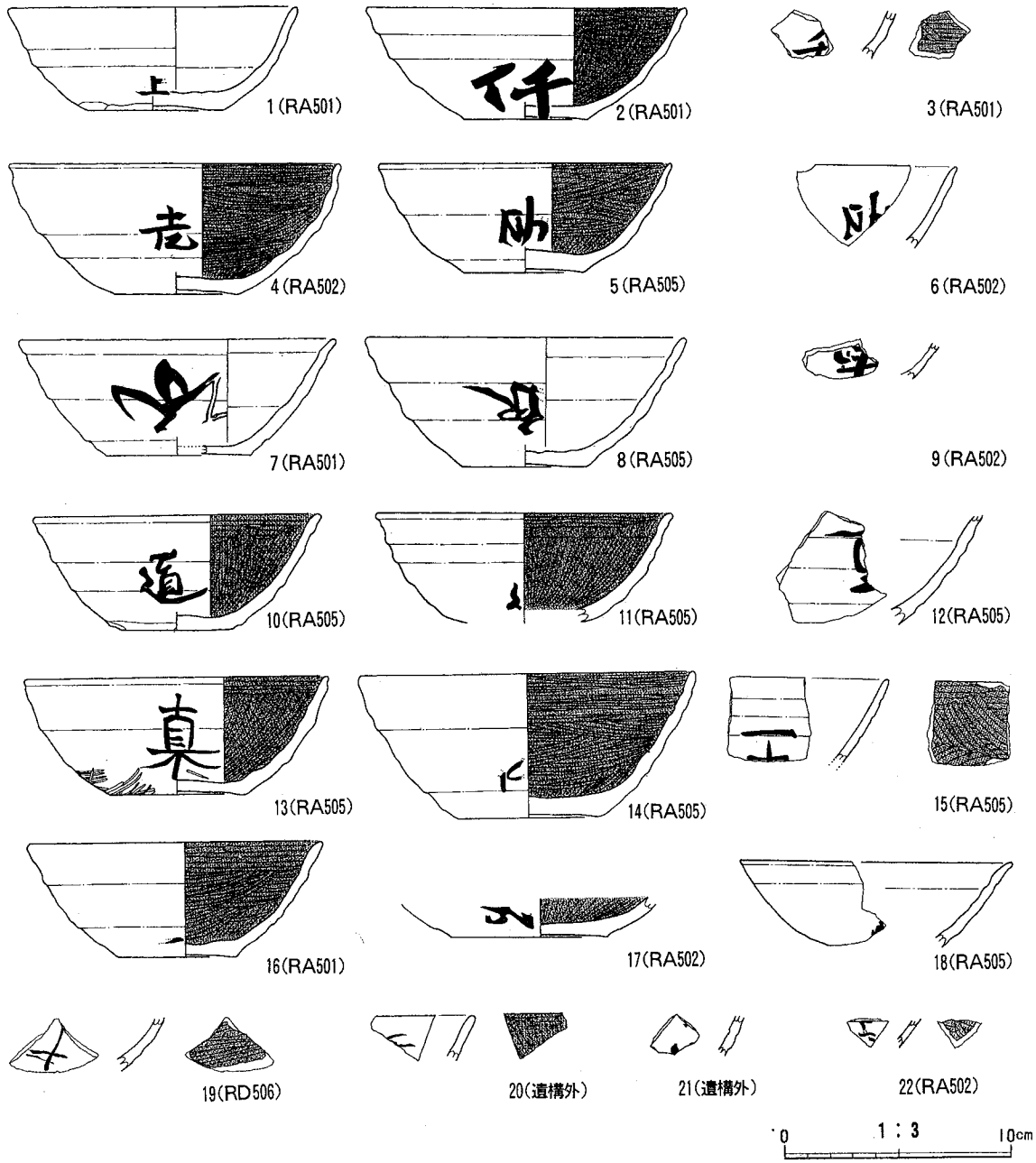
第52図　出土須恵器・あかやき土器坏



第53図　出土土師器坏(1)



第54図　出土土師器坏(2)



第55図　出土墨書土器

年　　代　遺構出土土器の特徴から、「古代斯波郡の土器編年」に当てはめると、Ⅰc期・Ⅱa期の坏にみられる形状の特徴である、体部下半に丸みをもつものや全体に強く丸みをもつものが主流である。また、糸切主体だがヘラ切や須恵器坏の再調整を施すものが僅かにある等の共通点が認められる。このことから、9世紀第2四半世紀終末から第3四半世紀までの時期が想定できる。

盛岡周辺での当該時期にかかわる集落の調査は、竹花前遺跡（4住）、上平澤新田遺跡（1住）・百目木遺跡（75住）、中田遺跡（B2住）、古館橋遺跡（AⅠ53住）等がある。

また、奈良時代～平安時代中頃にかけての占地が主に北上川以西の沖積（河岸）段丘に集中していたため、東側は希薄である。特に志波城（803－812頃）がなくなり、本遺跡に近接する徳丹城の終末年代（850年頃）と時期的に関わっており、律令体制崩壊前後の地域のあり方を示唆する遺跡である。

番号		形態			法量(cm)						底部切離	調整			外傾度	墨書	色調	備考
図	位置・層	区分	器種	分類	器高	口径	体径	底径	口/底	口/高		外面	内面	分類				
42-1	B	須恵器	坏	B	4.6	13.0	—	6.0	2.2	2.8	回転糸切、手持ヘラケズリ	手持ヘラケズリ	—	H2	1.4	「上」カ	7.5Y-6/1 灰	
42-2	B	須恵器	坏	A	4.3	13.3	—	5.3	2.5	3.1	回転糸切、手持ヘラケズリ	手持ヘラケズリ	—	H5	1.1	—	2.5Y-8/2 灰白	
42-3	B	須恵器	坏	A	4.4	14.4	—	6.4	2.3	3.3	回転糸切	—	—	—	1.1	—	7.5Y-7/1 灰白	内 火襷
42-4	B	須恵器	坏	B	5.2	14.7	—	5.8	2.5	2.8	回転糸切	—	—	—	1.2	—	2.5Y-8/3 淡黄	
42-5	B	須恵器	坏	B	4.7	13.1	—	5.7	2.3	2.8	回転糸切	—	—	—	1.3	—	7.5Y-7/2 灰白	
42-6	A	須恵器	坏	A	5.1	13.8	—	5.7	2.4	2.7	回転糸切	—	—	—	1.3	—	5Y-6/1 灰	内 火襷
42-7	B	須恵器	坏	A	4.7	13.9	—	5.6	2.5	3.0	回転糸切	—	—	—	1.1	—	5Y-7/1 灰白	内 火襷
42-8	B	須恵器	坏	A	4.8	13.1	—	5.5	2.4	2.8	回転糸切	—	—	—	1.3	—	5Y-7/1 灰白	内 火襷
42-9	B	須恵器	坏	B	4.5	13.8	—	(5.5)	(2.5)	3.1	回転糸切	—	—	—	1.1	—	7.5YR-7/1 灰白	内 火襷
42-10	A	須恵器	坏	B	4.7	13.7	—	5.5	2.5	2.9	回転糸切	—	—	—	1.2	—	5Y-7/2 灰白	内 火襷
42-11	B	須恵器	坏	—	(4.2)	14.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5YR-7/4 にぶい橙	
42-12	B	須恵器	坏	—	(2.8)	—	—	5.9	—	—	回転糸切	—	—	—	—	—	5Y-8/2 灰白	
42-13	Pit30	須恵器	坏	—	—	—	—	5.8	—	—	回転糸切	—	—	—	—	—	5Y-8/1 灰白	
42-14	B	あかやき	坏	A	4.7	15.2	—	(7.0)	2.2	3.3	回転糸切、手持ヘラケズリ	手持ヘラケズリ	—	H5	1.0	—	5YR-8/3 淡橙	
42-15	B	あかやき	坏	B	5.5	14.9	—	6.8	2.2	2.7	回転糸切	—	—	—	1.4	—	5YR-7/4 にぶい橙	
42-16	B	あかやき	坏	B	5.3	13.5	—	6.9	2.0	2.6	回転糸切	—	—	—	1.6	—	5YR-7/3 にぶい橙	
42-17	B	あかやき	坏	B	5.5	13.4	—	5.9	2.3	2.4	静止糸切	—	—	—	1.5	—	5YR-7/4 にぶい橙	
42-18	B	あかやき	坏	B	5.8	14.4	—	5.6	2.6	2.5	回転糸切	—	—	—	1.3	1文字	5YR-8/3 淡橙	
42-19	B	あかやき	坏	B	—	14.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5YR-7/6 橙	
42-20	B	あかやき	坏	—	(2.9)	—	—	7.0	—	—	回転糸切	—	—	—	—	—	7.5YR-7/4 にぶい橙	
42-21	B	土師器	坏	B	4.5	14.0	—	6.9	(2.0)	3.1	回転糸切、手持ヘラケズリ	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H2	1.3	—	5YR-8/4 淡橙	
42-22	B	土師器	坏	B	5.5	14.2	—	5.4	2.6	2.6	回転糸切、手持ヘラケズリ	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H2	1.2	—	5YR-8/4 淡橙	外 黒斑
42-23	C	土師器	坏	B	5.3	14.2	—	6.0	2.4	2.7	回転糸切、手持ヘラケズリ	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H2	1.3	—	5YR-8/4 淡橙	外 煤付着
42-24	B	土師器	坏	C	6.0	16.0	—	6.2	2.6	2.7	回転糸切、手持ヘラケズリ	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H5	1.2	—	5YR-7/4 にぶい橙	外 黒斑
42-25	B	土師器	坏	A	5.7	15.4	—	6.6	(2.6)	2.7	回転糸切	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H5	1.2	—	5YR-8/3 淡橙	外 黒斑
42-26	C	土師器	坏	A	4.9	13.2	—	5.9	2.2	2.7	回転糸切	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H5	1.4	—	5YR-7/6 橙	外 黒斑
43-27	A	土師器	坏	B	4.6	14.1	—	5.9	2.4	3.1	回転糸切	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H5	1.2	—	5YR-7/6 橙	
43-28	B	土師器	坏	B	5.0	13.8	—	5.7	2.4	2.8	回転糸切	手持ヘラケズリ	ヘラケズリ	H5	1.3	—	5YR-7/6 橙	外 黒斑
43-29	B	土師器	坏	B	5.1	14.2	—	5.6	2.5	2.8	回転糸切	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H5	1.2	—	5YR-7/4 にぶい橙	外 黒斑
43-30	B	土師器	坏	B	4.9	13.5	—	5.4	2.5	2.8	静止糸切	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H5	1.2	—	5YR-7/6 橙	外 黒斑
43-31	B	土師器	坏	B	5.2	14.4	—	5.4	2.7	2.8	回転糸切	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H5	1.2	—	5YR-7/6 橙	
43-32	B	土師器	坏	A	6.0	15.2	—	(5.4)	2.8	2.5	回転糸切	手持ヘラケズリ	ヘラケズリ	H5	1.2	—	5YR-7/6 橙	
43-33	B	土師器	坏	A	5.8	15.0	—	5.3	2.8	2.6	回転糸切、手持ヘラケズリ	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H5	1.2	—	5YR-8/2 灰白	外 黒斑
43-34	B	土師器	坏	B	5.4	13.5	—	4.9	2.8	2.5	回転糸切、手持ケラケズリ	手持ヘラケズリ	ヘラケズリ	H5	1.3	—	5YR-8/4 淡橙	
43-35	B	土師器	坏	—	(3.4)	—	—	5.5	—	—	回転糸切、手持ヘラケズリ	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H5	—	—	5YR-8/4 淡橙	
43-36	B	土師器	坏	—	(2.2)	—	—	6.5	—	—	回転糸切	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H5	—	—	5YR-7/4 にぶい橙	
43-37	B	土師器	坏	B	4.9	14.8	—	6.5	2.3	3.0	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.2	—	7.5YR-8/4 浅黄橙	外 黒斑
43-38	B	土師器	坏	A	4.9	14.0	—	6.1	2.3	2.9	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.3	—	5YR-7/4 にぶい橙	
43-39	B	土師器	坏	B	4.7	14.0	—	6.1	2.3	2.5	静止糸切	—	ヘラミガキ	—	1.5	—	5YR-8/4 淡橙	
43-40	B	土師器	坏	A	5.4	14.4	—	6.0	2.4	2.7	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.3	—	5YR-7/6 橙	
43-41	B	土師器	坏	A	5.4	14.0	—	5.9	2.4	2.6	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.4	—	5YR-7/4 にぶい橙	
43-42	B	土師器	坏	B	4.6	13.1	—	5.8	2.3	2.9	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.3	—	5YR-7/3 にぶい橙	
43-43	B	土師器	坏	B	4.7	13.4	—	5.6	2.4	2.9	不明	—	ヘラミガキ	—	1.2	—	7.5YR-8/3 にぶい橙	外 黒斑
43-44	B	土師器	坏	B	5.4	13.1	—	5.5	2.4	2.4	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.5	—	5YR-8/3 淡橙	
43-45	B	土師器	坏	A	5.9	14.4	—	5.4	2.7	2.5	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.3	—	5YR-6/6 橙	
43-46	B	土師器	坏	A	5.1	13.3	—	5.4	2.5	2.6	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.3	—	5YR-7/4 にぶい橙	
43-47	B	土師器	坏	B	5.1	14.9	—	5.4	2.8	2.9	不明	—	ヘラミガキ	—	1.1	—	2.5YR-6/4 にぶい橙	外 黒斑
43-48	B	土師器	坏	B	5.0	14.2	—	5.4	2.6	2.8	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.2	2文字	7.5YR-8/4 浅黄橙	
43-49	B	土師器	坏	B	5.1	13.4	—	5.3	2.5	2.6	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.4	1文字	5YR-7/4 にぶい橙	
43-50	B	土師器	坏	C	4.9	13.4	—	—	—	2.7	—	—	ヘラミガキ	—	—	—	5YR-8/4 淡橙	外 黒斑

表2　出土土器一覧

RA501

番号		形態			法量(cm)						底部切離	調整			外傾度	墨書	色調	備考
図	位置・層	区分	器種	分類	器高	口径	体径	底径	口/底	口/高		外面	内面	分類				
43-51	A	土師器	坏	—	4.2	14.3	—	—	—	3.4	—	—	ヘラミガキ	—	—	—	5YR-7/3 にぶい橙	
43-52	B	土師器	坏	A	(4.8)	13.8	—	—	—	(2.9)	—	—	ヘラミガキ	—	—	—	2.5YR-6/4 にぶい橙	
43-53	B	土師器	坏	—	2.4	—	—	5.4	—	—	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	—	—	2.5YR-7/6 橙	
43-54	A	土師器	坏	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヘラミガキ	—	—	1文字	5YR-7/4 にぶい橙	
43-55	K	土師器	小形壺	—	9.1	10.4	—	7.5	1.4	1.1	手持ヘラケズリ	被熱による剝落で不明	—	H1	—	—	2.5YR-7/6 橙	内 炭化物付着
44-56	A	須恵器	長頸瓶	—	10.8	—	17.0	—	—	—	—	回転・手持ヘラケズリ	指圧痕	—	—	—	自然釉	
44-57	B	あかやき	甑	—	16.3	24.2	25.5	10.5	2.3	1.9	不明、手持ヘラケズリ	手持ヘラケズリカキメ、ナデ	ヘケメ	—	—	—	5YR-7/6 橙	底部穿孔
44-58	B	土師器	鉢	—	(14.8)	24.6	23.2	—	—	—	—	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	—	—	—	5YR-7/6 橙	外 煤付着
44-59	A	土師器	鉢	—	(10.7)	18.6	16.2	—	—	—	—	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	—	—	—	5YR-8/4 淡橙	
44-60	B	あかやき	小形甕	—	(9.3)	12.4	12.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5YR-8/2 灰白	外 煤付着
44-61	B	あかやき	小形甕	—	(20.8)	17.8	19.0	—	—	—	—	手持ヘラケズリ	—	—	—	—	7.5YR-8/2 灰白	
44-62	B	あかやき	小形甕	—	(3.9)	—	—	7.8	—	—	静止糸切	回転ヘラケズリ	カキメ	W5	—	—	5YR-8/1 灰白	内外 煤付着
44-63	B	あかやき	小形甕	—	(4.8)	—	—	6.5	—	—	静止糸切	被熱による剝落で不明	—	—	—	—	7.5YR-8/4 浅黄橙	
44-64	B	あかやき	小形甕	—	(4.9)	—	—	6.8	—	—	静止糸切	—	—	—	—	—	5YR-7/4 にぶい橙	
44-65	B	あかやき	小形甕	—	(9.0)	—	—	7.9	—	—	回転糸切	手持ヘラケズリ	—	H5	—	—	5YR-7/3 にぶい橙	
44-66	B	あかやき	小形甕	—	(8.5)	—	—	7.8	—	—	回転糸切	—	—	—	—	—	5YR-8/3 淡橙	
44-67	B	あかやき	小形甕	—	(6.1)	—	—	7.6	—	—	回転糸切	—	—	—	—	—	7.5YR-8/4 浅黄橙	内外 煤付着
45-68	B	あかやき	甕	—	(15.8)	26.4	—	—	—	—	—	手持ヘラケズリ	—	—	—	—	5YR-8/2 灰白	
45-69	B	あかやき	甕	—	(14.4)	26.8	—	—	—	—	—	手持ヘラケズリ	—	—	—	—	5YR-8/4 淡橙	外 煤付着
45-70	K	土師器	小形甕	—	(9.5)	16.1	—	—	—	—	—	ヘラナデ、ヘラミガキ	ヘラナデ、ヨコナデ	—	—	—	5YR-7/4 にぶい橙	口唇 工具調整
45-71	K	土師器	小形甕	—	16.2	15.2	14.0	8.4	1.8	0.9	—	ヘラナデ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ		—	—	5YR-7/4 にぶい橙	
45-72	C	土師器	小形甕	—	(14.0)	16.1	17.4	—	—	—	—	ヘラナデ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ	—	—	—	5YR-7/2 明褐灰	口唇 タール状の付着物
45-73	K	土師器	甕	—	(27.8)	20.2	19.4	—	1.0	—	—	ヘラナデ、ヘラミガキヨコナデ、ヘケメ	ヘラナデ、ヨコナデ	—	—	—	7.5YR-7/6 橙	外 やや摩滅
45-74	B	土師器	甕	—	(3.9)	—	—	10.6	—	—	—	手持ヘラケズリ	ヘラナデ	H5	—	—	5YR-7/3 にぶい橙	底 木葉痕
45-75	K	土師器	甕	—	(24.7)	18.4	18.0	—	—	—	—	手持ヘラケズリヘラナデ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ	—	—	—	5YR-7/6 橙	内外 炭化物付着
46-76	B	須恵器	壺	—	(19.3)	8.5	12.0	—	—	—	—	手持ヘラケズリ、ナデ	—	H5	—	—	7.5YR-8/2 灰白	
46-77	B	須恵器	大甕	—	(3.2)	—	—	13.8	—	—	—	手持ヘラケズリ、ナデ指頭圧痕	剝落で不明	—	—	—	5YR-5/1 褐灰	

RA502

番号		形態			法量(cm)						底部切離	調整			外傾度	墨書	色調	備考
図	位置・層	区分	器種	分類	器高	口径	体径	底径	口/底	口/高		外面	内面	分類				
10-1	Pit 2	須恵器	坏	B	4.9	14.2	—	6.0	2.3	2.9	回転糸切	—	—	—	1.2	—	5YR-8/1 灰白	
10-2	Pit 1	須恵器	坏	B	4.9	15.0	—	(5.8)	2.6	3.1	回転糸切	—	—	—	1.1	—	2.5YR-8/1 灰白	
10-3	A	あかやき	坏	B	5.4	15.5	—	(7.6)	2.0	2.9	回転糸切	—	—	—	1.4	—	5YR-7/4 にぶい橙	内外底 煤付着
10-4	Pit 2	あかやき	坏	B	4.8	14.5	—	7.1	2.0	3.0	回転糸切	—	—	—	1.4	—	2.5YR-7/6 橙	
10-5	床	あかやき	坏	B	5.4	13.2	—	6.8	2.0	2.5	回転糸切	—	—	—	1.7	—	5YR-7/6 橙	
10-6	Pit 2	あかやき	坏	B	4.4	14.2	—	(5.2)	2.8	3.3	回転糸切	—	—	—	1.0	—	5YR-8/4 淡橙	
10-7	A	あかやき	坏	—	—	—	—	—	—	—	—	—	剝落で不明	—	—	1文字	5YR-7/3 にぶい橙	
10-8	床	土師器	坏	—	(2.2)	—	—	6.5	—	—	回転糸切	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H5	—	—	5YR-8/2 灰白	
10-9	B	土師器	坏	B	5.9	15.5	—	5.2	3.0	2.6	回転糸切	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H5	1.1	—	5YR-8/3 淡橙	
10-10	Pit 2	土師器	坏	A	5.1	13.9	—	6.0	2.3	2.7	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.4	—	5YR-7/3 にぶい橙	
10-11	床	土師器	坏	B	4.6	14.2	—	(5.9)	2.4	3.1	静止糸切、手持ヘラケズリ	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H5	1.2	—	5YR-8/4 淡橙	外 黒斑
10-12	床	土師器	坏	A	4.8	15.2	—	(5.9)	2.6	3.2	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.1	—	5YR-8/3 淡橙	外 黒斑

表3 出土土器一覧

RA502

番号		形態			法量(cm)						底部切離	調整			外傾度	墨書	色調	備考
図	位置・層	区分	器種	分類	器高	口径	体径	底径	口/底	口/高		外面	内面	分類				
10-13	床	土師器	坏	A	4.8	13.6	—	5.7	2.4	2.8	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.3	—	7.5YR-7/3 にぶい橙	
10-14	床	土師器	坏	A	5.8	14.4	—	5.5	2.6	2.5	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.3	「吉」カ	7.5YR-7/6 橙	口縁 黒斑
10-15	Pit 3	土師器	坏	C	(3.9)	14.5	—	—	—	3.7	—	—	ヘラミガキ	—	—	—	5YR-7/4 にぶい橙	
10-16	Pit 2	土師器	坏	—	(1.5)	—	—	6.9	—	—	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	—	1文字	5YR-8/3 淡橙	
10-17	A	土師器	坏	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヘラミガキ	—	—	1文字	7.5YR-8/3 浅黄橙	
10-18	Pit 1	土師器	坏	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヘラミガキ	—	—	1文字	5YR-7/4 にぶい橙	
10-19	床	須恵器	鉢	—	(8.2)	—	—	12.6	—	—	ヘラケズリ 不明瞭	手持ヘラケズリ	ヘラナデ	—	—	—	5YR-5/1 褐灰	
10-20	床	須恵器	甕	—	—	—	—	—	—	—	—	タタキ	アテ工具痕	—	—	—	N-4/0 灰	
11-21	B	あかやき	小形甕	—	(8.4)	13.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5YR-8/1 灰白	
11-22	B	あかやき	小形甕	—	(5.4)	14.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5YR-7/4 にぶい橙	内外 煤付着
11-23	床	あかやき	小形甕	—	(3.5)	—	—	7.4	—	—	回転糸切	—	—	—	—	—	7.5YR-8/3 浅黄橙	底 貼付高台、外 煤付着
11-24	床	あかやき	甕	—	(16.9)	23.6	—	—	—	—	—	手持ヘラケズリ	—	—	—	—	5YR-8/3 淡橙	
11-25	床	須恵器	壺	—	(22.2)	17.2	23.5	—	—	—	—	手持ヘラケズリ	ナデ	—	—	—	5YR-5/1 灰	
11-26	A	須恵器	長頸瓶	—	(3.1)	10.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5YR-6/1 灰	
11-27	A	須恵器	長頸瓶	—	(16.4)	—	20.6	—	—	—	—	手持ヘラケズリ	—	—	—	—	5YR-4/2 灰褐	自然釉付着
11-28	床	須恵器	短頸瓶	—	(12.6)	—	23.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5YR-6/1 灰	自然釉付着
11-29	床	須恵器	瓶	—	(6.8)	—	—	6.4	—	—	—	—	—	—	—	—	N-4/0 灰	底 付高台
12-30	床	須恵器	大甕	—	66.1	43.4	62.8	—	—	0.7	—	タタキ	タタキ	—	—	—	7.5YR-7/1 灰白	丸底

RA503

番号		形態			法量(cm)						底部切離	調整			外傾度	墨書	色調	備考
図	位置・層	区分	器種	分類	器高	口径	体径	底径	口/底	口/高		外面	内面	分類				
15-1	火床面	あかやき	小形甕	—	(5.6)	13.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5YR-8/2 灰白	

RA505

番号		形態			法量(cm)						底部切離	調整			外傾度	墨書	色調	備考
図	位置・層	区分	器種	分類	器高	口径	体径	底径	口/底	口/高		外面	内面	分類				
18-1	D	須恵器	坏	B	5.2	14.1	—	5.9	2.4	2.7	ヘラ切	—	—	—	1.3	—	2.5Y-8/1 灰白	
18-2	床	須恵器	坏	A	5.1	14.1	—	6.4	2.2	2.8	回転糸切	—	—	—	1.4	「坏」カ	5Y-8/2 灰白	内外 黒斑
18-3	D	須恵器	坏	A	4.7	13.4	—	6.1	2.2	2.9	回転糸切	—	—	—	1.3	—	2.5YR-8/2 灰白	
18-4	J	須恵器	坏	A	4.1	14.5	—	5.9	2.5	3.5	回転糸切	—	—	—	1.0	—	7.5YR-8/1 灰白	内外 摩滅、黒斑
18-5	B	須恵器	坏	B	(5.0)	14.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5Y-8/1 灰白	
18-6	B	あかやき	坏	C	5.6	16.5	—	(6.4)	2.6	2.9	回転糸切	—	—	—	1.2	—	5YR-8/4 淡橙	
18-7	C	あかやき	坏	A	5.1	14.4	—	6.6	(2.2)	2.8	回転糸切	—	—	—	1.3	—	5YR-8/3 淡橙	内外 黒斑
18-8	D	あかやき	坏	B	5.0	13.1	—	6.6	2.0	2.6	静止糸切	—	—	—	1.6	—	5YR-8/4 淡橙	内 部分的に煤
18-9	C	あかやき	坏	B	5.2	(15.0)	—	5.8	2.6	2.9	回転糸切	—	—	—	1.2	—	5YR-8/4 淡橙	
18-10	C	あかやき	坏	B	5.1	13.6	—	5.4	2.5	2.7	静止糸切	—	—	—	1.3	—	7.5YR-8/2 灰白	外 部分的に黒斑
18-11	C	あかやき	坏	A	(4.9)	13.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5YR-8/3 浅黄橙	外 部分的に煤
18-12	床	あかやき	坏	A	(4.8)	13.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5YR-8/2 灰白	内 口縁部に黒斑
18-13	A	あかやき	坏	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1文字	7.5YR-8/4 浅黄橙	
18-14	D	土師器	坏	B	5.2	13.6	—	6.0	2.3	2.6	回転糸切、ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	H1	1.4	「真」カ	5YR-7/6 橙	外 口縁部に黒斑胎土に金雲母が混じる
18-15	D	土師器	坏	A	4.9	13.4	—	5.7	2.4	2.7	不明、手持ヘラケズリ	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H1	1.3	—	5YR-7/4 にぶい橙	
18-16	床	土師器	坏	B	5.2	12.4	—	5.0	2.5	2.4	回転糸切、手持ヘラケズリ	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H2	1.3	「道」カ	7.5YR-8/4 浅黄橙	外 黒斑、歪み大
18-17	B	土師器	坏		(2.8)	—	—	4.7	—	—	回転糸切	手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	H5	—	—	7.5YR-8/4 浅黄橙	
18-18	D	土師器	坏	A	4.8	(14.0)	—	(6.5)	2.2	2.9	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.3	—	7.5YR-7/4 にぶい橙	
18-19	床	土師器	坏	C	5.6	13.5	—	6.4	2.1	2.4	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.6	—	7.5YR-8/4 浅黄橙	
18-20	床	土師器	坏	C	6.4	15.0	—	6.1	2.5	2.3	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.5	1文字	7.5YR-8/4 浅黄橙	外 黒斑
18-21	D	土師器	坏	B	5.5	(13.6)	—	(6.1)	2.2	2.5	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.5	—	7.5YR-8/4 浅黄橙	

表4 出土土器一覧

RA501

番号		形態			法量(cm)						底部切離	調整			外傾度	墨書	色調	備考
図	位置・層	区分	器種	分類	器高	口径	体径	底径	口/底	口/高		外面	内面	分類				
18-22	B	土師器	坏	B	5.5	14.0	—	6.1	2.3	2.5	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.4	—	7.5YR-8/4 浅黄橙	
18-23	床	土師器	坏	B	5.4	12.9	—	6.1	2.1	2.4	静止糸切	—	ヘラミガキ	—	1.6	—	5YR-7/4 にぶい橙	
18-24	床	土師器	坏	B	5.2	13.9	—	5.9	2.4	2.7	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.3	—	5YR-7/6 橙	内 灯芯痕
19-25	床	土師器	坏	A	5.3	(13.1)	—	(5.8)	(2.3)	(2.5)	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.5	—	7.5YR-8/4 浅黄橙	外 被熱、黒斑
19-26	J	土師器	坏	B	4.9	13.0	—	5.4	2.4	2.7	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.3	「吉」カ	7.5YR-8/4 浅黄橙	外 黒斑
19-27	D	土師器	坏	A	5.3	13.4	—	5.4	2.5	2.5	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.4	—	7.5YR-8/3 浅黄橙	底 黒斑
19-28	C	土師器	坏	B	5.4	12.1	—	5.3	2.3	2.2	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.6	—	7.5YR-8/6 浅黄橙	外 黒斑
19-29	A	土師器	坏	A	4.7	(14.9)	—	5.3	2.8	3.2	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.0	—	7.5YR-7/4 にぶい橙	底 黒斑
19-30	C	土師器	坏	A	(4.4)	13.9	—	—	—	—	—	—	ヘラミガキ	—	—	—	5YR-7/4 にぶい橙	外 口縁に黒斑
19-31	床	土師器	坏	B	(4.9)	13.2	—	—	—	—	—	—	ヘラミガキ	—	—	「道」カ	5YR-8/3 淡橙	外 口縁に黒斑
19-32	床	土師器	坏	—	(1.7)	—	—	5.6	—	—	回転糸切 ミガキ工具によるナデツケ	—	ヘラミガキ	—(H5)	—	—	5YR-7/6 にぶい橙	
19-33	A	土師器	坏	—	(1.9)	—	—	5.0	—	—	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	—	—	5YR-7/4 にぶい橙	
19-34	C	土師器	坏	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヘラミガキ	—	—	2文字	5YR-7/4 にぶい橙	
19-35	J	土師器	高台付坏	A	5.1	13.2	—	4.5	2.9	2.6	—	—	ヘラミガキ	—	0.8	—	7.5YR-8/3 浅黄橙	外 口縁に黒斑、底 菊花文
19-36	Pit25	土師器	高台付坏	—	(2.4)	—	—	6.4	—	—	静止糸切、ナデ	—	ヘラミガキ	—	—	—	5YR-7/4 にぶい橙	外 煤
19-37	A	須恵器	壷	—	(4.0)	—	—	7.8	—	—	回転糸切	手持ヘラケズリ	—	H1	—	—	N-8/0 灰白	
19-38	C	あかやき	小形甕	—	(3.8)	9.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5YR-7/1 明褐灰	
19-39	D	あかやき	小形甕	—	(6.4)	13.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5YR-8/3 浅黄橙	内 煤付着
19-40	Pit 1	あかやき	小形甕	—	(5.0)	—	—	6.0	—	—	静止糸切	回転ヘラケズリ	—	W5	—	—	7.5YR-7/1 明褐灰	内 煤付着
19-41	C	あかやき	小形甕	—	(6.0)	—	—	6.7	—	—	回転糸切	—	—	—	—	—	5YR-8/1 灰白	
19-42	B	あかやき	小形甕	—	(6.9)	—	—	5.5	—	—	回転糸切、ナデ	—	—	—	—	—	7.5YR-8/3 浅黄橙	
19-43	J	あかやき	甕	—	32.5	26.4	27.6	13.2	2.0	0.8	—	手持ヘラケズリ ロクロナデ	ハケメ、ナデ	—	—	—	7.5YR-7/3 にぶい橙	内 煤付着
20-44	J	あかやき	甕	—	(24.7)	26.0	26.0	—	—	—	—	ロクロナデ、カキメナデ、手持ヘラケズリ	—	—	—	—	7.5YR-7/3 にぶい橙	内外 煤付着
20-45	C	あかやき	甕	—	(22.5)	26.6	23.3	—	—	—	—	ロクロナデ、カキメ、手持ヘラケズリ	ナデ	—	—	—	7.5YR-8/4 浅黄橙	
20-46	J	あかやき	甕	—	(13.4)	27.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5YR-8/3 浅黄橙	内外 煤付着
21-47	A	あかやき	甕	—	(13.6)	24.5	—	—	—	—	—	手持ヘラケズリ	—	—	—	—	7.5YR-8/3 浅黄橙	
21-48	J	あかやき	甕	—	(18.5)	20.0	16.7	—	—	—	—	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	—	—	—	7.5YR-8/3 浅黄橙	
21-49	D	土師器	甕	—	(12.6)	26.0	—	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	—	—	—	2.5YR-7/6 橙	
21-50	J	土師器	甕	—	(8.2)	25.0	—	—	—	—	—	ヨコナデ、手持ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	—	—	—	5YR-6/3 にぶい橙	
21-51	C	土師器	小形壷	—	(3.3)	—	6.6	—	—	—	—	ヘラミガキ	ヨコナデ	—	—	—	2.5YR-6/8 橙	外 朱塗
21-52	B	土師器	小形壷	—	(3.2)	—	7.4	—	—	—	—	ヘラミガキ	手捏ね痕	—	—	—	7.5YR-7/3 にぶい橙	外 朱塗、黒斑
21-53	J	須恵器	壷	—	(34.5)	—	32.4	13.0	—	—	不明	カキメ、手持ヘラケズリ	カキメ、ヘラナデ	—	—	—	N-5/1 灰	
22-54	煙出	須恵器	大甕	—	(62.6)	42.0	62.2	—	—	—	—	タタキ	タタキ	—	—	—	N-5/1 灰	丸底 表面一部剥落

RD513

番号		形態			法量(cm)						底部切離	調整			外傾度	墨書	色調	備考
図	位置・層	区分	器種	分類	器高	口径	体径	底径	口/底	口/高		外面	内面	分類				
28-1	B	須恵器	坏	—	(2.5)	—	—	6.4	—	—	静止糸切	—	—	—	—	—	7.5YR-8/3 浅黄橙	
28-2	C	あかやき	坏	B	5.0	14.6	—	(7.5)	1.9	2.9	回転糸切	—	—	—	1.4	—	7.5YR-8/3 浅黄橙	
28-3	C	土師器	坏	A	6.2	13.8	—	5.2	2.7	2.2	回転糸切	—	ヘラミガキ	—	1.4	—	7.5YR-8/3 浅黄橙	外 黒斑
28-4	B	あかやき	甕	—	(19.2)	24.1	22.6	—	—	—	—	手持ヘラケズリ	カキメ、ハケメ、ナデ	—	—	—	5YR-8/4 淡橙	外 煤付着

表5 出土土器一覧

RD516

番号		形態			法量(cm)						底部切離	調整			外傾度	墨書	色調	備考
図	位置・層	区分	器種	分類	器高	口径	体径	底径	口/底	口/高		外面	内面	分類				
28- 5	A	須恵器	坏	—	(3.6)	—	—	5.7	—	—	回転糸切	—	爪痕	—	—	—	2.5YR-6/2 灰黄	
28- 6	A	土師器	坏	—	(2.4)	—	—	—	—	—	—	—	ヘラミガキ	—	—	1文字	5YR-7/3 にぶい橙	
28- 7	B	土師器	鉢	—	15.1	16.0	15.9	7.4	2.2	1.1	不明、円形指ナデ	ヨコナデ手持ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	—	—	—	5YR-8/3 淡橙	
28- 8	B	土師器	甕	—	(32.1)	21.0	17.8	—	—	—	—	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	—	—	—	5YR-6/3 にぶい橙	外 煤付着
28- 9	B	土師器	甕	—	(14.6)	18.7	16.6	—	—	—	—	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ	—	—	—	2.5YR-6/4 にぶい橙	外 煤付着
28-10	A	須恵器	甕	—	(4.7)	—	—	12.0	—	—	不明、手持ヘラケズリ	手持ヘラケズリ	ハケメ	—	—	—	2.5YR-5/3 にぶい赤褐	

RD518

番号		形態			法量(cm)						底部切離	調整			外傾度	墨書	色調	備考
図	位置・層	区分	器種	分類	器高	口径	体径	底径	口/底	口/高		外面	内面	分類				
8- 1	A	あかやき	甕	—	(18.5)	—	—	9.3	—	—	—	タタキ、手持ヘラケズリ	ハケメ	—	—	—	5YR-8/3 淡橙	外 煤付着

遺構外出土遺物

番号		形態			法量(cm)						底部切離	調整			外傾度	墨書	色調	備考
図	位置・層	区分	器種	分類	器高	口径	体径	底径	口/底	口/高		外面	内面	分類				
33- 8	A	須恵器	坏	A	(4.0)	13.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5YR-8/4 浅黄橙	
33- 9	A	あかやき	坏	—	(2.6)	—	—	6.0	—	—	回転糸切	—	—		—	—	7.5YR-8/3 にぶい橙	
33-10	Ia	須恵器	坏	—	(1.4)	—	—	6.0	—	—	回転糸切	—	—		—	—	N-6/0 灰	
33-11	A	あかやき	坏	—	(1.8)	—	—	6.0	—	—	回転糸切	—	—		—	—	7.5YR-6/3 にぶい橙	
33-12	撹乱	須恵器	坏	—	(1.2)	—	—	5.7	—	—	回転糸切	—	—		—	—	7.5YR-8/1 灰白	
33-13	A	あかやき	坏	—	(1.6)	—	—	5.8	—	—	回転糸切、一部ヘラケズリ	—	—	W5	—	—	5YR-7/6 橙	
33-14	撹乱	土師器	甑	—	—	—	—	—	—	—	—	手持ヘラケズリ	—	—	—	—	7.5YR-7/3 にぶい橙	
33-15	A	須恵器	甕	—	—	—	—	—	—	—	—	タタキ	タタキ	—	—	—	7.5Y-6/1 灰	
33-16	A	須恵器	甕	—	—	—	—	—	—	—	—	タタキ	タタキ	—	—	—	10YR-3/1 黒褐	
33-17	A	須恵器	甕	—	—	—	—	—	—	—	—	タタキ	タタキ	—	—	—	7.5YR-4/1 灰	
33-18	A	須恵器	甕	—	—	—	—	—	—	—	—	タタキ	タタキ	—	—	—	N-5/0 灰	

表6　出土土器一覧

3　中世以降の遺構と遺物

検出遺構　第1次～第4次調査で、検出した中世以降の遺構は、溝跡5条、土坑4基、柱穴群である。

溝　　跡　RG801・802は第1次・第2次・第4次調査区で検出されており、遺跡の東側県道沿い西側に緩やかに弧を描くように、90m以上続いていることが確認された。幅の広い801が東側、802が西側（弧の内側）に並走する。溝の幅は801が5.88～6.86m、802が0.37～1.35mをはかり、深さは801が確認面で1.86mをはかり、802が0.05～0.67mである。底面の標高は1・4次調査区南端での比較では、北の1次が0.2mほど低く、802の底面では南の4次より北の2次調査区で1.7mほど低くなっている。このことから、801・802とも北に向かって低くなっていると想定されるが、4次調査区がもともと高い位置にあったためと考えられる。

断面形は801が逆二等辺三角形を呈する薬研堀状で、802の浅い皿状の部分は削平を受けており、本来は逆台形～U字形を呈する。土層観察では、801と802の下部埋土が共通し、上部を礫を含む混合土が西側からのみ流入していることが確認されている。このことから、801・802は共存し802の西側に土塁のようなものがつくられ、崩壊土が801・802を埋めたものと考えられる。801・802の間の平坦面が堅くなっており、犬走りとして機能していたものであろう。801には水成堆積の痕跡は認められないが、802には水成堆積と思われる砂粒が見られる。

RG801・802にみられるピットは、北側の第2次調査区には見られず、1・4次調査では精査した溝の西壁に集中して見られる。ただし、4次調査区の南側では、西壁上部の121.5～121.9m付近に、北の1次調査区では、西壁下下半の120.6～121.0m付近に集中しており、一様ではない。80口を検出しているが壁面全面を精査していないため、間尺や配置等は検討課題である。おそらく土留めのような施設ではなかったかと推定される。

RG804・805はいずれもRG801と重複しているが、新旧関係は不明である。RG805はRG801と直交しており、意識してRG801に繋いでいるようで、排水等の施設の可能性がある。

遺　　物　RG801からは、おもに15～17世紀の国産陶磁器（美濃・肥前・唐津産）や青磁などが出土しているが、埋土上層には近代までの遺物が混入する。その他の溝からはおもだった出土遺物は見られない。RG801～805は、埋没状況や溝の配置等からは時間的に大差があるとは考えにくく、同時期に存在していた可能性が想定される。

土　　坑　土坑は4基検出しているが、第1次調査区の北東端に集中し、平面形は不整円形2基、不整楕円形2基である。規模は2mを越えるものはなく、深さは、およそ0.2～0.7mである。遺物の出土もほとんどないため、時期は不明である。

ピ　ッ　ト　1・3・4次調査では、ピット群を検出しており総計197口を数え、何らかの建物跡を構成する柱穴と考えられるが、明確な遺構を確認し得ないものであった。これらピット群の分布はRD513西側、各竪穴住居跡周辺に多く検出された。

このように土塁をともなうと想定される堀が確認されたのであるが、現状では、土塁や堀を地表観察することができず、また調査でも建物跡などの共存する遺構も明確にすることができなかった。今後、調査の進展により、この時代の様相も次第に明らかになっていくであろう。

【引用・参考文献】

1998　八木・似内・津嶋・黒須・太田代「馬淵川流域」『東北地方の古代集落』第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料

1998　西野　修「北上盆地北部」『同』

1998　伊藤博幸「北上盆地北部」『同』

1997　伊藤博幸「律令期村落の基礎構造－胆沢城周辺の平安期集落」『岩手史学研究』第80号

1991　平川　南「墨書土器とその字形－古代村落における文字の実相－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集

1981　盛岡市教育委員会「志波城跡Ⅰ」

1974　都南村　都南村史編集委員会＊1「通史編」『都南村史』Ｐ.61

報告書抄録

ふりがな	おとべいせきぐん　おとべほうはっちょういせき
書名	『乙部遺跡群－乙部方八丁遺跡－』
副書名	平成6・7・9年度発掘調査概報
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	黒須靖之他
編集機関	盛岡市教育委員会
所在地	〒020-0835　岩手県盛岡市津志田14地割37番地2　TEL019－651－4111（内線 7353）
発行年月日	1998年3月31日

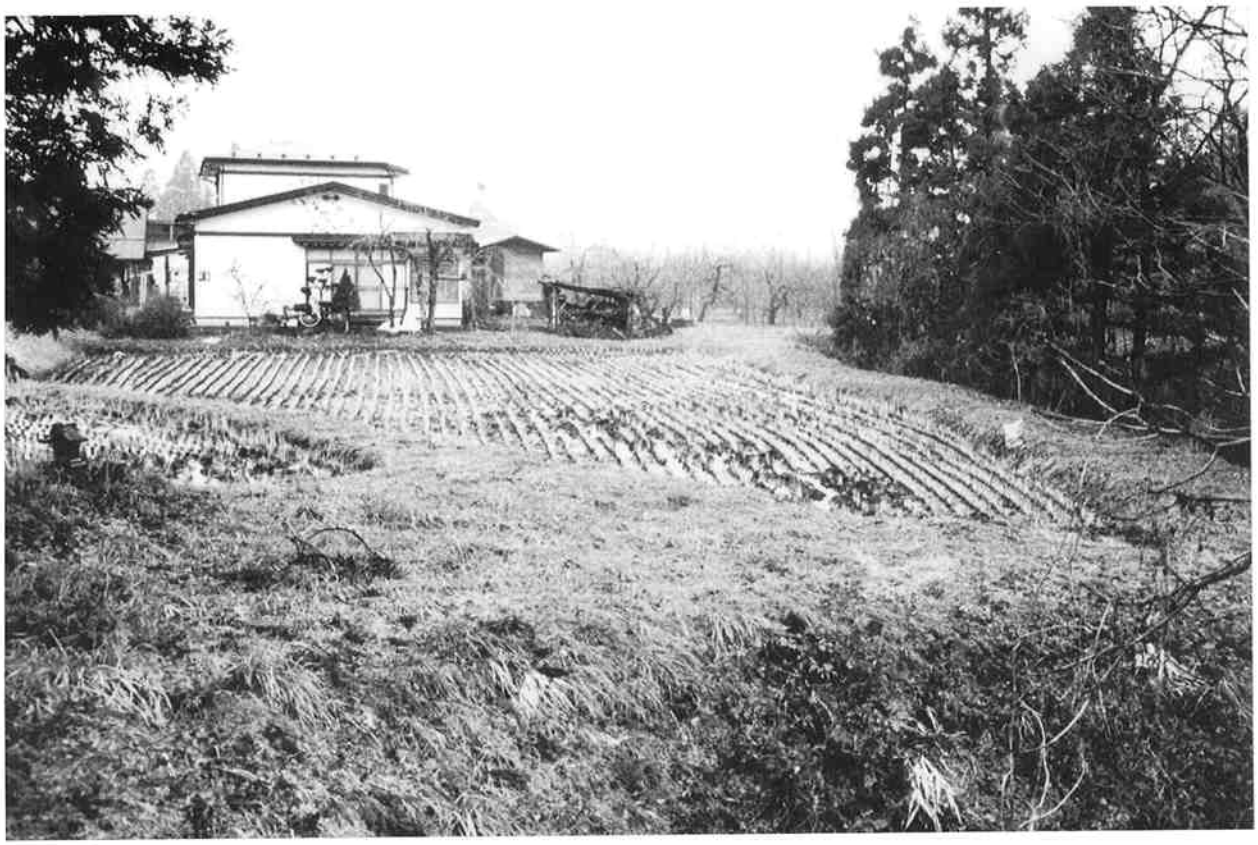
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おとべほうはっちょう 乙部方八丁遺跡	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 おとべ　ちわり 乙部32地割	03201		39° 36′ 02″	141° 12′ 14″	第1次 1994.11.01 ～11.28	604㎡	宅地造成
				39° 36′ 04″	141° 12′ 12″	第2次 1995.05.15 ～05.13	186㎡	専用住宅
				39° 36′ 02″	141° 12′ 13″	第3次 1995.05.15 ～06.13	371㎡	宅地造成
				39° 36′ 02″	141° 12′ 14″	第4次 1997.08.06 ～09.11	308㎡	専用住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
おとべほうはっちょう 乙部方八丁遺跡	集落跡 1・3次	縄文時代 平安時代 中世以降～	陥し穴　5基 貯蔵穴　2基 掘建柱建物跡　1棟 竪穴住居跡　4棟 土壙　18基 土壙　4基 溝跡　4条 柱穴群	縄文土器・石器 須恵器・あかやき土器 土師器・砥石・刀子	墨書土器が21点出土している
	2次	縄文時代 平安時代 中世以降～	陥し穴　2基 貯蔵穴　1基 竪穴住居跡　1棟 溝跡　2条 （1・3・4次同一遺構）	縄文土器・石器 須恵器・あかやき土器・土師器	
	4次	縄文時代 平安時代 中世以降～	陥し穴　7基 貯蔵穴　4基 竪穴住居跡　2棟 溝跡　3条 柱穴群	縄文土器・石器 須恵器・あかやき土器・土師器 陶磁器・鉄製品	

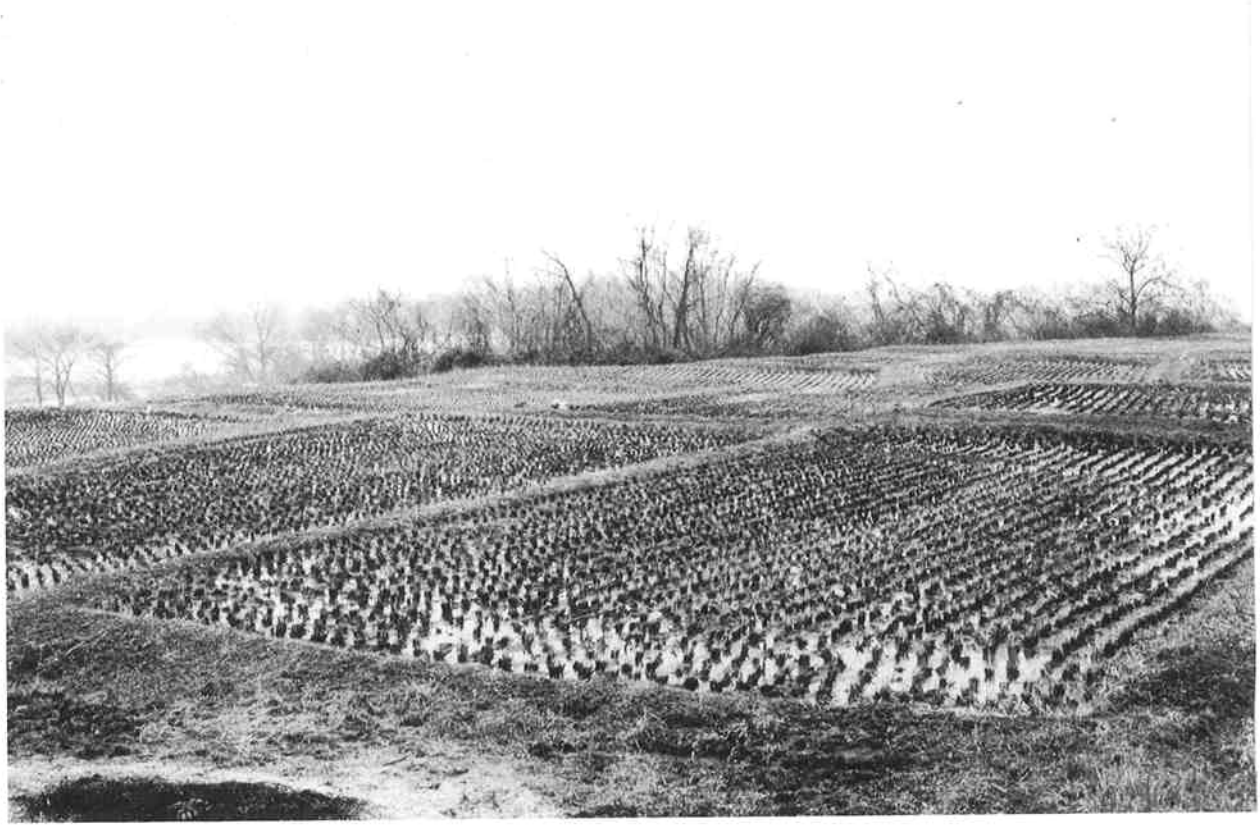
写 真 図 版

乙部遺跡群全景（北から）

第２図版

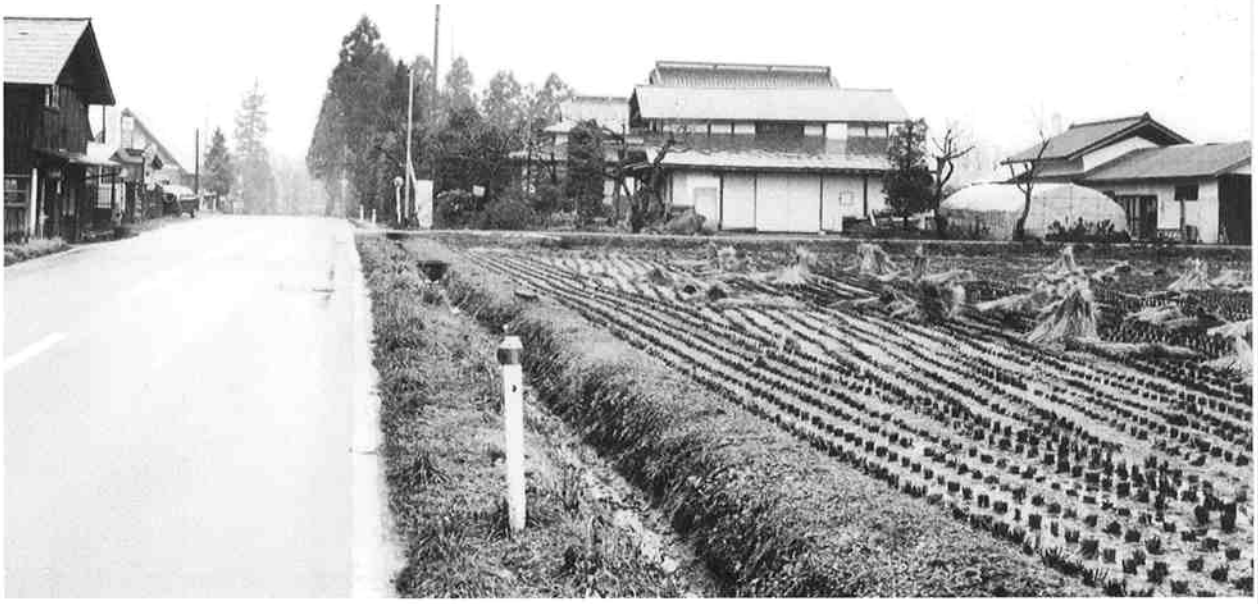


遺跡地形（1）



北東部
（東から）

遺跡地形（2）

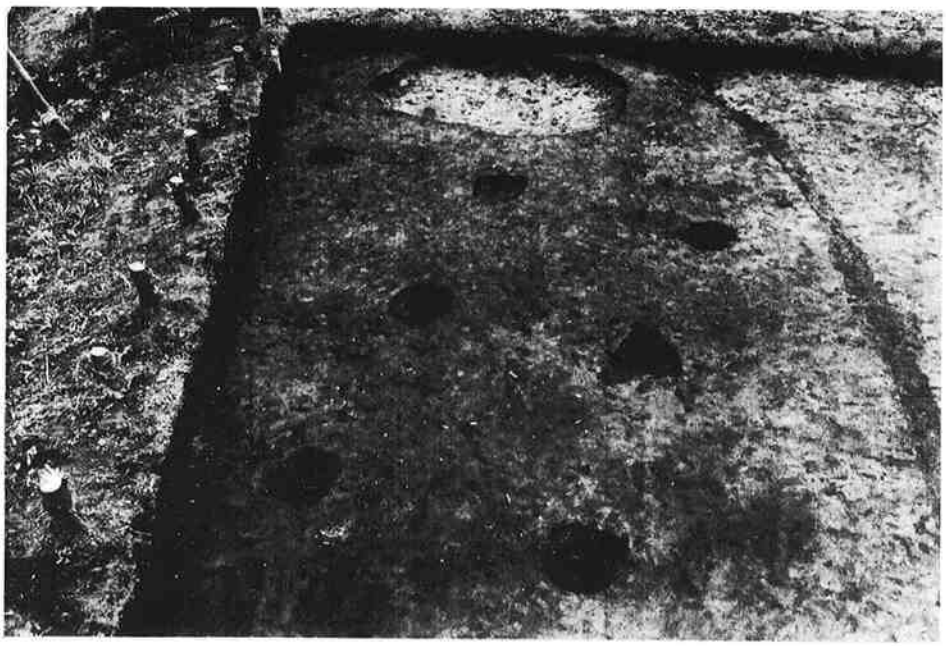


南西部
（東から）

第 4 図版

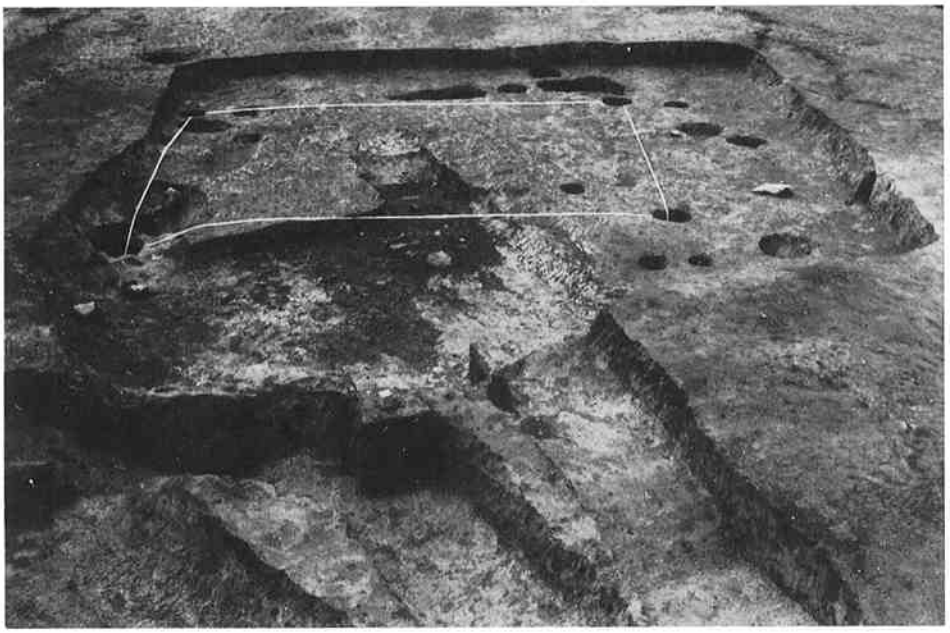
第 1 次調査区全景
（東から）

第 3 次調査区全景
（西から）



RB501堀立柱建物跡
（東から）

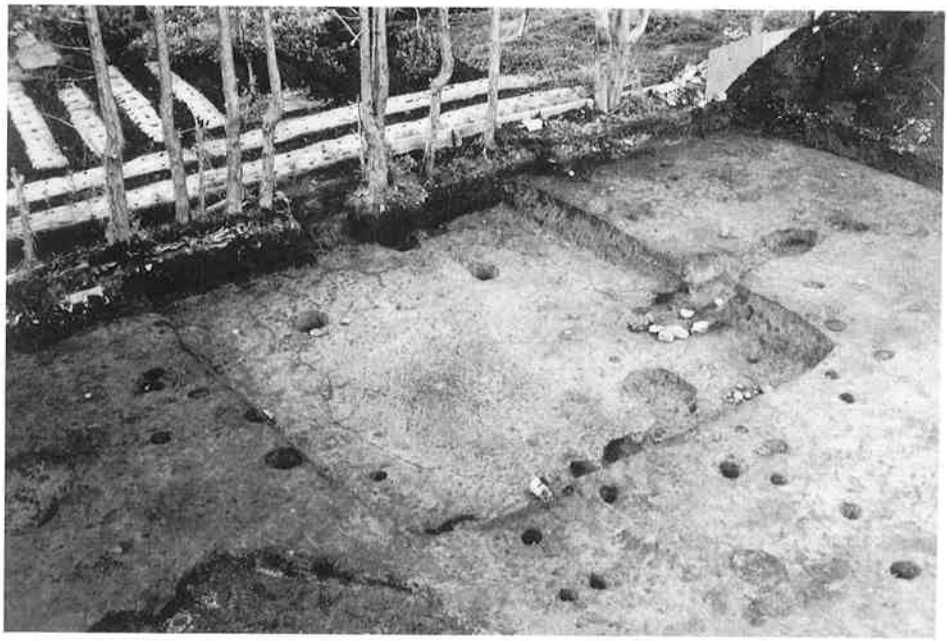
RA501竪穴住居跡
（西から）



RA502竪穴住居跡
（東から）

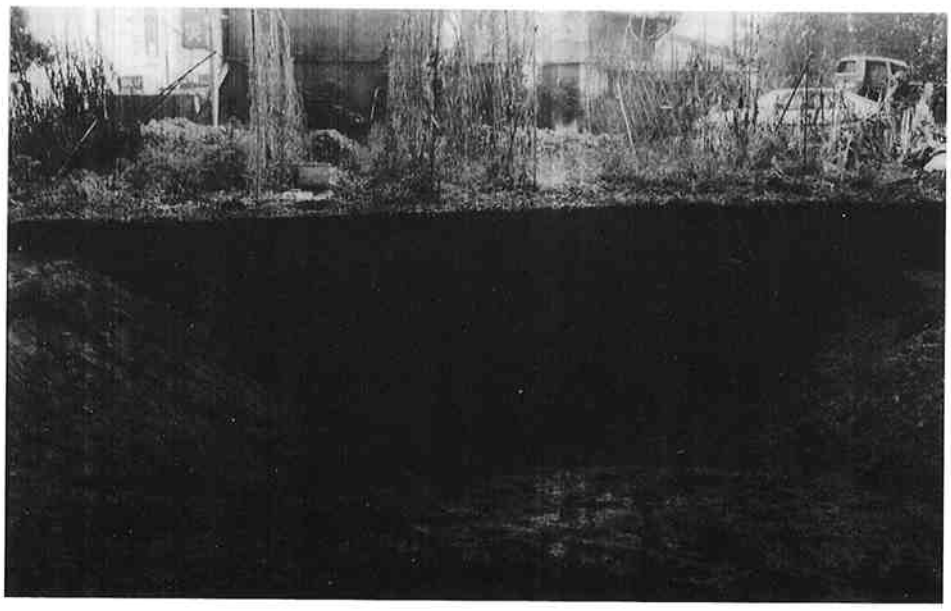
RA503竪穴住居跡
（南西から）

第6図版



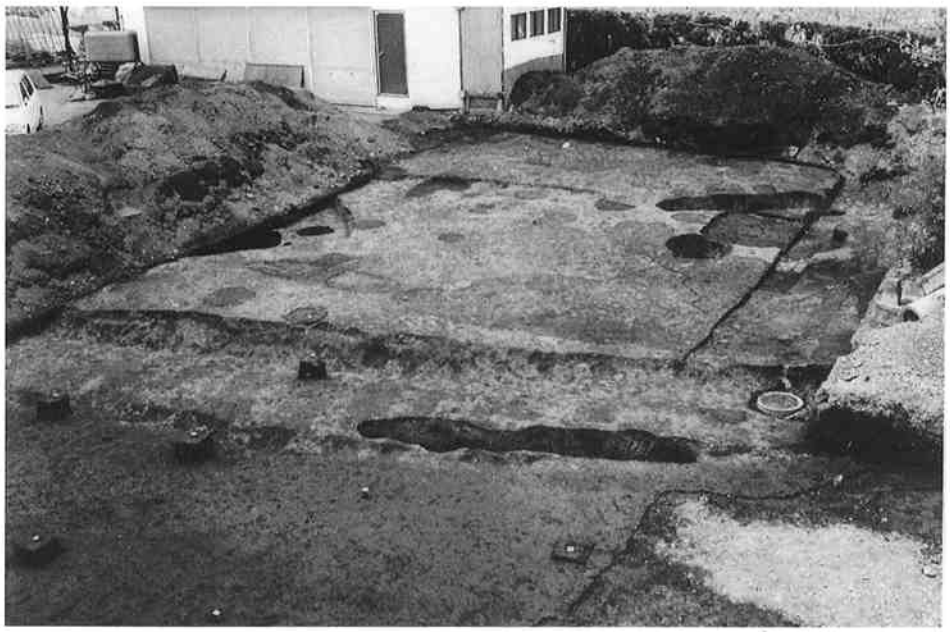
RA505竪穴住居跡
（南から）

RG801・802溝跡
（南から）

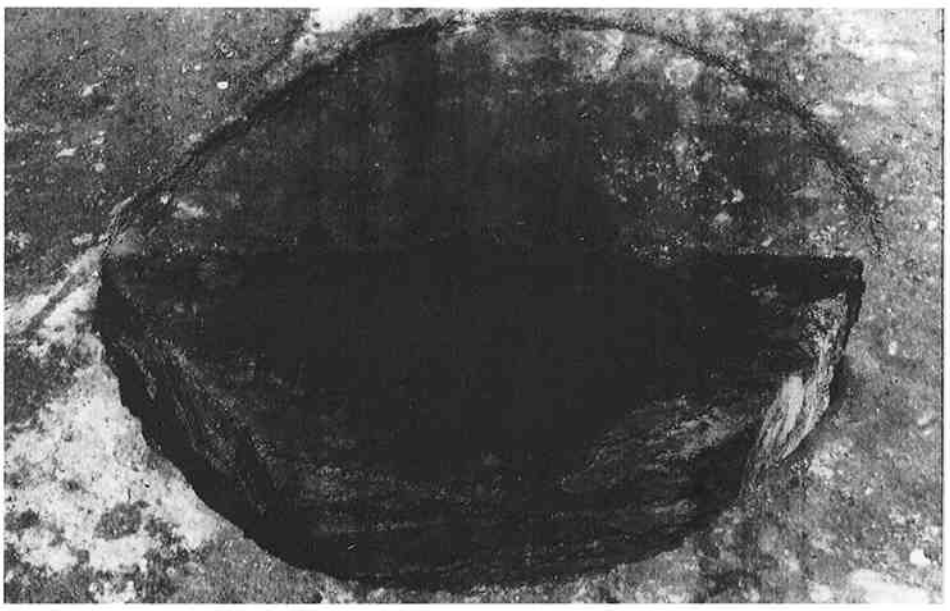


RG801溝跡断面
（北から）

第２次調査
東側調査区全景
（南から）



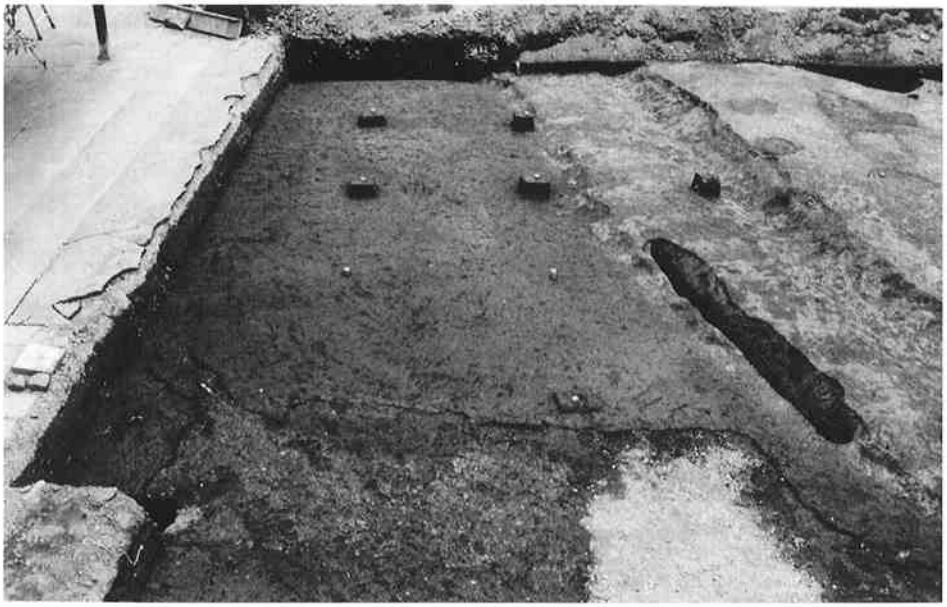
東側調査区
（北から）



RD109土坑断面

第8図版

RA504竪穴住居跡
（北から）



RG801・802溝跡
（北西から）

RG801・802溝跡
（南西から）

第４次調査区全景
（東から）

第４次調査区全景
（南から）

RD117～119土坑
（南東から）

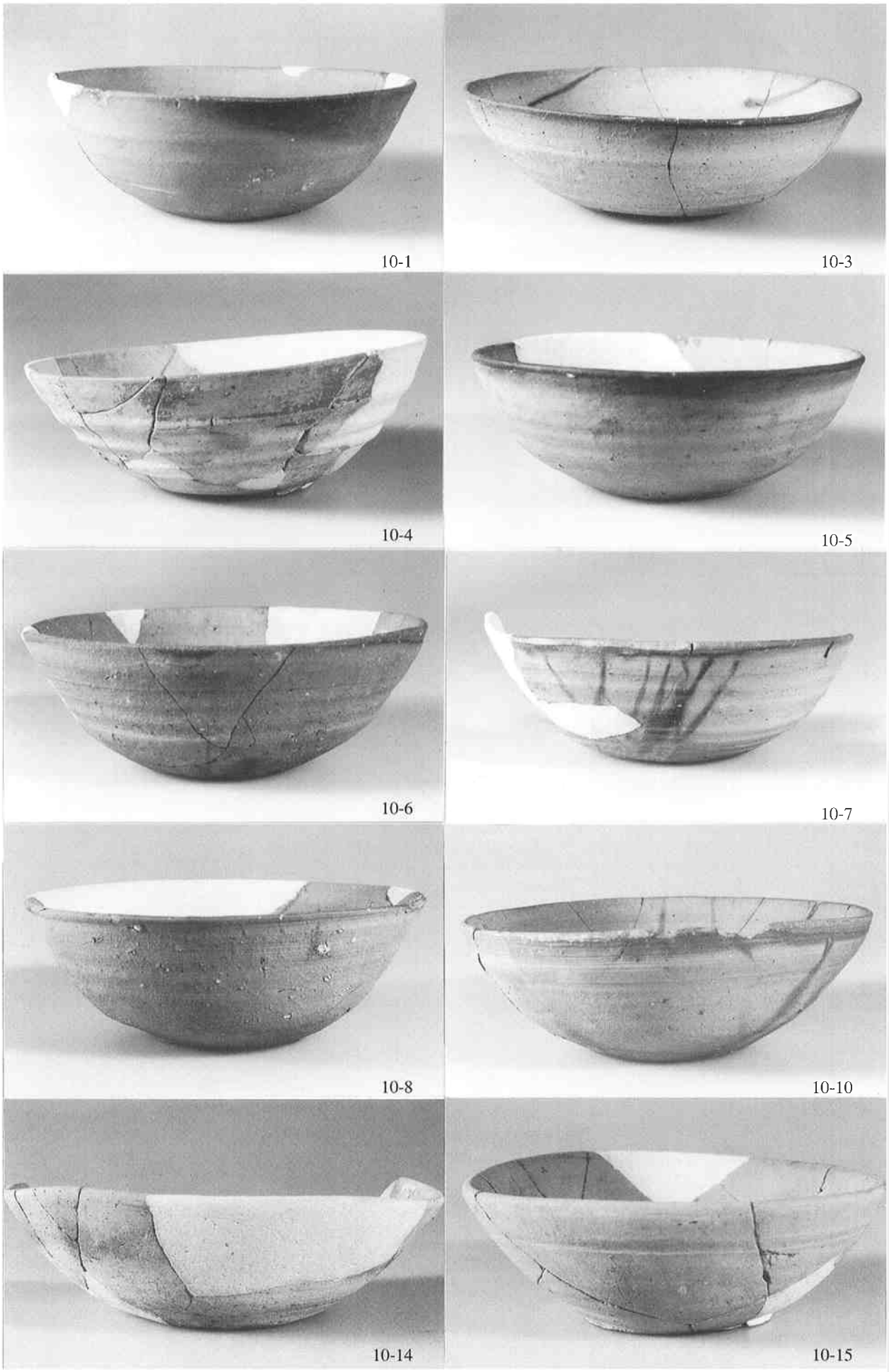
第10図版

RD114土坑
（南西から）

RG801・802溝跡
（北から）

RG801溝跡

RA501竪穴住居跡
出土遺物（1）



第12図版

RA501竪穴住居跡
出土遺物（2）

10-16

10-18

10-18

10-21

10-22

10-23

10-24

10-25

10-26

10-26

RA501竪穴住居跡
出土遺物（3）

11-29

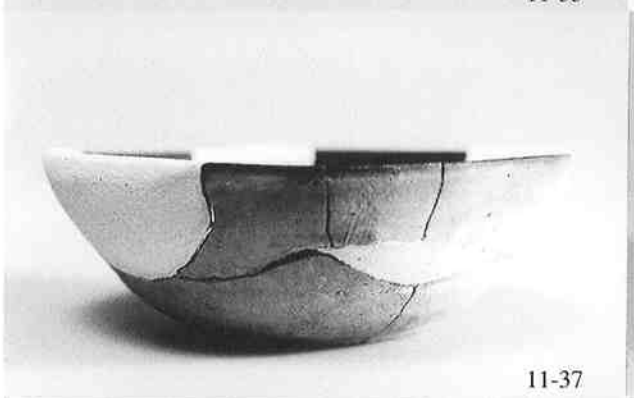
11-30

11-31

11-32

11-33

11-34


11-37

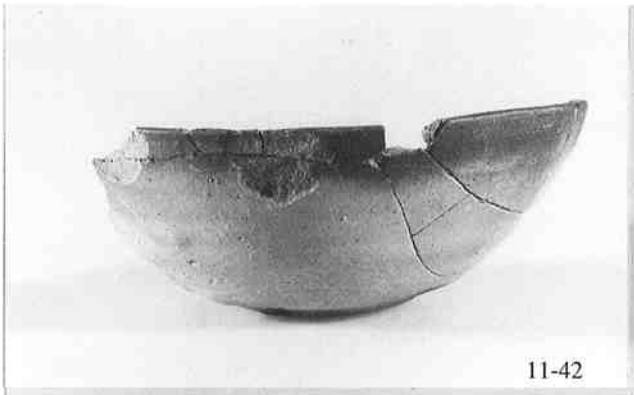
11-38

11-39

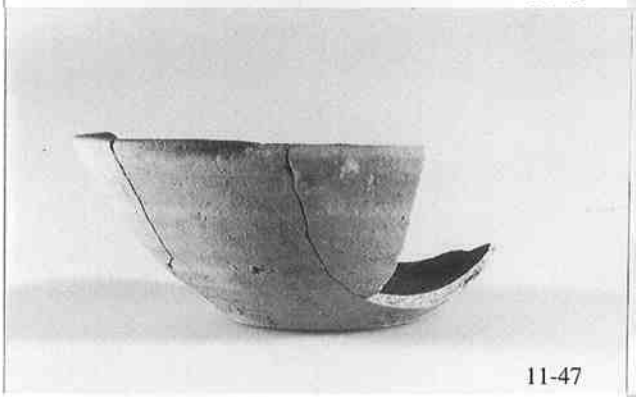
11-40

第14図版

RA501竪穴住居跡
出土遺物（4）

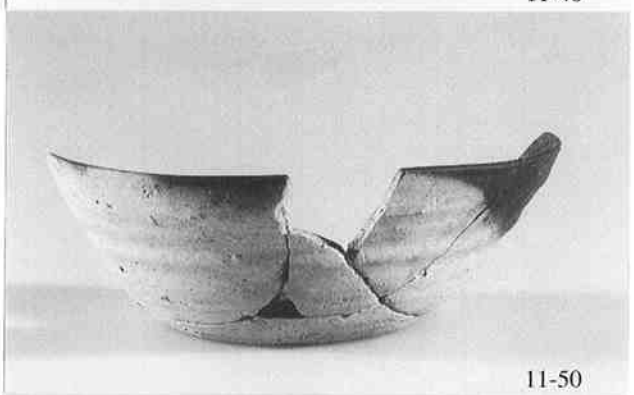

11-42

11-44


11-47

11-48

11-49


11-50

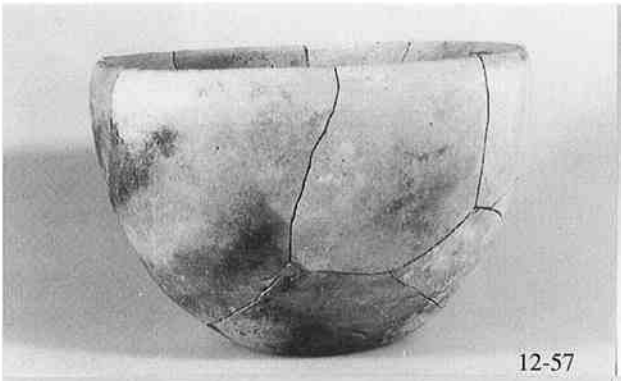
17-1

11-55

12-58

12-59

RA501竪穴住居跡
出土遺物（5）


12-57

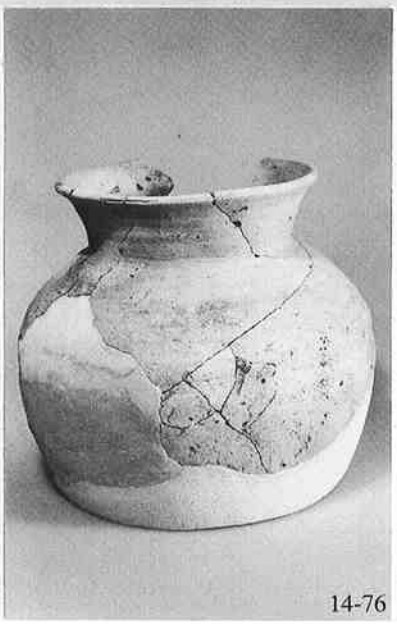
12-57

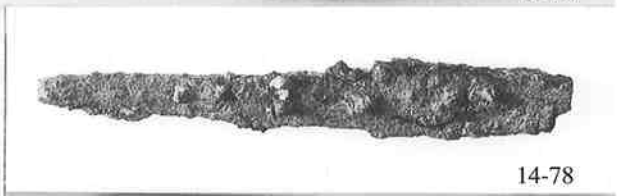
13-71

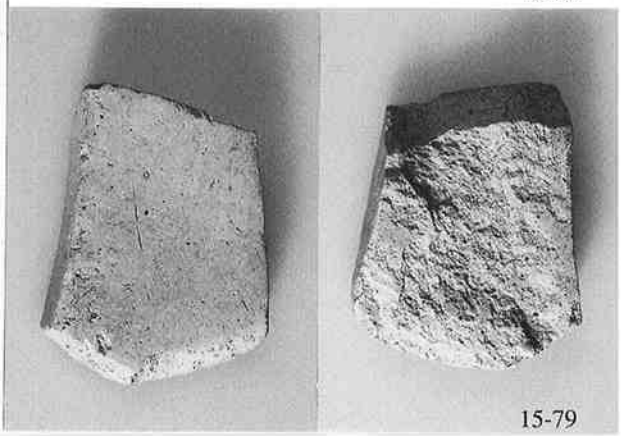
13-72

13-73

13-75

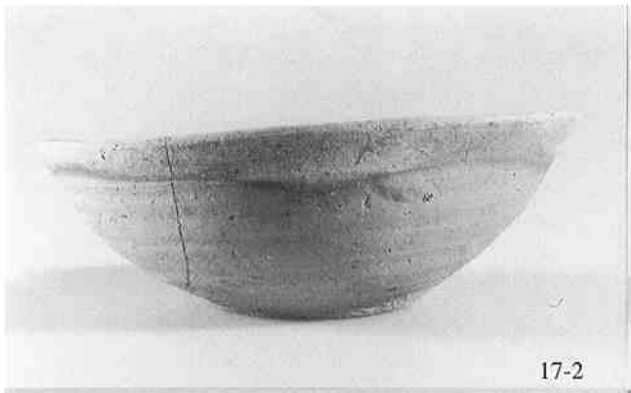

14-76

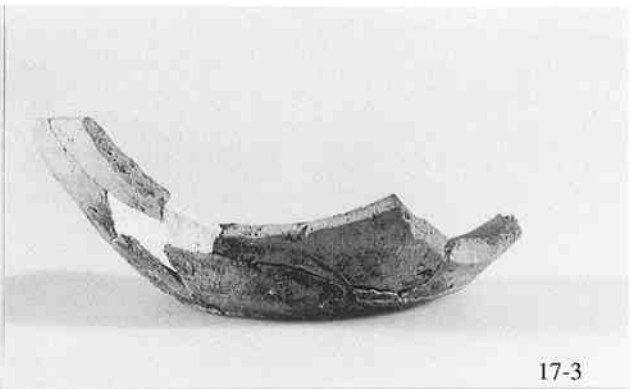

14-78

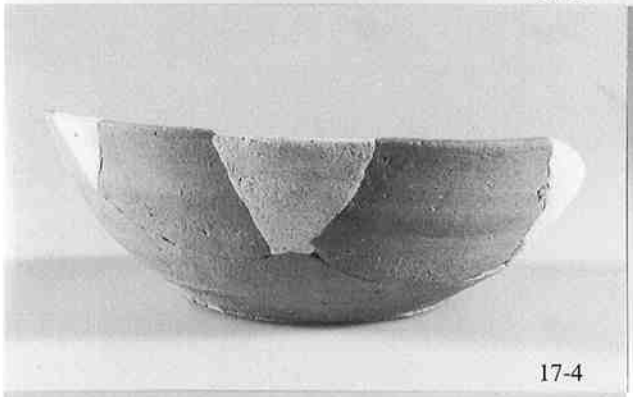

15-79

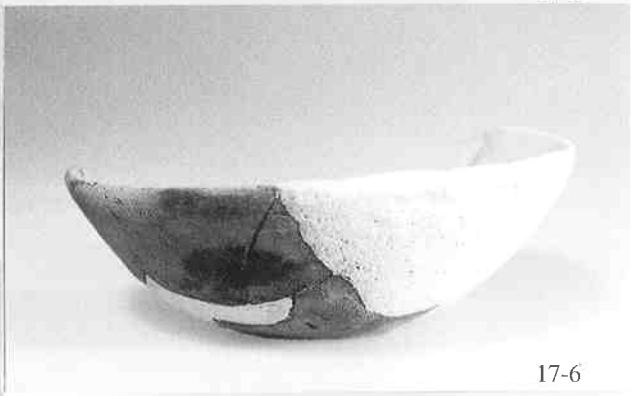
第16図版

RA502竪穴住居跡
出土遺物（1）


17-2


17-3

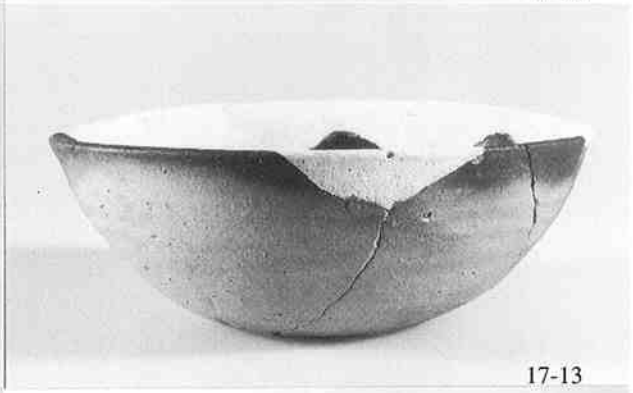

17-4


17-6

17-9

17-10

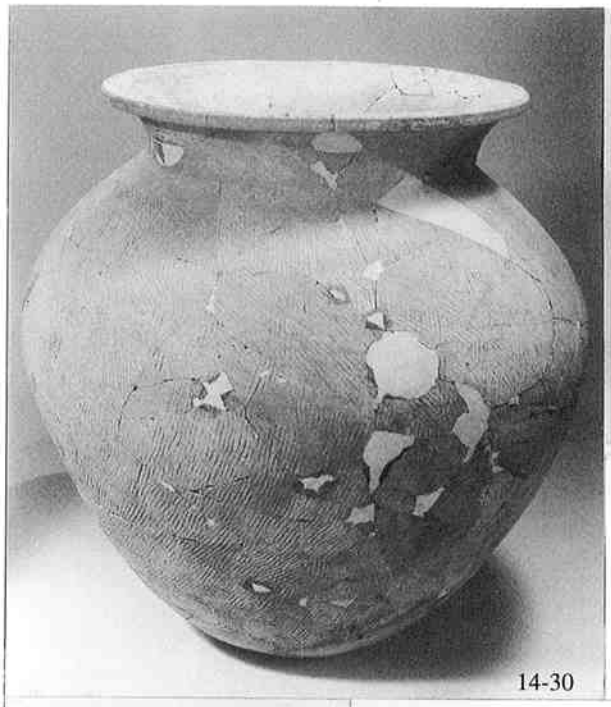
17-11

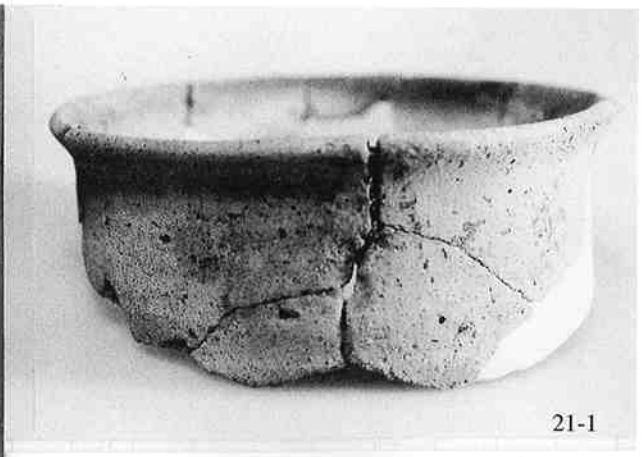

17-13

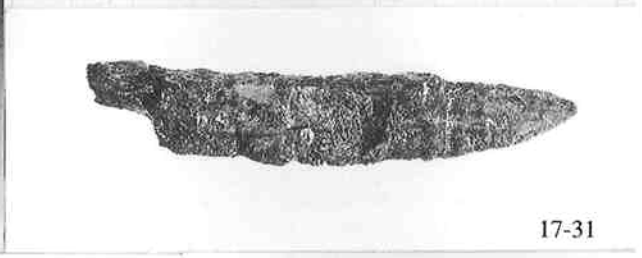
17-14

18-25

RA502・503
竪穴住居跡
出土遺物（2）


14-30

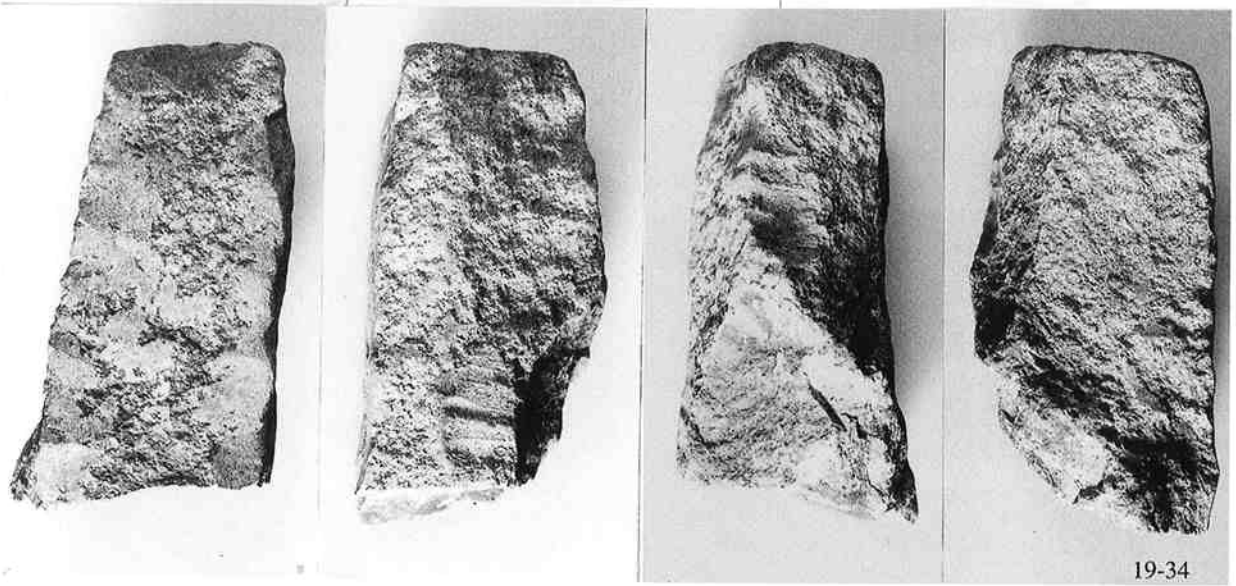

21-1


17-31

17-32

17-33

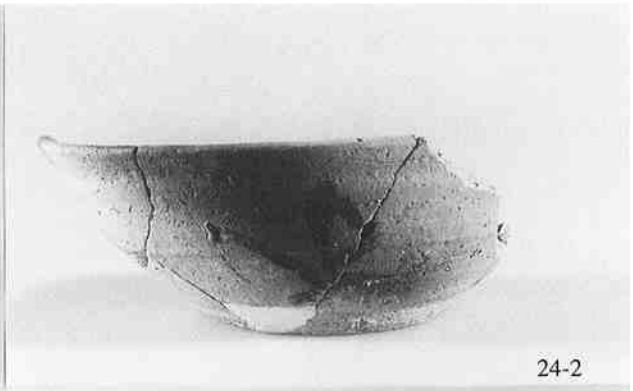
19-35


19-34

第18図版

RA505竪穴住居跡
出土遺物（1）

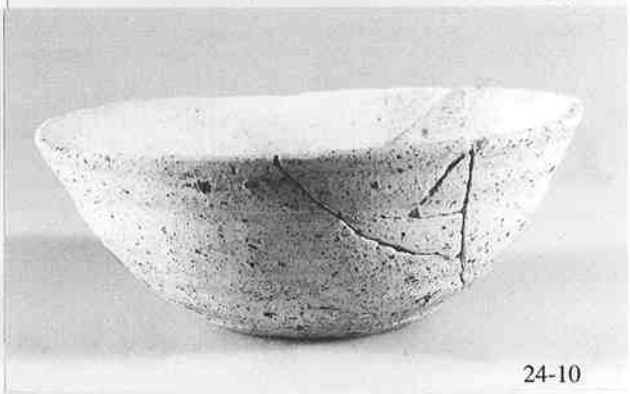
24-1


24-2

24-6

24-7

24-8


24-10

24-14

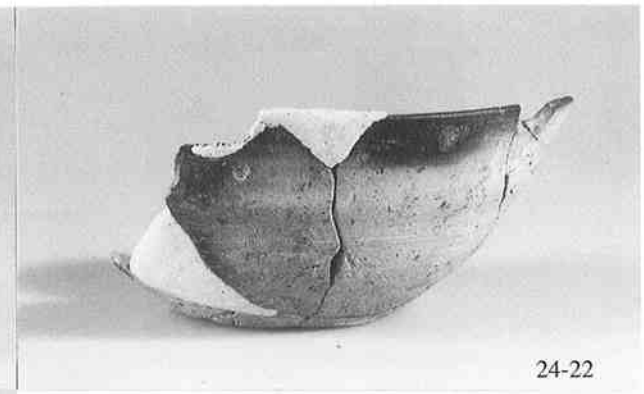
24-15

24-16

24-19

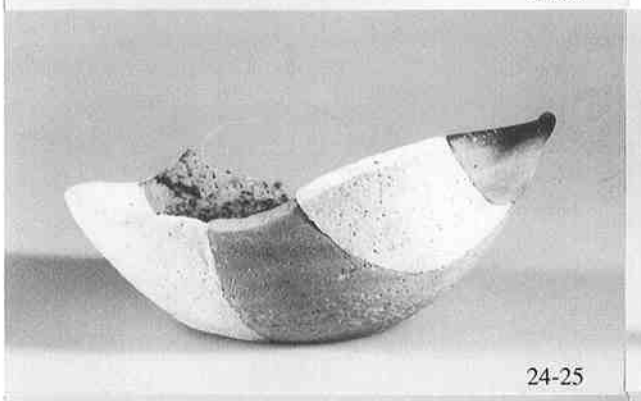
RA505竪穴住居跡
出土遺物（2）

24-20


24-22

24-23

24-24


24-25

25-26

25-27

25-28

25-29

25-35

第20図版

RA505竪穴住居跡
出土遺物（3）

25-40

25-39

25-41

25-42

25-43

26-44

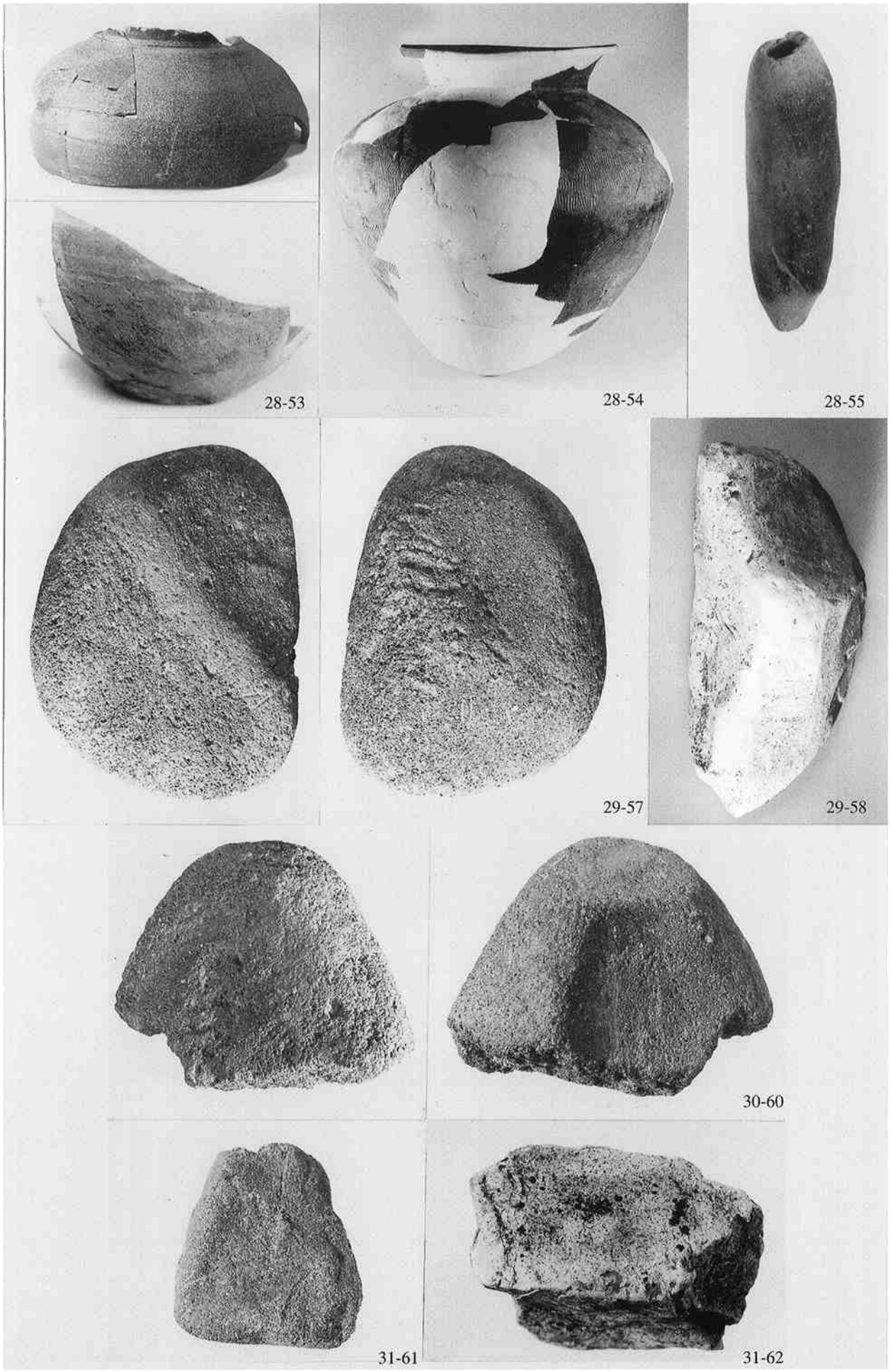
26-46

27-49

27-48

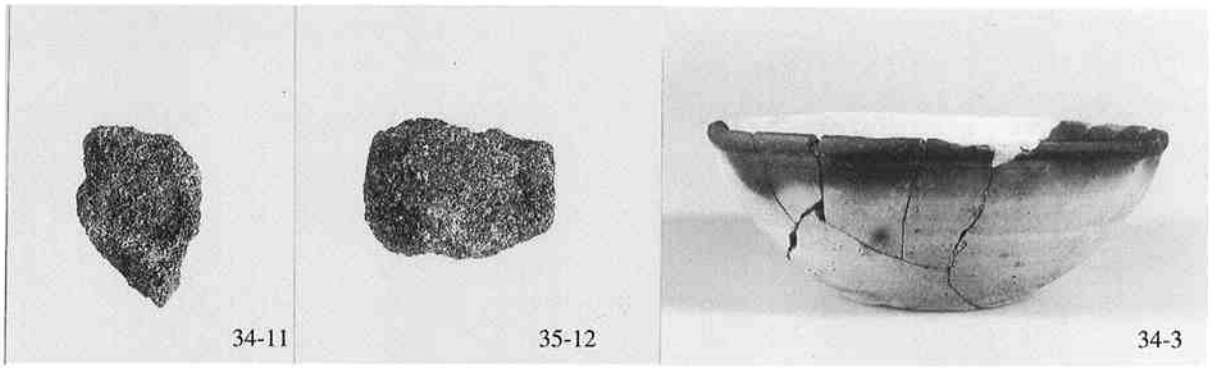
27-50

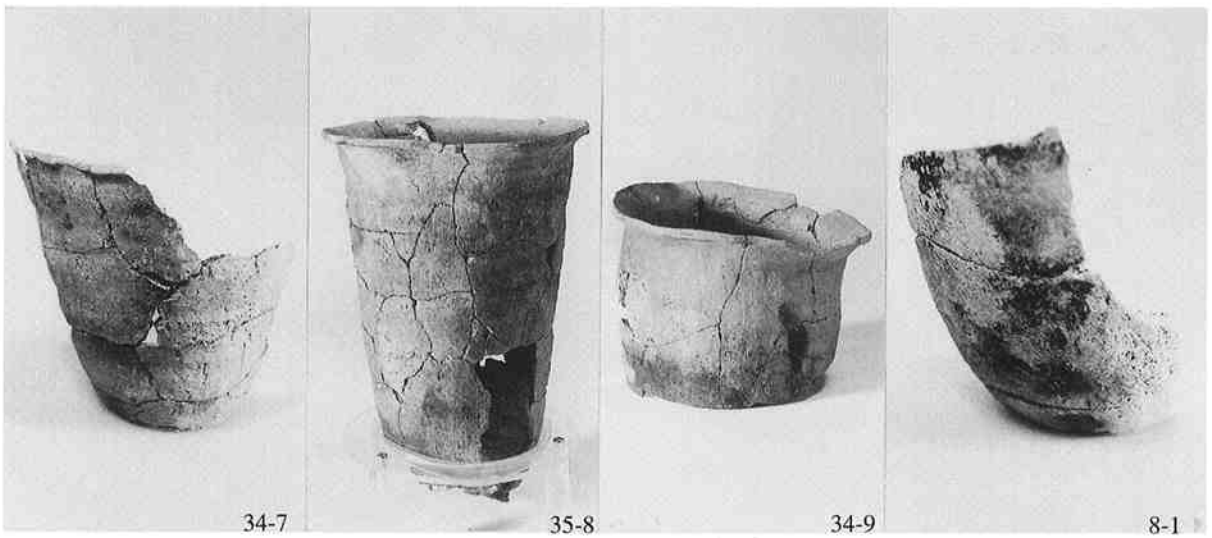
RA505竪穴住居跡
出土遺物（4）



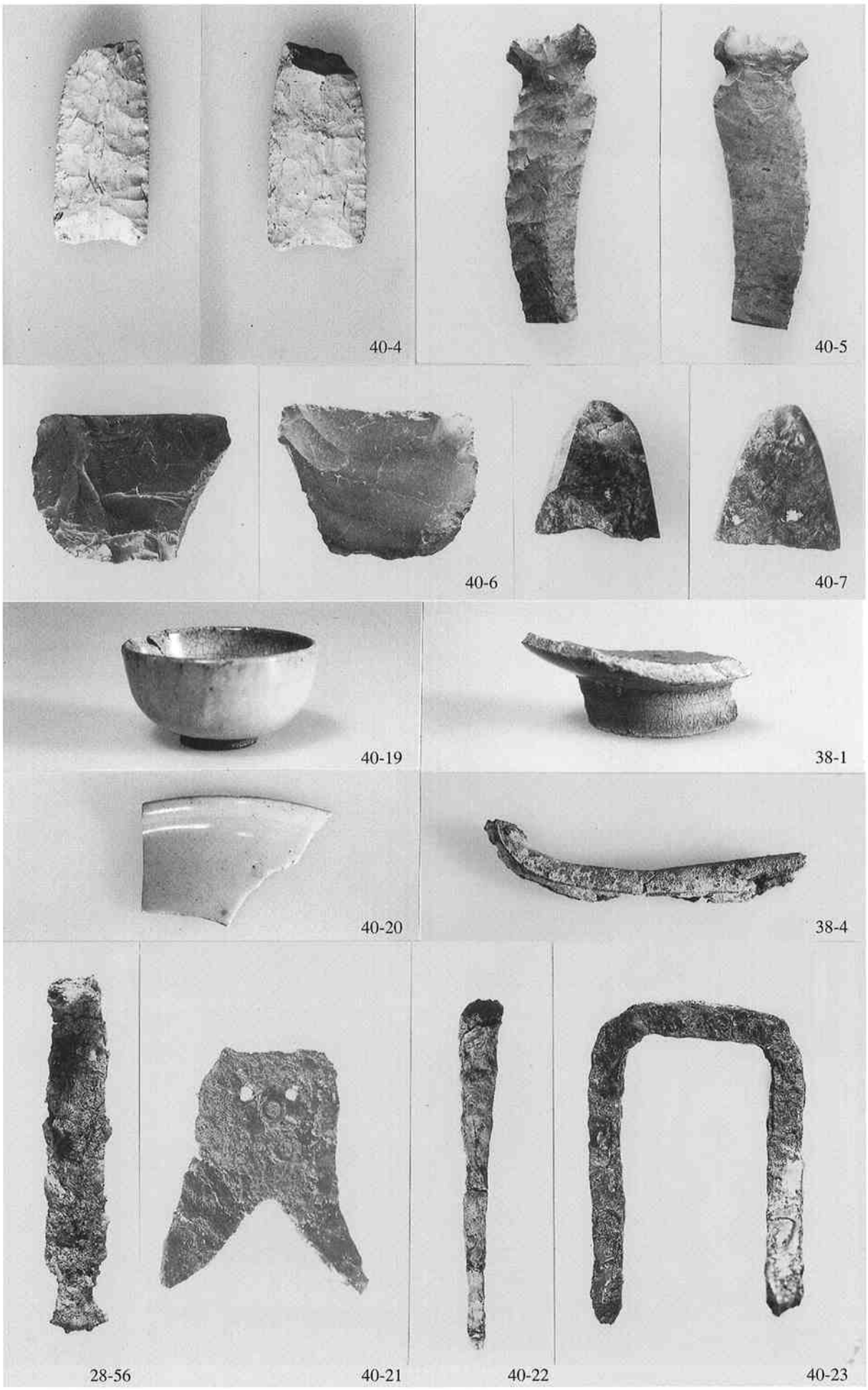
第22図版

RA505竪穴住居跡
出土遺物（5）



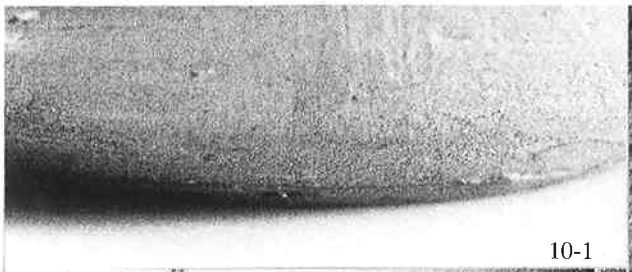


RG801
遺物包含層
その他出土遺物



第24図版

墨書土器（1）


10-1

10-18

11-48

11-54

11-16

11-14

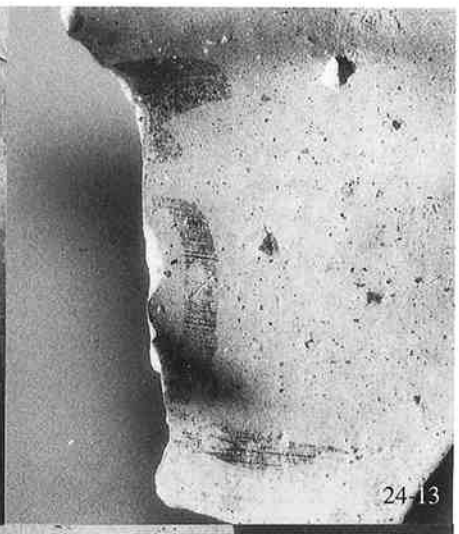
16-7

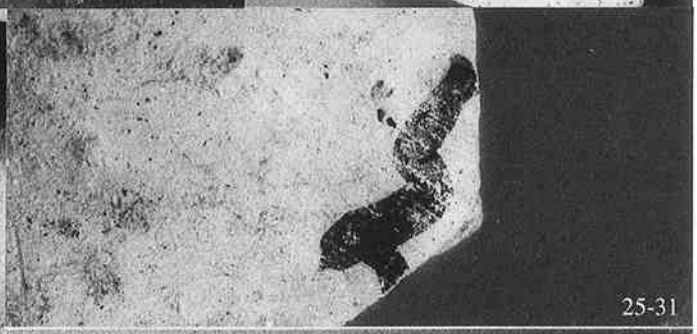
16-17

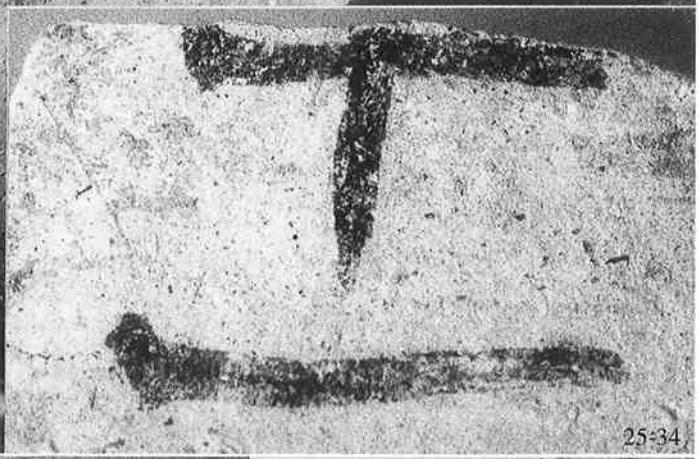
24-16

25-26

墨書土器（2）







乙 部 遺 跡 群

乙部方八丁遺跡

―― 平成６・７・９年度発掘調査概報 ――

1998. 3

発行　盛岡市教育委員会
〒020-0835
岩手県盛岡市津志田14地割37番地２
TEL (019)651－4111
FAX (019)639－9047

印刷　有限会社 橋本印刷
〒020-0015
岩手県盛岡市本町通一丁目15番29号
TEL (019)652－1354(代)
FAX (019)652－1355